

(お石はいそくと奥へ入る。)

傳兵衛。 さあ、若旦那もおいでなされませ。

文七。 むい。(空をみる。) 好い天氣になつたな。

傳兵衛。 三月も末になつて、花も大抵は散りかけましたが、今が一年中では一番よい時節でござり
ますな。

文七。 一年中で一番いい時節…… 去年の春から足かけ二年十五ヶ月、日の目も碌々見ずに暮し
た身には、うき世の春風が取分けて身にしみる。昔からいふ花の三月、まつたくいい時節
だな。

(文七はいつまでも空をながめてゐる。暖簾口より、女中およし出づ。)

およし。 もし、番頭どの。奥で呼んでられます。

傳兵衛。 あい、あい。

(傳兵衛は女中と共に奥に入る。上の方より最手の市右衛門、廿四五歳、船頭のせがれにて素人相撲
のこしらへ、角樽をさげて出づ。ついで極印千右衛門、廿三歳、極印鍛冶屋のせがれにて一束
の鯛を持ち出て出づ。又そのあとより三つ引治兵衛、からくり六兵衛、かひたての吉右衛門、いづれ

もあれば者のこしらへにて出づ。)

市右衛門。 おい、かりがね。生きて戻つたか。今そこでかみなりに行き逢ふたら、文七どんは五體満
足で戻つたといふ。やれ、めでたい。とりあへず何ぞのお祝ひをせねばなるまいと、居あ
はせた者だけが相談して、心ばかりの祝ひのしるしぢや。

千右衛門。 ほかの者共はいづれあとから来る。まあこれだけを納めて置いて貰ひたい。どうでおれ達
の祝ひものぢや、こんなものであらうかい。は、は、は、は。

(ふたりは笑ひながら角樽と鯛を出して店さきに置く。)

文七。 こんなものを貰つてはおれが困る。折角ぢやが、持つて歸つてくれ。

治兵衛。 これでは祝ひものが不足かな。

文七。 いや、不足ではないが……。

六兵衛。 不足でなくば、こゝろよく納めてくれ。

吉右衛門。 納めてくれ。

(奥の暖簾口よりお石がうかがつてゐる。)

文七。 (ちよつと奥を見かへつて) これはどうしても受取られぬ。さつきも庄九郎に云うたことぢや

市右衛。が、おれはむかしの文七でない。おやま買ひや喧嘩買ひ、そんな仲間とは附合ひ無しぢや。附合ひのないものから物貰ふいはれはない。酒も肴も持つて歸つてくれ。それではもうおれ達と附合ひ無しか。

(五人は呆れたやうに顔を見あはせる。)

文七。これから親が大事、家が大事、わが身が大事、のらかはいて遊びあるいてはゐられぬ。これ、しろ。

(文七は仕事場へゆきて、両手の先を藍壺に突つ込み、両手を藍に染めてくる。)

文七。暖簾にいつはりのない紺屋商賣、あしたからは此の通り、両手を五色に染めて働かねばならぬ。

五人。むい。(再び顔を見あはせる。)

文七。おあつらへの雁金染なら、なん時でも頼まれませう。なにぶん御最良をねがひます。不思議に變つたなあ。

市右衛。おまへ達には不思議にみえるか。は、い、い、い。(笑ひながら懐紙で両手をふく。)

千右衛。さういふことなら仕方がない。もう一度かみなりや、ほかの奴等とも相談して、又あらた

めて出直すとしてようか。

四人。さうぢや、さうぢや。

文七。さあ、さあ、早く持つて行つてくれ。

(市右衛門と千右衛門は澁々ながら角樽と鯛を持つ。)

市右衛。なんだか狐に化かされたやうな。まあ、よいわ。行け、ゆけ。

(五人は文七を睨みまはして、上のかたへ立去らうとする。)

文七。これ、ほかの者もみな無事か。

市右衛。お、どの鬼共も仕合せよく、一匹も缺けずに角をふり立てゝゐるわ。

文七。誰に逢つても、文七はもう仲間はずれぢやと云つてくれ。

(五人は答へずに去る。文七は腕をくんで考へてゐる。お石は暖簾を出て奥に向つて呼ぶ。)

お石。誰か手桶に水を汲んで来や。

文七。(ふり向く。)おふくろ様はそこにおるでなされましたか。わたくしが赦免になつたをすぐに

聞いて、昔のあばれ仲間がぞろぞろと押掛けてくるには迷惑いたします。

お石。押掛けて来るだけならまだよいが、揃ひも揃つた無法者、仲間はづれの仕置ぢやなどと、

文七。

お石。

どんな亂暴を仕掛けまいものでもない。かならず氣をつけねばなりません。腕づくならばこつちにも覚えのあること。仲間はずれを根に持つて萬一あいつ等が喧嘩など仕掛けましても、些とも怖いことはござりませぬ。まあ、御安心なされませ。さうは云つても多勢に無勢、もしもの怪我でもあつてはならぬ。何とかおとなしく話をし

文七。

お石。

さあ。(かんがへてゐる。)
金づくでは濟むまいかなう。

文七。

濟まぬこともござりませぬが、わたくしが若氣のあやまりから、餓鬼大將にかつぎあけられて徒黨をつくつた雁金組、その仲間の相印に、どいつも這奴も左の二の腕にかりがねを彫つてをります。わたくしが穩便に仲間をぬけようと致しますれば、先づあいつ等の腕のほりものを消して遣らねばなりません。

お石。

文七。

して、その仲間の人数は……。
(指を折る)先づ坂本町のかみなり庄九郎、これはおまへも御存じの筈でござります。それから唯今こゝへまゐりました最手の市右衛門、極印千右衛門、三つ引治兵衛、からくり六

兵衛、かひたての吉右衛門、まだそのほかに庵の平兵衛、喧嘩屋五郎左衛門、とんびの勘右衛門、因果の清兵衛、あはせて丁度十人でござります。
(暖簾口より女中およしは手桶に水を汲んで出づ。)

お石。

お、まだ忘れた。手拭ひを持つて來や。

およし。

はい、はい。(引返して去る。)

お石。

その十人のほりものを焼き消すには、ひとり前いくらぐらるの金を遣つたらよからうな。なにを云ふにも相手がわるいので、こつちの暖簾を見かけて、ひとりが百兩、十人で千兩くれとも申しませうか。

お石。

え、千兩……。

文七。

いや、勿論それは先方の懸値、それを二割か三割に値切り倒しても、先づ二百五十兩か三百兩……。いや、かんがへてみると、そんな金は溝へすてるも同然。まあ、まあ、構はずに置くがよろしうござります。

(およしは手拭を持つて出づ。)

お石。

お、よし、よし。そこへ置いて行きや。

雁金 文七

(およしは店先に手拭を置いて去る。)

お石 さあ、文七、手を洗や。(柄杓にて手桶の水を汲む。)

文七 これは勿體ない。恐れ入りました。

(お石は水をかけてやり、文七は藍に染みたる手を洗へば、お石は更に手拭を取つてやる。)

文七 ありがたうござります。(手をふく。)

お石 このの暖簾をみかけてあの仲間にねち込まれては、店も迷惑、第一おまへの爲にもならぬ。

二百兩や三百兩でめい／＼のほりものを焼き消させ、かりがね組の縁を切ることが出来る

なら、叔父御には内證でその金を……

文七 それは無駄なこと、およしなされませ。

お石 無駄と云つてもおまへの身が大切、あんな無法者は後日の祟りがおそろしい。金で済むな

らば穩便に埒をあけるが無事といふものぢや。では、三百兩でよいのぢやな。

文七 口ではえらさうなことを云つてゐても、ひとり頭に三十兩づゝ列べてみせますれば、屹と

得心するに相違ござりませぬ。

お石 また出直して來ぬうちに、こつちで先手を打つのが勝ちや。金は今すぐに渡すほどに、お

墓まるりの歸り路にあの人々をたづね當て、早く埒をあけたがよい。

文七 はい。(頭を下げる。)

お石 くどくも云ふ通り、をぢ御には内證、ほかの者に覺られても悪い。金をそつと持つて來る

あひだ、しばらくこゝに待つてゐや。

(お石は早々に奥へ入る。)

文七 おい、俄天氣で往來にはほこりが立つ。

(文七はそこにある手桶と柄杓を把りて、店さきに水をまく。やがて、手桶を下におき、柄杓もそこ

に投げ出し、奥を見かへりて肩をゆすりながら笑ふ。館屋の唐人笛きこゆ。)

幕

第二幕

(一)

新町橋の袂、上のかたに橋ありて、柳を栽ふたり。正面は川をへだて、新町の廓をみる。河岸には
鱧鮓屋が屋臺店を出し、床几二脚ほど列べてある。

(前の幕とおなじ日の夜。うどん屋與助は鍋の火を煽いでゐる。ぞめきの客三人、あとや先になりて
下のかたより橋を渡りて去る。これとゆきちがひに橋の上よりもぞめきの客二人出で、下のかたへ
過ぎゆく。廊の唄、笛、太鼓など遠くきこゆ。)

與助。

花が散つたので廓もこの頃はちつと寂れたか。いつもほどの人通りがないやうぢや。

(上のかたより橋をわたりて、庵の平兵衛、柱庵の伴、廿七八歳、ついで喧嘩屋五郎左衛門、とん
びの勘右衛門、因果の清兵衛、いづれも雁金組のあはれ者にて、のさばり返つて出づ。)

平兵衛。

この頃は廓も閑になつて、喧嘩するによい相手も見つからず。銭がないので、鱧腹には酒

ものめず。揚屋遊びは猶さら出來ず。たゞ詰まなくほつつきあるいて、このまゝ引揚げる
のも忌々しいな。

五郎左。

かういふ時には八つあたりに、誰でも彼でも行き當りばつたりに喧嘩を賣らうと待ちかま
へてゐるが、おれたちの面が看板になつてゐるので、逢ふ奴がみんな逃けてしまふわ。

勘右衛。

なんほおれ達でも相手のない喧嘩は出來ず、腕がむづ／＼するばかりぢや。
ほんに胸のわるい日ぢや。ふところの暖かさうな奴でも來たら、なぐつて嚇しつけて、あ

平兵衛。

やまらせて、今夜の飲代でも吐き出させるのぢやが、いゝ鴉めも來ないかな。
(勘右衛門を指す。)とんびならこゝにゐるが……。はゝゝゝゝゝ。

五郎左。

こゝにゐると云へば、そこにいつもの鱧鮓屋が出てゐる。せめてもの蟲おさへに一杯やる
かな。

勘右衛。

あいつ用心して、おれ達には飲ますまいぞ。
飲ませずば嚇して飲む。さあ、そこへ掛ける、かける。

平兵衛。

(四人はそこにある床几に腰をかける。)
いらつしやりませ。(四人をすかし視て、俄にうんざりする。)

與助。

雁金文七

清兵衛 亭主。酒はあるか。

與 助。へい。御酒はもうみんなになりまして、餠餅ばかりでござります。

勘右衛門。うどんを食ひに来たのでない。酒を出せ。

與 助。でも、生憎に賣切れましたので……。

平兵衛。屹とないか。店をあらためるぞ。

與 助。え。

五郎左。それみろ。横着者め。

勘右衛門。未練なしに出せ、出せ。

與 助。へい、へい。

平兵衛。おれ達がおかんむりをまけたが最後、その屋臺を骨ばかりにして、川へ叩き込むぞ。

與 助。いえ、唯今すぐに差上げます。

(與助はよんどころなしに酒を持って出れば、四人は茶碗で飲む。)

平兵衛。わるい酒ぢや。こんなものを飲むよりは、川の泥をすくつて飲む方がよつほど優しぢやな。

清兵衛。どうで一時の蟲おさへぢや。まあ、我慢して飲んでやらうよ。

與 助。(仕方なしに。)ありがたうござります。

平兵衛。いくら蟲おさへでもこれでは胸が納まらぬ。却て腹の蟲を怒らせるやうなものぢや。もう

我慢がならぬ。おれはもう行くぞ。(茶碗を地に投げすて、起つ。)

五郎左。む。おれもゆく。(おなじく茶碗を投げすてる。)

勘右衛門。おれもゆく。(茶碗を捨てる。)

清兵衛。では、あきらめておれも行く。(茶碗をすてる。)

與 助。(恐る恐る。)して、御勘定はどなたから頂くのでござります。

平兵衛。こんな泥水をのませて錢を取らうとは、呆れた横着者め。錢がほしくば、ほんたうの酒を

賣れ。

(云ひすて、平兵衛は向ふへゆく。他の三人もついでにゆく。與助は呆れてあとを見送る。向ふより

雁金文七が先に立ち、最手の市右衛門、極印千右衛門、三つ引治兵衛、からくり六兵衛、かひたて

の吉右衛門の五人がついて出づ。いづれも酒に酔つてゐる。)

平兵衛。(おどろく。)やあ、文七。いつ戻つた。

文 七。けふ戻つたばかりぢや。

平兵衛。

けふ戻つたか。それは些つとも知らなんだ。なにしろ目出たい。めでたいな。

三人。

(口をそろへて。)めでたい、めでたい。

文七。

まあ、そこへ行つて話さう。

平兵衛。

よく無事でゐてくれたな。

(平兵衛は再び引返す。文七等も舞臺にくる。)

平兵衛。

まあ、そこへかけてくれ。(床几を指さす。)

(文七は床几にかける。平兵衛も下のかたの床几にかける。奥助はそれをみて又うんざりする。)

平兵衛。

おやちが先月死んだので、おふくろから願ひを上げ、やがて戻されるといふ噂は聞いてる

たが、けふ出てくるとは知らなんだ。(市右衛門等に。)おまへ達は素早いな。

市右衛門。

かみなりに教へられたのぢや。

平兵衛。

さうか、さうか。して、一旦戻された以上、二度と遣らるゝことはあるまいな。

文七。

(笑ふ。)遣られたが最後ぢや。今度來たら命がないと奉行所の白洲で嚇されて來た。

五郎左。

命がない……。首が飛ぶか。

文七。

む。親の届けで入牢させた文七、いつまでも此世へは出さぬ筈なれど、父がない後の相

續人、なにとぞお下げくだされと、母や親類どもの嘆きによつて、兎もかくも一旦は出牢申付くる。但し行跡あらたならず、昔のまゝの放埒を盡すに於ては、すぐに召捕つて再び入牢、今度こそは命がないと思へ。世の若い者どもの見せしめに、大阪中を引廻しの上で獄門、きつと左様心得よと、社杯をきた役人めが閻魔のやうな面をして長々と申渡したが、こつちは一刻も早く娑婆へ出たいが先に立つて、半分は夢やら現やら、上の空で聞いているた。は、は、は、は、は。

平兵衛。

(おなじく笑ふ。)まつたく釋迦に説法ぢや。それにしても、けふ戻されて、今夜すぐに大手を振つて出てくるのは近ごろの早手廻し、家では誰も叱る者はなかつたか。

文七。

は、そこが楠孔明ぢや。叔父めは少し苦手ぢやが、おふくろは甘口。そこに附込んで歸り早々は、飽までも神妙らしく取りつくろひ、かみなりめを叱つて追ひかへし、こゝにゐるほどや極印の祝ひものを突き戻し、この兩手を藍壺へ突つ込むやら、店さきへ水をまくやら、ひとり舞臺の狂言を仕盡して、おふくろをころりと參らせ、かりがね組の仲間を穩便に抜けるとあざむいて、まんまと引き出した三百兩

平兵衛。

わが家のしきるをまたぐが早いか、すぐに三百兩ひき出した腕の強さは、あつばれ景清の

文七。

二代目、さすがは雁金組の大將軍、えらいぞ、えらいぞ。(扇をあげて煽ぐ。)
まあ、聞け。その金をふところへ捻込むと、すぐにおやぢの墓参りと殊勝らしく家を出て、
供ののろ作めを途中ではぐらかし、その足でほてや極印のありかをたづね、この六人が繋
がり合つてそれからそれへと飲みあるき、これから新町へ乗込む道中で、丁度おまへ達に
めぐり逢つたのは、歸命頂禮どら如來の御利益。なんとありがたいことではないか。は、
は、は。

五郎左。

なるほどこれは有難い。そんならそこに三百兩を持つてゐるのか。

文七。

まだ幾らも減らさないで、ふところが重い、重い。(ふところを叩く。)

勘右衛。

いよくそれはめでたい、めでたい。やつぱり雁金が出て來ねば、おれたちの舞臺も榮え
ぬな。

清兵衛。

今夜こそは雁金組が羽をのばして、久し振りの全盛ぢや。面白いぞ、面白いぞ。

文七。

文七が娑婆に歸つた祝ひ酒、羽目をはづして騒いでくれ。(左右を見まはす。)こゝにゐる者
はおれともに十人、かみなりが一人缺けたは物足らぬ。あいつ何處にゐることか。

平兵衛。

かみなりめは晝のほど喧嘩して、相手を斬つたとやら、突いたとやら。それで何處ぞに這

文七。

ひかゞんでゐるのであらう。

おれの店の藍壺に脇差をなげ込み、證據をかくして置きながら、なにが恐ろしうて逃げま
はるぞ。しばらく逢はぬ間に、あいつ弱くなつたかな。(笑ふ。)それではいつ出てくるや
ら判るまい。あいつを省いて十人一座、そろくと繰込まうか。これ、亭主。

與助。

へい、へい。

文七。

店を借りた代りにこれをやるぞ。(小判一枚をなげ出す。)

與助。

(金を拾つておどろく。)これは小判で……。

文七。

今夜はおれの身祝ひぢや。だまつて取つて置け。

平兵衛。

おれ達がかつきの分も籠つてゐるぞ。

與助。

へい、へい。ありがたうござります。(やゝ不安らしくその金をながめてゐる。)

文七。

これで濟んだ。(たち上る。)月はないが、星あかりで暗くもない。かうして夜風に吹かれて
あるくのも足かけ二年目、久し振りで飲んだ酒に酔ひつぶれるかと思ひの外、これではま
だく幾らでも飲める。(笑ひながら正面をみる。)お、いつ見ても新町の灯は好いな。さ

あ、行け、行け。

雁金 文七

一同。

乗込め、乗込め。

(文七は先に立ち、他の九人もついでに立ちかゝる時、かりがね屋の手代幸八は提灯を持ちて下の
かたより出づ。)

幸八。

おい、若旦那さま。これにおいでなされましたか。

文七。

幸八か。なにしに來た。

幸八。

お墓まるりの途中でおまへ様を見うしなしましたので、一旦はお店へ戻り、また出直して
方々をさがしてをりました。

文七。

(あざ笑ふ。)それは御苦勞であつた。

幸八。

暮六つを疾うに過ぎましたので、御親類方は申すに及ばず、町内の衆もさつきから皆お揃
ひでござります。早くお戻りくださりませ。

文七。

おれが呼んだのではない、おふくろが勝手に呼びあつめた客ぢや。それをおれが知ること
か。

幸八。

でも、今晚はおまへ様のお祝ひに、皆様をお招き申したのでござります。

文七。

その祝ひなら、これから新町へ行つて存分に騒ぐつもりぢや。家の客は夜のあけるまでも

待たせて置く。

幸八。

さうはなりませんまい。おふくろ様も大層御心配でござりますれば、兎もかくも一旦は……。

文七。

えい、うるさい。歸れ、歸れ。

幸八。

はい。(躊躇してゐる。)

文七。

歸れといふのに……うじくしてゐると、うぬ、ぶち殺すぞ。

市右衛。

かりがねが戻ると云うても、おれ達が戻しはせぬ。

千右衛。

痛い目をみぬうちに、歸れ、歸れ。

幸八。

はい、はい。

(幸八は恐れて早々に引返して去る。一同は笑ひながら又ゆきかゝる時、河内屋の手代彦次郎、廿二
三歳、あみ笠をかぶりて橋をわたりて出で、下のかたへゆかうとして思はず文七に突きあたる。)

文七。

やい、待て。(彦次郎の腕をつかむ。)

彦次郎。

とんだ粗相をいたしました。眞平御免くださりませ。

文七。

なんの遺恨でおれに突き當つた。

彦次郎。

唯今も申す通り、心がせくまゝの失禮、どうぞ御料簡をねがひます。

文七。 いや、めつたに料簡はならぬ。笠を取つて面をみせろ。笠をぬけ。
彦次郎。 それはおゆるし下さりませ。
文七。 えい、ぬけ。

市右衛門。 (文七はふり返つて指圖すれば、市右衛門と千右衛門は立ちよつて、無理に彦次郎の笠を引きちぎり、その兩腕を捉へて屋臺の前に引摺つてゆき、行燈の火に照してみる。)
むい、こいつは南久寶寺町の木綿問屋の奉公人に相違ない。
千右衛門。 生白けた面をして新町通ひ、はい、あつぱれの白鼠ぢや。
(ふたりは彦次郎を文七のまへに突きやる。)

文七。 奉公人の分際で新町遊びとは僭上な奴、以後の懲しめに、撲れ、なぐれ。
彦次郎。 どうぞ御勘辨くださりませ。(土に手をついて詫る。)

文七。 えい、いくら吠え面かはいても料簡することではない。さあ、なんでおれに突き當つた。譯をいへ。(下駄には彦次郎の肩を蹴る。)

彦次郎。 (むつとして。)これほどお詫をいたしてゐるのに、土足にかけるとはあんまりな……。
文七。 何があんまりぢや。おのれのやうな蛆蟲めを土足で踏んだが何とした。まだ幾度でも踏ん

でやるわ。文七さまの泥下駄を出世の呪ひにありがたく押頂け。(又も彦次郎を蹴倒す。)
さあ、骨のゆるむ程にこいつをなぐれ、なぐれ。

一同。

承知ぢや、承知ぢや。

(吉右衛門、五郎左衛門、勘右衛門、治兵衛、六兵衛、清兵衛の六人は立ちかゝりて彦次郎をむこたらしく打ち据ゑる。)

彦次郎。 えい、大勢でよくも此のやうなむごい目に逢はせたな。おのれ等はあばれ者のかりがね組、顔もみな見識つてゐる。このかたきは屹と取るから覺えてるやれ。

文七。 なに、かたきを取る……。洒落臭いことをいふな。かたきを取るならすぐに取れ。さあ、立派に相手になつてやるわ。(また蹴る。)

彦次郎。

えい、おのれ。
(彦次郎は口惜しさのあまり、必死になつてむしり付かうとするを、文七はまた蹴る。彦次郎は胸をけられて倒れる。)

文七。

馬鹿な奴め。

(彦次郎は倒れしまゝ起きあがらぬに、平兵衛は立寄つて覗く。)

平兵衛。こいつ、息が止まつたと見えるぞ。は、脆い奴ぢや。
一同。死んだか、死んだか。

市右衛。まつたく脆い奴ぢや。生かすのも面倒、うつちやつて置け、打つちやつて置け。
文七。む、うつちやつて置け。こんな奴にかゝり合つて遅くなつた。

（文七は先に立つてゆく。一同もついでに橋をわたり去る。與助は先刻よりはらくして見物してゐたるが、一同の立去りしを見送つて、あわてゝ彦次郎のそばへ寄る。）
與助。もし、しつかりなされ。これ、起きさつしやれ。

（彦次郎は答へず。與助は屋臺より水を汲み來りて飲ませようとする。下の方よりかみなり庄九郎はあみ笠をかぶりて出づ。）

與助。彦次郎をかゝへて。これ、水を飲まつしやれ。あ、こりやもう死んでゐる。（手を放せば、

彦次郎はがつくり倒れる。）

庄九郎。（すゝみ寄る。）急病人か。

與助。いえ、喧嘩でござります。

庄九郎。む。喧嘩か。その相手は……。

與助。かりがね組でござります。

庄九郎。かりがね組か。

與助。へい。いつものあばれ者で……。

庄九郎。あばれ者……。なにを吐かす。

（庄九郎はいきなり與助をほり飛ばして橋を渡り去る。與助は倒れながら頭を抱へてあとを見送る。廓の唄、水の音。）

(11)

新町、備前屋の店さき。二重家體にて、正面には出入りの襖。軒には暖簾をかけ、門には備前屋と
かいたる行燈をかけ、店にも燭臺を置く。下のかたは黒板塀にて松の枝が差し出で、塀のまへには
用水桶あり。すつと下のかたには灯の入りたる揚屋がつゞきてみゆ。店のまへには長床几二脚ほど
あり。唄の聲、笛、太鼓きこゆ。

（ぞめきの客六七人、それに座頭、鮎賣などもまじりて、左右より摺れちがひて行き過ぎる。備前屋

お玉。の店には仲居のお玉、お紋が腰をかけて往來をながめてゐる。
 俄天氣になつたせるか、今夜はよつほど賑やかいやうぢやな。
 お紋。花が散つても日本中の人のよる浪花の新町ぢや。この四五日のやうに寂しいこともあるま
 い。

お玉。さうは云うても此頃のやうに、あばれ者の喧嘩買が幾組も押廻してあるいは、身柄のよ
 い衆はおのづと足が遠ざかる。困つたものぢや。

お紋。ほんに悪いことが流行つてならぬ。そのなかでも取分けて悪いのは雁金組で、やれかみな
 りの、極印のと、名をきくさへもぞつとする。

お玉。あ、これ、そんなことは滅多に云はぬもの。もしも誰かにきこえたら、あとの祟りがおそ
 ろしい。

お紋。ほんにさうでござんすな。

お玉。それ、また喧嘩ぢや。
 (ふたりは左右を見まはして口をつぐむ。向ふにて「喧嘩ぢや、喧嘩ぢや。」と叫ぶ聲。ふたりは起
 つ。)

お紋。あゝ、厭ぢや、厭ぢや。

(向ふより遊女清川、十八九歳、あわたゞしく走り出づ。)

清川。(あとを見かへる。)あゝ、怖いことであつた。あまり走つて來たので息が切れる。水でも白
 湯でも下さんせ。

お紋。あい、あい。(奥に入る。)

お玉。もし、どうしなさんした。

清川。お客を送つてそこまで出てゆく途中、又いつもの雁金組に行き逢うて、譯も理窟も無しの
 喧嘩沙汰。あまりの怖さにあとをも見ずに逃げて來ましたが、あのお客はどうなつたこと
 やら。

お玉。大方そんなことであらうと思つた。諸人の難儀になるあばれ者を、なぜお上でも召捕つて
 下さらぬのかなう。

清川。わたしも見おほえのある雁金屋の息子が、今夜は先立ちになつてゐました。親不孝で牢屋
 へ入れられたと聞いてゐるに、いつ何うして出て來たのか。あれが雁金組の總大將、再び
 世間に出て來たら、一倍あばれまはるは知れたこと。これからは猶々用心せねばなりません

まい。

(お紋は奥より茶碗に湯を汲んでくる。清川は會釋して受取りて飲む。向ふよりぞめきの客三人、あ
とを見返りながら出て、たがひにさゝやき合ひて逃げるやうに下のかたへ去る。つゞいて向ふより
文七を先に、前の場の九人がのさばり出づ。)

文七。

新町はむかしよりも立派になつたな。去年の春からあしかけ二年、しばらく見ぬうちに店
附はずつとよくなつた。人間が惻口になつて、道樂する奴がだん／＼に殖えるとみえる。
面白いな。

平兵衛。

まつたく面白い世の中になつて來た。花が散つてもおれ達はこれからが花ぢや。して、こ
れから何處へ乗込まうな。

七。

しばらく廓の土をふまぬので、おれには勝手がわからぬが、やつぱり備前屋などはどうぢ
や。

市右衛。

それもよからう。今夜はお大盡様ぢや。どこへでも大手をふつて行かれるぞ。
備前屋ならばもうそこぢや。あれ、今の女郎が店さきにゐるわ。

文七。

お、ゐる、ゐる。

文七。

(十人はどや／＼と備前屋の店さきに乗込んでくる。清川をはじめ、お玉もお紋もぎよつとする。)
今夜はおれ達が客になるぞ。(床几に腰をかける)

お玉。

(もじ／＼して)折角でござりますが、お座敷はみな塞がつてをります。

文七。

うそをつけ。これだけの屋臺骨で、おれたちの五人十人を入れる席がないとは云はさせ
ぬ。さあ、その女郎もおれが貰つたぞ。こゝへ來い。

清川。

いえ、あの、わたしは……。ほかにお客がござんす。

文七。

その容は今そこで、三つ四つなぐつて追ひかへしてしまつた。

清川。

あれは送つて行つたお客、まだそのほかに約束が……。

文七。

まだほかに約束があらうとも、おれが貰つた。文七が貰つた。(無理に清川をひき出して、自
分の床几にかけさせる。)こゝ、一寸も動くまいぞよ。客になるは初めてぢやが、おれの顔も薄
薄は知つてゐる筈、おれは雁金屋の文七様ぢや。おやぢめが戸惑ひして、大事のひとり息
子を暗いところへぶち込んだが、おれのやうな善人を牢屋へ入れておくのは、天神様を島
流しにしたも同様、上役人共もさすがに悪かつたと氣がついて、どうぞお歸りくだされと、
平あやまりにあやまつた上に、輕少ながらこれは當座のお小遣ひでござると、これ見ろ。

雁金文七

(ふところより財布を出す。) 三百兩といふ金をくれて、拜み奉るやうにしておれを歸してよこした。いや、嘘でない、ほんのことぢや。(仲居等に。) 貴様達もよくみる。この通り百兩づゝみが二つと、ほかに封を切つたのが七八十兩、これを今夜中にみんな使つてしまふと云つたら、よもや客にせぬことはあるまい。それでも忌か、斷るか。やい、清川。それでもおれを客にせぬか。どいつもしつかりと返事をしろ。

清川。はて、おまへのやうでもない。たとひ金銀を山と積まうとも、廓にはまた廓の掟がござんす。一旦約束したお客がある以上、ほかのお座敷へは貫はれませぬ。わたしが貫はれうと思つても、第一に主人が承知しませぬ。どうぞ堪忍してくださいませ。

文七。金で買ふ女に兎やかうと理詰めにせらるゝ覚えはない。主人が不承知ならおれが行つて直談ぢや。かう云ひがかつたからは邪が非でもこの文七が客になる。さあ、主人のところへ案内しろ。

お紋。もし、お前、それは御無理でござります。清川さんばかりが女郎衆でもござんすまい。
お玉。又この店ばかりが揚屋でもござんせぬ。それほどのお金があるならば、ほかへ行つてお遊びなされませ。

文七。そんなことは云はずとも知つてゐるが、おれも意地づく男づく、どうしてもこの女郎を買つてこゝで遊ばにや堪忍ならぬ。(平兵衛を見かへる。) なんと、おれの云ふのが無理か。無理か。

平兵衛。無理どころか。それがほんたうの理窟といふものぢや。
市右衛。釋迦や孔子に聞かせても、けに尤もと合點する筈。それほどの道理のわからぬことはあるまい。

千右衛。判つてゐながら判らぬ振りをするのは、飽までもおれ達を嫌うて、わざと客にせぬ心と見たぞ。

文七。(清川に。) これ、どうでもおれを客にせぬか。
清川。今もいふ通りぢや。どうぞ堪忍して……。

文七。よし。もう手ぬるいことでは行かぬ。(平兵衛等に。) おれはこの女を曳摺つて主人のところへ掛合にゆく。貴様達はこゝの亭主をよび出して直談せい。
一同。わかつた、判つた。
文七。さあ、一緒にゆけ。(清川を引立てる。)

平兵衛。(仲居等に。)さあ、主人を出せ。

一同。出せ、出せ。

(清川もお玉お紋も途方にくれてゐる。下のかたよりかみなり庄九郎走り出づ。)

庄九郎。お、みんなこゝにゐるか。

文七。お、かみなり。さつきから待つてゐた。

庄九郎。(笠をぬぐ。)おれもさつきから探してゐた。もううか／＼してはゐられぬぞ。

一同。なんぢや、なんぢや。

庄九郎。新町橋の袂で木綿屋の手代を殺したのは、かりがね組の仕業と足がついて、捕手がこゝへ

向つてくるらしい。門をしめられぬうちに早く逃げろ、逃げろ。

文七。あいつ到頭死んだのか。して、おれ達の仕業といふことが何うして知れたかな。あ、う

どん屋の亭主めが訴人したか。かうと知つたら、あいつめも刷毛ついでに、川の水でも食

らはしてしまつたものを……。え、いま／＼しい。(清川を突き放して、すこしく考へる。)

庄九郎。そのことにかゝり合はないが、おれも晝の喧嘩で怪我人をこしらへ、だん／＼に詮議がむ

づかしくなつたので、それからそれへと逃げまはつてゐるところぢや。おたがひに思案せ

ずばなるまいぞ。

(他の者共も顔を見あはせる。)

平兵衛。こりや野暮なことになつて来た。ばつさりと網をかけられて、ふだんの行狀を一々に詮

議されたら、おたがひに身が危い。

市右衛。それではこれから……。

一同。どうする、どうする。

(一同は俄に不安らしく文七を取りまけば、文七も少しく狼狽へはじめる。)

文七。(せいて。)もう斯うなつたら思案もない。ちつとも早く立退け、立退け。

一同。さうぢや、さうぢや。

庄九郎。これだけが一つにかたまつて出ては人目に立つ。分れ／＼に屋根つたひ、塀つたひ、脚の

やうに縁の下をくゞり、鼠のやうに溝をくゞつて、逃げ路をさがすが専一ぢや。

文七。どこへ飛ぶにも先立つは金ぢや。むい。(ふところより財布を出す。)この金が思ひもつかぬ

役に立つた。おれは一包みを持つてゆく。あとはみんなで配分しろ。(財布を投げ出す。)

一同。ありがたい、ありがたい。

(一同はあわて、金を取らうとする。)

平兵衛。さう奪ひ合つてはならぬ。おれが頭割りに分けてやる。待て、待て。

(一同は肯かずに奪ひ合つて取る。庄九郎と平兵衛はながめてゐる。)

文七。ふたりは取らずか。そんならおれのを分けてやる。

(文七は百兩づつみを二つに切り、その半分を更に二つに切つて、庄九郎と平兵衛に遣る。下のかたより夜番が提灯を持ちて走り出づ。)

夜番。

(仲居等に。)人ごろしの科人が廊へ入り込んだので、揚屋は一々に客あらため、客人をひとりも外へ出してはなりません。云ひすて、上のかたへ走りゆく。

文七。

(いよく急いで。)さあ、いよく油断してはゐられぬ。どこか好い逃げ路か隠れ家はないかな。(左右をみまはす。)

(太鼓の音きこゆ。)

一同。

お、太鼓が鳴る。

市右衛門。

もう斯うしてはゐられぬぞ。

千右衛門。

逃ける、逃ける。

一同。

逃ける。逃ける。

(太鼓の音はげしく、一同はいよくうろたへて、五郎左衛門、勘右衛門、清兵衛、治兵衛、清兵衛、六兵衛、吉右衛門の六人は、左右へわかれて思ひ／＼に逃げ去る。文七、庄九郎、平兵衛、市右衛門、千右衛門の五人があとに残る。)

平兵衛。

東西の門はもう閉め切つたであらう。これから何うしたらよからうな。

庄九郎。

(そこらを見まはして。)む、おれはかうする。
(庄九郎は笠をなげすて、下のかたへゆき、用水桶を踏臺にして、松の枝をつたひ、塀のなかに隠れ入る。)

文七。

む、それを貸せ。

(文七は清川の襦袢をはぎ取りてかへる。左右より捕手七八人うかどひ出づ。)

捕手一。

かりがね組に御詮議ぢや。

一同。

お繩をうけい。

(捕手は十手をふつて打つてかゝる。こつちやの立廻りになりて、平兵衛は庄九郎の笠をかぶりて奥へ逃げ込む。市右衛門と千右衛門は押さへられる。文七は襦袢をかぶつて向ふへ逃げ去る。太鼓の

音)

(三)

もとの新町橋の袂。うどん屋の屋臺はみえず。太鼓の音遠くきこゆ。

(下のかたより越前屋武右衛門は尻を端折り、手代幸八に提灯を持たせて出づ。)

幸八。太鼓の音がきこえますな。

どうもそれが気がかりでならぬ。どら者の詮議には銅鑼をうつ、お捕物には太鼓をうつ。どうかあいつの身の上でなければよいが……。文七めはむかしのあばれ仲間と一緒にたしかに新町へ入り込んだな。

幸八。なんでも十人ほど連れ立って、これから新町へゆくと云つてゐられました。

さてく困つた奴。今夜はあいつが出牢の祝ひごとで、家には大勢の客人が待つてゐるに、肝心のあいつが居らぬでは、おふくろは勿論、親類のおれ達までが面皮をかく。早く探して連れて歸らねばならぬ。

幸八。太鼓をうつやうでは、廓の門は閉まつてゐるかも知れませぬな。

武右衛門。それもさうぢや。兎もかくもお前行つて見て来てくれ。

幸八。では、提灯をお渡し申します。

(幸八は武右衛門に提灯をわたして、橋をわたりて去る。)

(ひとり言)ほんに何といふ奴ぢや。それほど人に苦勞がかけたいか、かうと知つたら出牢させるのではなかつたに……。

(水の音。かみなり庄九郎は水にぬれて川より這ひあがる。武右衛門は氣がついて提灯を差付ける。)

武右衛門。誰ぢや。お、庄九郎ではないか。

庄九郎。叱つ。(あたりを窺ひながら)文七の叔父御か。

武右衛門。あいつはどうしました。

庄九郎。(着物をしぼる)文七は……。どうしたか知らぬ。ひよつとすると召捕られて……。

武右衛門。え。

庄九郎。おれはいそぐ。

(云ひすて、下のかたへ行かうとすると、捕手二人出づ。庄九郎は摺りぬけて行くを、捕手は遮る。)

捕手。庄九郎、御用。

(庄九郎は逃げんとして争ひ、遂にその場に押しへらる。)

武右衛。やれ、やれ、たうとう召捕られたか。心柄とはいひながら氣の毒のことぢや。

(見かへりて冷笑ふ。)

捕手。立て、立て。

(捕手は庄九郎を引立て、去る。)

武右衛。あ、それにつけても文七めは……。

(武右衛門は橋の方へゆきて不安らしく見る。幸八は走り出づ。)

幸八。門はもう閉め切られて、内からも外からも通路はかなひませぬ。困つたなう。

(提灯を持ちたる捕手ひとりが先に立ち、庵の平兵衛、最手の市右衛門、極印千右衛門はいづれも繩にかゝり、捕手三人がひとり／＼にその繩尻をとりて出づ。幸八はそれを見て武右衛門に教ゆれば、武右衛門は提灯をかざして進み出づ。)

捕手。え、退け、退け。

武右衛。はい、はい。

(云ひながら武右衛門は提灯のひかりにて、繩附の顔を一々に照して視る。平兵衛等は無言にて送られてゆく。)

武右衛。(たまり兼ねて聲をかける。)

平兵衛。(ふり向く。)

捕手。え、ゆけ、ゆけ。

(捕手は三人を追ひ立て、去る。)

武右衛。たとひ一時でも逃けてくれ、ばよいが……。

(武右衛門は又もや橋の方をみかへる。雁金文七はちらし髪にて繩にかゝり、捕手一人が繩を取り、一人が繩轡を持ち、一人が提灯を持ちて出づ。武右衛門と幸八は不安しく覗いて、思はず聲をあげる。)

武右衛。お、文七。

幸八。若旦那さま。

文七。(みかへる。)幸八又来たか。おい、をぢ様……。 (顔を背ける。)

武右衛。さりとは情ない。今朝やうやくに日の目をみて、今夜すぐに元の暗やみか。

文七。この世の光もたつた一日……。 (笑ふ。) をぢ様。

武右衛。おい。(すり寄る。)

文七。おふくろに泣くなと云うてくだされ。どなたにも今度逢ふのは千日前ぢや。は、は、は、は。

捕手。あゆめ、あゆめ。

(時の鐘。文七は捕手に送られてゆく。武右衛門は提灯を吹き消して幸八に渡し、眼をふきながら續いてゆく。幸八も頭を垂れてゆく。うすく水の音。)

幕

第三幕

(一)

雁金屋の干し場。

正面は母屋の下身にて、下のかたには窓あり。窓の外には一本の葉櫻あり。家の根の上には大いなる物干場を作りて、色々の染物が干してあり。舞臺は空地のこゝろにて、上の方と下のかたの二ヶ所に高き物干竿を立て、これに「しんし」を張りたる色々の染物をかけてあり。母屋の上のかたには土蔵の白壁見ゆ。空地のよきところに職人等が用ゆる粗末の長床几を置いてあり。

(五月四日の午後。安藏、喜七、彌吉、ほか二人の職人は忙がしさにしんしを張つたりしてゐる。)

傳兵衛。(出づ) みんな精が出るな。あしたは節句で丸休みぢや。その積りで今日は日一ぱい働いてくれ。よいか。

安藏。あい、あい。その休みを樂しみに、けふは手元の暗くなるまで働く積りでござります。

傳兵衛。本來ならば今日も宵節句で早仕舞といふところぢやが、それでは方々の注文がおくれで困る。まあ、我慢して遣つてくれ。

喜七。仕事がおくれるといへば、天氣が何だかをかしくなつて來ました。

彌吉。(空をみる。)どうも少し陰つて來たやうぢやな。

傳兵衛。毎年のことぢやが、此頃は兎かくに陰り勝で、染物屋商賣には難儀の時節ぢや。薩州の御屋敷からお誂への御船幕、あれがすつかり染めあがるまでは、もう二三日降らして貰ひたくないものぢやが……。

(傳兵衛も空をながめてゐる。下のかたの奥より越前屋武右衛門出づ。)

傳兵衛。お、谷町の叔父様。

(職人等も武右衛門に挨拶する。)

武右衛門。番頭殿にはまだ御挨拶をしなかつたが、娘を連れて先刻から奥に來てゐました。

傳兵衛。左様でござりましたか。ちよつと近所まで出てをりましたので、一向に存じませんでした。

(傳兵衛はそこにある床几を指さして、武右衛門に腰をかけるといふ。)

武右衛門。(腰をかける。)みんながよく稼いでくれるといふので、おふくろ殿もよろこんでゐました。

仕合せと商賣は忙しいさうぢやな。

傳兵衛。おかけ様でそれからそれへとお誂へに、手が廻らぬくらゐでござります。

なんといつても古い暖簾は有難いものぢや。文七めはあの通りの始末。おふくろは女で氣が廻らず、殊にこのあひだの一件から魂が抜けたやうになつてゐる。わしも時々に見廻りには來るもの、商賣ちがひで眼はとゞかぬ。番頭どのにも職人衆にも何分よろしく頼みますぞ。

傳兵衛。その御挨拶では痛み入ります。(いひかけて職人等を見かへる。)これ、おまへ達もけふは朝から随分働いた。臺所へ行つて一休みしやれ。

武右衛門。なんほ商賣でも息つかずに働いては堪らぬ。わしが土産に持つて來た笹粽がある筈ぢや。それでも食せて貰つて、茶を飲むがよからうぞ。

職人等。あい、あい。ありがたうござります。

(職人等は會釋して下のかたの奥へ去る。傳兵衛は左右をみまはして進みよる。)

傳兵衛。今日はおそよ様も御一緒でござりますか。

武右衛。

おまへも知つてゐる通り、娘のおそよと文七とは従弟同士で、死んだ兄貴の在世のときから許嫁と云つたやうな仲であつたが、文七めの入牢やら何や彼やで、ついそのまゝになつてしまつた。それでもこゝのおふくろは矢つぱり昔の約束を忘れずに、おそよを嫁のやうに思つてゐる。娘の方でも戀しがつて、兎角に足を近くたづねて来る。そんなわけで今度の一件にも、娘は一倍に苦勞して、けふもわしに附いて來たのぢや。

傳兵衛。

若旦那がめでたく御出牢になりましたので、早速におそよ様を引取つて御祝言と、おふくろ様も樂しみにしてござりましたに、唯つた一日で又ぞろあの始末、皆さまのお力落しもお察し申してをります。(聲を潜める。)して、若旦那のおゆくへは全く知れぬのでござりませうか。

武右衛。

(うなづく。)わしも内々で手をまはして、色々心當りを探してゐるが、どこにどうしてゐる事か。(嘆息する。)新町の廓で召捕られ、繩附きになつて行くところを、わしは確かに見とけたが、お奉行所へ牽かれて行く途中で捕手の衆の隙をうかゞひ、不意に繩を切つて逃けるとは、重ねぐ、大膽な奴。それではお上の憎しみがいよく加はつて、つながる首も飛んでしまふとは氣が付かぬか。かうと知つたらお慈悲願ひなどをするではなかつた。

傳兵衛。

なまじひに明るい世界へ連れ出して、却つて重い罪を作らせてしまつたのぢや。

御赦免になつたその晩に、すぐにあんなことにならうとは、誰でも思ひ付かぬこととござりました。この店へもこの間からたび／＼御詮議がござりまして、文七めが忍んで戻つたら必ず即刻に訴へ出る。萬一かくまひ立てをするにおいては、一家内残らず重いお咎めぢやと嚴重に申渡されてをります。

武右衛。

おい、さうであらう。新町の廓をあばれ廻つて人殺しをした上に、繩抜けをした文七め、草を分けても御詮議なさらねば御政道が立つまい。

(この時、母屋の窓をあけて武右衛門の娘おそよ、二十歳、白い顔を出して外を見る。それに氣がついて二人も見かへる。)

おそよ。

父さん、そこにおいでなされましたか。

武右衛。

今こゝで番頭どのと話してゐるところぢや。

おそよ。

今夜は泊つて行つても好うござりますか。

武右衛。

おふくろ殿が泊れと云つたか。

おそよ。

あい。さびしくてならぬから泊つてくれと仰しやります。

武右衛。 (思ひ遣るやうに。) 成ほど、さびしいであらうな。お前さへ好くば泊つてゆけ。併しこの上に悲しい話をして、伯母を泣かすまいぞよ。

おそよ。 あい。

〔おそよは力なげに窓をしめる。武右衛門と傳兵衛もさびしさうに顔を見あはせる。〕

傳兵衛。 若旦那が御出牢なさるといふので、このあひだ中は夜も碌々寝られぬほどのお喜びでござりましたが、それが忽ちに引つくり返つて、此ごろは又、夜の目もあはぬほどの御心配、おふくも様もまつたくお氣の毒でござります。

武右衛。 かへすくも不孝な奴め。雁金組のあばれ仲間、かみなり漬屋の庄九郎を始めとして、桂庵のせがれの庵の平兵衛、素人相撲の最手の市右衛門、極印鍛冶屋の極印千右衛門、この四人の頭立つた者はその夜のうちに召捕れ、残りの六人もだんくんに狩出されて、残つてゐるのは大將株の文七ひとりぢや。仲間の者の白状で、大抵その隠れ家も知れさうな筈ぢやに、あれから一月餘りの間、どこにか運好く隠れ忍んで、網の目をくゞつてゐるのは不思議ぢやな。

傳兵衛。 どうかいつまでも隠れ負せて下されば宜しうござりますが……。 (いひかけて氣がつく。) お

お、おふくろ様がおいでなされました。

(上のかたより文七の母お石、あとよりおそよも出づ。)

お石。

番頭どの。薩州様からお詠への御船幕は確かに間に合ひますかな。

傳兵衛。

もう二三日お天氣が續けば大丈夫ぢやと存じてをります。

お石。

そのことで今お使が店に来てゐるやうぢやが……。間に合はぬものなら、いつそお断り申したらどうぢやな。

傳兵衛。

いえ、お断り申すには及びませぬ。わたくしが參つて確かな御返事申上げませう。どなたも御免くださりませ。

(傳兵衛は急いで下のかたへ立去る。お石とおそよも床几にかける。)

武右衛。

(空を見る。) もう二三日お天氣が續けばといふ矢先に、あひにく空模様が悪くなつて來た。どうも今夜はむづかしいな。

おそよ。

時節が悪いので、降り出したらすぐに晴れますまい。

お石。

おたづね者の文七、宿無し同様の身の上で、今夜の雨をどこで凌ぐことやら。いや、その話はもう止めたがようござる。いくら案じても苦勞しても、今更どうにもなら

お石。

武右衛門。

お石。

武右衛門。

ぬことぢや。何事も成行次第とおあきらめなされ。
 文七はわたしの倅、親が子を案じるに、他人のお世話はいらぬことでござります。
 なに、他人……。成程、文七はこなたの倅ぢやが、わしに取つても肉身の甥ぢや。あいつ
 の事について、けふが日まで、この武右衛門もどれほどに氣を痛めてゐるか。
 氣を痛めてゐるならば、共々に苦勞してくれるのが叔父甥の人情ではござらぬか。(涙ぐむ)
 それを人事かなんそのやうに、成行次第とあきらめろとは、ほんに頼もしい叔父様ぢや。
 (むつとして) おい、頼もしい叔父なればこそ、骨も瘦せるほどに苦勞してゐるのが、こ
 なたの眼には這入らぬか。わしは男ぢや、大抵の苦勞も我慢がなるが、そなたは女子で、ふ
 だんから氣が狭い。あまりに苦勞してはからだの毒と、心休めに云つて聞かせる親切を、
 ひがんで取るとは何のことぢや。谷町でも古い刀屋で、少しは人に知られた越前屋武右衛
 門、悪い甥を持つたばかりに、町内中の附合にも肩身を狭くし、商賣は人まかせにして毎
 日駈けまはる……。
 (遮る) あい、もし、父さん。こゝでそのやうにいひ募つては……。 (眼でなだめる) もう
 なんにも云つて下さりませぬ。

武右衛門。

(思ひ直して) さうぢや、さうぢや。親子が二人連れ立つて、こゝの家へ喧嘩を買ひに來た
 のではない。おふくろの愚痴も、わしの小言は、落つれば同じ谷川の水で、所詮は文七が
 身を思へばこそぢや。いや、もう何もいふまい。では、おまへはこゝに泊るとして、わし
 は日の暮れぬうちに歸りませう。おふくろ殿、もうお暇をしますぞ。(起ちあがる)

おそよ。

お石。

(お石は黙つてゐる。おそよは武右衛門を送つて行かうとすれば、武右衛門はそれには及ばぬとい
 ひ、お石を指さしてよく氣をつけると囁き聞かせて、下のかたへ立去る。)
 (お石のそばに戻る) もし、伯母様。父さんはいつもの一徹で、二口目には喧嘩腰の挨拶、
 わたしが代つてあやまります。どうぞ堪忍してやつてくださりませ。
 文七のことが苦になつて、このごろは夜も寝られず、喰べ物も喉には通らず、半氣違ひの
 やうになつてゐる最中とて、人のいふことは何でも悪くきこえてならぬ。武右衛門殿の親
 切はふだんからよく知つてゐながら、つい今のやうな云ひ争ひ……。 (眼をふいて) 必ず氣
 にかけて下さるなよ。

おそよ。
お石。

氣にかけるどころか、わたしの方からお詫びをしてをります。
 お詫びはお互ひのこととして、これ、おそよ。

おそよ。

あい。

お石。

又しても同じことをいふやうぢやが、文七は家を出る時に、わたしから三百兩持たせてやりました。どこでどう使ふたか知れぬけれど、その晩のうちに皆んなは無くなるまいと思ふが、どうであらうな。

おそよ。

さあ。三百兩といへば大金でござります。なんほ文七殿でも一晩のうちには……。

お石。

して見れば、まだ使ひ残りが相當にある筈。それを路銀にして遠いところへ姿を隠したのではあるまいか。

おそよ。

そんなことかも知れませぬな。

お石。

もし逃けたとしたら、中國筋か、四國か西國か、それとも關東か。お前になんにも心當りはありませんか。

おそよ。

(かんがへる。)別に心當りはござりませぬが、なんにしてもこの大阪さへ離れてしまつたら、案じることはありますまい。

お石。

さうぢや。この大阪さへ離れてしまつたら……。

(云ひかける時、下のかたより紙屑買か策をかついで出づ。)



お石。

(あわて。)もし、お前は何しにこんなところへ……。

紙屑買。

へい。紙屑のお拂ひはござりませぬか。

お石。

紙屑の用ならば、臺所へまはつて女子どもに聞いたがよい。

おそよ。

(下のかたを指さす。)臺所口はそちらでござります。

紙屑買。

お、左様でござりましたか。これは不調法をいたしました。

(紙屑買はあたりを見まはしながら、下のかたへ引返して去る。)

お石。

なんだか迂散らしい屑買ひぢや。

おそよ。

そこらをきよろしく見まはしてゐました。

お石。

あんな風に姿をやつして、あれもやつぱり文七の詮議かも知れぬ。(腹立たしさに。)いくら此處らをせり歩いて、文七はもう五十里も百里も遠いところへ行つてしまつたのぢや。

おそよ。

もし、伯母さま。そんなことが聞えては……。

お石。

(元奮して。)え、聞えても構はぬ。いつそ文七の代りに、この母を縛つて行くがよい。

おそよ。

(困つて。)はて、まあ、静かになされませ。お、いつの間にか雨が降つて來ました。

お石。雨が降つて来た……。(空をみる)

(薄く雨の音。)

おそよ。

さあ、さあ、早く内へお這入りなされたが好うござります。

(おそよはお石をなだめるやうにして、上のかたへ連れてゆく。雨の音少しく強くなる。下のかたより番頭傳兵衛出づ。)

傳兵衛。

やれ、やれ、たうとう降つて来た。職人どもは何をしてゐるのか。(下の方にむかつて呼ぶ。)

これ、これ、早く来て干し物を取込めぬか。降つて来たぞ、降つて来たぞ。

(下のかたより安藏、喜七、彌吉等五人があわただしく走り出で、傳兵衛も手傳ひて干しものを片附ける。これにて幕をおろし、雨の音にてしばらく繋ぎ、再び幕をあける。)

(II)

もとの干し場。その夜の四つ(午後十時)を過ぎし頃にて窓の戸をしめ、干し物もすべて片附けてある。薄く雨の音。蛙の聲。

(下のかたより雁金文七、猿の假面をかぶりて頬かむりをし、古袋をきて忍び出で、あたりを窺つてゐる。又そのあとより酒菰をきて古手拭をかぶりたる乞食姿の捕手ひとり忍び出で、文七の舉動をうかがつてゐる。文七は窓の際へゆきて内の様子なうかどひ、やがて土藏の壁に滑り上のかたへ忍び込む。それを見とどけて、捕手は下のかたへ引返して去る。矢はり雨の音。蛙の聲。少しく間を置きて、下のかたより手代幸八は女中およしと相傘にて出づ。)

およし。

まだ降つてゐるやうでござんすな。

幸八。

このごろの天氣癖で降り出したら中々やむまい。まだそれほどに更けたといふでもないに、雨の降るせるか世間がひつそりして、裏の溝で蛙の鳴く聲がよく聞える。

およし。

なんだか寂しい晩で、氣味が悪い。(男に寄添ふ。)

幸八。

こゝへわたしを呼び出して、一體なんの相談があるのぢや。

およし。

おまへはこの頃なにやらそはくして落ち付かず、時々には夜ふけに歸つて来ることもあゝる。それがどうもわたしの氣にかゝつてならぬ。もしやほかに馴染の女子でも出来たのではないかえ。

幸八。

はて、飛んだことをいふ。おまへを袖にして、なんでそんな浮氣をするものか。

およし。いえ、いえ、おまへの落付かぬ様子がどうも唯事ではないらしい。めつたに夜遊びをしたことのないお前が、このごろはどうして夜更けまで出あるくのぢや。さあ、そのわけを聞かしてください。

幸 八。

これ、聲が高い。静にしや。(あたりを窺ふ。)おまへも知つてゐる通り、若旦那の文七様は出牢の日にお寺まるりにお出でなされ、そのお供をして行つたのはこの幸八ぢや。よもやと油断したのがわたしのあやまりで、若旦那には途中ではぐれてしまひ、それから起つたのが新町の一件ぢや。あの時にわたしがしつかりとお供をしてゐたら、あんな事にもなるまいものをと、おふくろ様の愚痴や恨みを聞きたびごととに耳が痛い。

およし。

我子の可愛いはもつともぢやが、こゝのおふくろ様のやうなものも珍らしい。若旦那のと云ふたら、まるで氣違ひも同然でござんすな。

幸 八。

そこで番頭殿とも相談して、百兩の金財布を首にかけ、文七様のゆくへを内々で探してゐるのぢや。

およし。

探しあて、そのお金を渡すのかえ。

幸 八。

知れたこと。その金を路用にして、遠いところへ逃がさうといふのぢや。それでわたしが

およし。

夜あるきの仔細もよく判つたであらうが……

幸 八。

成程そんなことでござんしたか。わたしは些つとも知らなんだ。それを知つてゐるのは、おふくろ様と番頭殿ばかりで、谷町の叔父御にも隠してあること

およし。

ぢや。決して人に云うてはならぬぞ。

幸 八。

もしそんなことがお上にきこえたら、お前もお咎めを受けやませぬか。

およし。

それゆゑに内々にせねばならぬ。(念を押すやうに。)よいか、かならず世間には漏らすまいぞ。

幸 八。

ぞ。

およし。

あい。

幸 八。

(二人は不安らしくあたりを窺ひて、幸八は俄に耳をかたむける。)

およし。

奥で何やら物音がするやうな。

幸 八。

(いよ／＼不安らしく。)え。

およし。

(幸八はおよしを制し、そつと窓の際に忍び寄りて内をうかがへば、およしも窺ふ。)

幸 八。

(小聲で。)ほんにをかしな物音がする。どうしたのでござんせうな。

幸 八。

(かんがへる。)もしや盗人ではあるまいかな。

およし。え。ぬす人……。

幸八。これ、騒いではならぬ。早く皆んなに知らせて来なければなるまい。

(幸八はぬき足をして下のかたへ行く。およしも怖さうにあとを見返りながら、つゞいて下のかたへ立去る。雨の音。)

(三)

雁金屋の奥。正面の上のかたに床の間。つゞいて奥へ出入りの襖。下のかたに土蔵あり。庭には立木、石燈籠、飛び石などあり。

(文七は簀をぬぎ、猿の面に頬かむりしたるまゝにて、反物の葛籠に腰をかけ、短刀を持つてゐる。お石とおそよは寝まき姿にて、反物の白布にてぐるぐる巻きに縛られてゐる。その前には手燭に火をとぼしてあり。)

文七。(作り聲して) さあ、金のあるところへ案内しろ。聲を立てたら命がないぞ。

お石。はい、はい。御案内をいたします。

文七。(せいて) さあ、早くしろ、早くしろ。金は土蔵のなかに仕舞つてある筈ぢや。

お石。よう御存じでござりますな。

文七。(躊躇して) それは前から睨んでゐるのだ。さあ、案内しろ。早く渡せ。

お石。(ふるへながら) はい、はい。

文七。さあ、貴様も行け。(おそよに短刀を突きつける。)

(おそよは無言で顫へてゐる。)

お石。それはよその家の娘でござります。どうぞ怪我をさせて下さりますな。

文七。なんでもいゝから早く行け、ゆけ。

(文七は幾たびか左右を見かへりながら、頻りに二氣を追ひ立てる。お石とおそよは顫へながら起ちかゝる。この時、上の方の庭口より職人の安藏と喜七は鉢巻きして尻を端折り、眞張り棒または薪ざつぼうを持ちて窺ひ出づ。)

安藏。うぬ、泥坊め。

喜七。太い奴だ。

(ふたりは縁にかけ上げれば、文七はあわてゝ手燭を踏み消して逃げようとするを、二人は暗がりに

て追ひまはす。文七は庭に飛び降りて下のかたへ逃げかゝれば、出逢ひがしらに手代長助と職人彌吉、ほかに職入二人、これも手に得物を持ち出て出づ。文七はうろたへて、またもや上のかたへ引返さうとすれば、安藏は縁を降り來りて文七に突きあたる。

泥坊めはこゝにゐるぞ。

どこだ、どこだ。

それ、そつちへ逃げたぞ。

(六人は暗がりの中を探りながらに追ひ立つれば、文七は摺りぬけて逃げまはる。そのうちに文七は喜七の薪さつぼうにて短刀を打ち落され、長助の眞張り棒に向ふ脛を拂はれて倒れる。)

さあ、泥坊めをぶちのめしたぞ。

さうか、さうか。

(五人は聲をしるべに立寄りて、長助と共に文七を打ち据ゑる。上のかたより番頭傳兵衛は先に立ち、手代幸八は手燭を持ち出て出づ。)

どうした、どうした。

ぬす人めは引捕へたか。

安藏。
長助。
彌吉。
喜七。

五人。

傳兵衛。
幸八。

安藏。
喜七。

傳兵衛。

この通りぢや、この通りぢや。

半殺しにして縛りあける。

(六人は又もや打たうとするを、傳兵衛は止める。)

まあ、待て、待て。いくら盗人でも息の根を止めてはあとが面倒ぢや。兎もかくも逃がさぬやうに縛つてしまへ。(座敷を見て)お、おふくろ様もおそよ様もあの通りぢや。早く繩を解いてあけぬか。

(幸八と長助は縁にかけ上りて、お石とおそよの布を解けば、職人等はその布にて文七を嚴重にくくり上げる。幸八は自分の手燭をお石の前に置く。)

もし、どなたもお怪我はござりませぬか。

別に怪我はないから安心しやれ。

おふくろ様と床をならべて、うとく寝付いたかと思ふ間もなく、枕を蹴つて引き起され、すぐに縛りあけられてしまつたので、どうなる事かと生きた心地もござりませなんだ。それでは本當の押込みぢやな。雁金屋には腕節の強い若い者が揃つてゐるとも知らずに、

押込んで來たのが運の盡きぢや。えらい阿房めが……。

長助。

傳兵衛。

どんな奴か、面をあらためて見るがよい。

傳兵衛。

(傳兵衛は立寄つて手燭をさし付ければ、職人等は文七を引き起してその顔を上げさせる。)

安藏。

やあ、こいつは猿の面をかぶつてゐるぞ。

喜七。

人間の顔を晒しては、この眞似は出来まい。これがほんの手長猿ぢや。

彌吉。

どれ、猿めの正體を見あらはして遣らうか。

傳兵衛。

(文七は面を取るまいとするを、職人等は無理におさへ付けて剃ぎ取り、その顔をのぞいて驚く。)

職人等。

やあ、若旦那か。

傳兵衛。

文七様ぢや、文七様ぢや。

お石。

(あわてゝ制す。) 叱つ、叱つ。静かに……静かに……。

傳兵衛。

いや、唯今それへお連れ申します。

(傳兵衛は職人等に指圖して文七はの繩を解かせ、縁先へ連れて来る。文七ぐつたりして縁に腰をおろせば、お石もおそよも待ち兼ねて立寄る。)

お石。

これ、文七。おまへは今まで何處にゐたのぢや。まあ、まあ、見る影もない姿をして……。

文七。

(涙ぐむ。) このあひだ着て出た着物はどうしました。

お石。

(力なげに。) あれから一月餘りの間、飲まず食はずにはゐられぬので、上着は勿論、帯から襦袢までだんく、賣り拂つてしまひました。

文七。

身の皮はいで今日まで命をつないでゐたのか。家を出るときに渡して遣つた三百兩、あれはどうしました。

おそよ。

まだ幾らも使はぬうちに召捕られ、繩をぬけて逃げるはずみに、財布のまゝでどこへか振り落してしまひました。

文七。

さうして、今までどこに隠れておいでなされた。

おそよ。

(いよゝゝ凋れて。) どこと云つて隠まつてくれるところも無し、人通りの少い近在をうろ付いて、晝は土手の下や辻堂の床下に這ひかゝみ、夜になつて食ひ物を探してあるく……。

お石。

乞食や犬猫にも劣つた身の上となり果てたのぢや。

おそよ。

(涙ぐむ。) おいとしい事でござりますな。

お石。

それほどになつたらば、なぜ竊と尋ねて来てはくれぬのぢや。若しやそんなことではある

まいかと案じらるゝので、この幸八に百兩の金を持たせて、お前のゆくへを毎日探させて
ゐたのぢや。

文七。

(泣く) ありがたいことでござります。勿體ないことでござります。そんな事とは夢にも知
らず、所詮は御勘當の身の上、表向きに御無心申したとて逆も肯いて下されう筈は無し、
さりとして今は一錢のたくはへもなく、餓ゑ死は目のあたり、いつそ淵川へでも身をなけて
死んでしまはうかとも存じましたが、やつぱり未練でそれもなりませぬ。

お石。

文七。

脊に腹はかへられぬ破目となりまして、悪いこと、は知りながら、面をかぶつて御無心に
まゐりました。

おそよ。

そんならさうとなぜ正直に打明けては下さらぬ。怖ろしい盗人の眞似をしておふくろ様を
くゝり上げて……。

文七。

さあ、その怖ろしいも勿體ないも、萬々承知してゐながらも、あまりの面目なさに文七は、
おふくろ様やお前達にどうもこの顔が合はされず、猿の面をきたまへで、畜生にも劣つた
強盗家尻切りの眞似をして、幾らかの金を拜借しようと思つたが、その天罰は靦面で……。

お石。

あゝ、悪いことは出来ぬものぢや。(お石に) もし、おふくろ様。ついしたはすみで飛んだ
ことをして、お手は痛みはしませぬか。恐れ入りました、あやまりました。どうぞ御勘辨
くださりませ。(手をついて詫びる。)

(涙をふいて) たとひ飢死するやうな破目になつても、他人の物には眼をかけず、わが親の
家へ忍んで来たは、まだくしほらしい所がある。親の物は子の物で、この家の身上は
みんなお前の物と決まつてゐるものを、いかに面目ないと云うて、顔をかくして盗みに來
るといふことがあるものか。わたしは兎も角も、年の若いおそよ殿にも怖い目をみせて、
可哀さうぢやとは思はぬか。改めてよく詫びをするがよいぞ。

文七。

では、おまへ様は堪忍して下さりますか。

お石。

わたしは眞實の親子ぢや、どのやうなことも勘辨してやります。早くおそよどのに詫びを
しやといふに……。

文七。

あい、あい。(おそよに) これ、おそよ殿。飛んだ茶番狂言をして、たとひ一時でも怖い目
を見せたは、わしが一生のあやまりぢや。堪忍してくれ、堪忍してくれ。

おそよ。

伯母さまが堪忍なさるといふに、なんでわたしが兎やかう申しませう。

文七。 おまへも堪忍してくれるか。

おそよ。 あい。

文七。 おふくろ様も屹と堪忍して下さりますな。

お石。 はて、くだい。今も勘辨して遣ると云ふたではないか。

文七。 左様でござりますか。

(今まで凋れてゐた文七は俄に形をあらため、屹となつて他の人々を睨めまはす。)

文七。 さあ、これでおれの詮議は済んだ。これからはうぬ等の詮議ぢや。やい、傳兵衛。

傳兵衛。 はい、はい。

文七。 幸八、長助。

二人。 はい、はい。

文七。 安藏、喜七、彌吉。まだそのほかには新參の職人共、どいつも這奴もみんなそれへ出ろ。

五人。 はい、はい。

文七。 おのれ等は揃ひも揃つて、よくも此の文七を手籠めにしたな。

傳兵衛。 わたくしがなんでお前様を……。

文七。 むい、傳兵衛と幸八はあとから来た。それはおれも知つてゐるが、おのれ等もかゝり合ひ

がないとは云はせぬ。取分けて憎いは長助と安藏、喜七と彌吉、それから二人の奴どもぢや。この六人の外道めは何でおれを手籠めにして、骨も碎けるほどの痛い目に逢はせたのぢや。

六人。 え。(顔を見合わせる。)

文七。 おふくろ様へお詫がかなへば、文七はこの雁金屋の御子息様ぢやぞ。假にも主人と名の付く者をさんぐくに打擲して、これ見ろ。(腕をまくつて見せる。)この通り、右の腕にも左の手首にも疵が付くやら痣が出来るやら……。いや、またあるぞ。(更に足をまくつて突き出す。)これを見たか。兩足の向ふ脛から膝がしらまで何十ヶ所といふ打疵擦傷ぢや。うしろに眼がないので好くは見えぬが、肩口脊中も疵だらけでひりひりする。さあ、おのれ等主人を半殺しの目に逢はせて、それで無事に済むと思ふか。おのれ等も大かたは知つてる筈、主人に疵をつけた者は、引廻しの上に磔ぢやぞ。

六人。 え。(當惑する。)

傳兵衛。 その御立腹は御もつともござりますが、若旦那様と存じてをりましたら、なんで手籠め

にいたしませう。

幸八。

猿の面を着ておいでなされたので、まったく盗人と思ひ違へたのでござりませう。(六人に)

なう、さうであらうが……。

長助。

勿論、唯のぬす人ぢやと一圖に思ひつめまして……。

文七。

(呷鳴る) え、ぬけくと何をいふのぢや。この向ふ脛を折れるほどに搔つ拂つて、泥坊

めをぶちのめしたと自慢さうに呷鳴つた奴は、長助おのれに相違あるまい。暗いなかでも

知つてゐるぞ。

長助。

え。

文七。

おのれが磔の眞先ぢやと思へ。

安藏。

それもこれもお前様とは夢にも存せぬからでござります。

喜七。

失禮の段々はまつびら御免下さりませ。

彌吉。

この通り、お詫び申します。

職人等。

おわび申します。(六人は手をついて詫びる。)

文七。

忌ぢや、忌ぢや。たゞ詫びたぐらるで堪忍のなることではない。お尋ね者と侮つて、主人

を手ごめにした奴等は屹と仕置をせねばならぬ。傳兵衛。その薪ざつほうをこれへ出せ。

(六人は又もや顔を見合せて、しりこみする。傳兵衛も躊躇してゐる。)

文七。

え、早く出せ。こいつ等を片端から存分にぶちのめして、おれの腹癒せをせねばなら

ぬ。

六人。

え。(いよくしりこみする。)

文七。

それとも主人を打つた科で、おのれ等は磔になりたいか。

六人。

え。

文七。

え、面倒な。その薪ざつほうを渡せといふに……。

(文七は縁を降りようとするを、おそよは支へる。)

おそよ。

もし、お前。それはあんまりでござります。まったく何んにも知らずにしたこと、よく詫

びさせて堪忍して遣つて下さりませ。

文七。

放せ、放せ。誰がなんといつても堪忍はならぬのぢや。この罰あたりめ、畜生め。

(文七はおそよを突き退けて庭に降り立ち、そこに落ちてゐる薪ざつほうを把りて、長助等六人を手當り次第になぐり付ける。六人はおどろいて左右へ逃げ去る。文七はなほ追はんとするを、傳兵

衛と幸八は遮る。お石も見かれて聲をかける。

お石。これ、文七。わたしが頼む。もう堪忍して遣つてくりや。

文七。お前までがあいつ等をおかばひなさるか。

お石。かばふと云ふわけではなけれども、番頭やおそよがいふ通り、まつたくお前とは知らずにしたことぢや。そこを察して免して遣りや。一同に代つてわたしが詫びる。さあ、みんなも一緒に詫びたがよい。

傳兵衛。はい、はい。どうぞ御免をねがひます。

(傳兵衛と幸八も頭を下げる。文七は黙つてゐる。)

傳兵衛。かうしておわびが済みましたら、みんな引き退りましても宜しうござりませうか。

お石。お、さうぢや。おまへ達がこゝにゐるは、いつまでも文七の機嫌が直るまい。わびが済んだら早う行きや。

傳兵衛。はい、はい。(幸八に眼で知らせる。)では、幸八。

幸八。はい、はい。

(傳兵衛と幸八は上の方へ早々に立去る。)

文七。(そのあとを睨みまはして)どいつも這奴も罰あたりめ。おのれ等の行末は碌なことではあるまいぞ。

お石。(なだめるやうに。)はて、もう堪忍して遣りやといふに……。さあ、おひくゝに夜も更ける。雨の降るなかに立つてゐるは冷えるであらう。これへ來や。早く内へ這入りや。

(文七は無言にて再び縁にあがる。)

お石。さつきから忘れてゐたが、お前はひもじうはないか。女中たちを呼んで喰べ物の仕度をさせませうか。

おそよ。ほんにさうでござりました。わたしも手傳つて運んで來ませう。(起ちかゝる。)

文七。(よび止める。)まあ、よい、よい。雁金屋の惣菜なら大抵知れてゐる。奉公人どもが食ひ残しの冷飯も食ひたくない。そこらへ出れば、夜あかしの煮賣屋もある。決してわしには構つてくれるな。そこで、おふくろ様。わたくしはお尋ねの身の上、こゝにうかくしてはゐられませぬ。もうお暇をいたします。

お石。はて、もう行きやるか。まだ話したいことも色々あれば、せめて今夜は泊つて行つては……。

文七。折角の思召しではござりますが、大勢の奉公人、どいつの口からどんなことが洩れやうも知れませぬ。

お石。それもさうぢやが……。 (考へる) では、どうしてもすぐに行きやるか。

文七。お名残り惜うはござりますが、ほとほりの冷めるまでは當分のあひだ、遠いところに身を隠さうかと存じてをります。

お石。それがよい、それがよい。大阪の近所には御詮議がむづかしい。當分は遠いところへ立退いて、時節を待つがよからうぞ。して、その路銀は幾らほど欲しいのぢや。

文七。それはお前様の思召しでよろしうござります。

お石。幸八にあづけて置いたのは百兩ぢやが……。

文七。その百兩は幸八が持つてゐるのでござりますか。

お石。幸八は正直者、毎晩歸ると一旦はわたしの方へ戻して置きます。その百兩ではどうであらうな。

文七。これから遠いところへ行つて、三年五年を送りますには…… (かんがへる)。

お石。では、もう百兩増して二百兩、それでよからうな。

文七。とても事に、もう百兩お増し下さりませぬか。

お石。このあひだ三百兩を渡して、また三百兩……。これだけの店をかまへてゐても、無いものは金ぢや。二百兩ではどうしても不足かな。

文七。さあ。(又かんがへる) では、せめてもう五十兩おめぐみ下さりませ。

お石。あはせて二百五十兩か。

文七。はい。わたくしが一生に一度のおねがひでござります。

お石。掻きあつめたらその位はあるかも知れぬ。それから着換へを二三枚、一包みにして持つて行きや。

文七。重々ありがたうござります。

お石。金も着物も今持つて来る。暗くとも些とのあひだ待つてゐや。

(お石は手燭を持ちて奥に入る。薄く雨の音。文七は暗いなかでおそよに聲をかける。)

文七。これ、おそよ。こゝへ來やれ。

おそよ。あい。

(おそよはあざり寄れば、文七は探りながらに袖をつかむ。)

文七。今も聞いてゐる通り、おれはこれから遠國へ行かねばならぬ。お前も一緒に行く氣はないか。

おそよ。(おどろいて。)さあ。

文七。おふくろのあまいのを知つてゐながら、いつまでも面をぬがずゐるのがおれの不覺で、いや散々の目に遇つてしまつた。併し哀れつほく持ちかけて、先づはとこほりなく手に入つた二百五十兩、それだけあれば當分は江戸へ行かうが長崎へ行かうが、遊んで暮せるといふものぢや。おまへはおれと一緒に江戸見物がしたくないか、長崎見物がしたくないか。

(おそよは黙つてゐる。)

文七。文七と道行は忌か。

おそよ。忌といふではござりませぬが……。

文七。暗いので顔はみえぬが、どうやら不承知らしい口ぶりぢやな。お前とおれとは親が許した仲ではないか。

おそよ。でも、遠いところへ行くことは、あらためて父さんの許しを受けませいで……。

文七。(笑ふ。)父さんに相談すれば、不承知は知れてゐる。おれはお前の料簡を聞いてゐるのぢや。どうでも忌か。

おそよ。さあ。

文七。(おどすやうに。)忌ぢやといへばおれも男の意地、お尋ね者の文七が行きがけの駄賃におまへの命を取るぞよ。

おそよ。えい。(ふるへる。)

文七。命が大事なら一緒にゆくか。

おそよ。では、せめて伯母様と相談して……。

文七。むい。おふくろがよいと云ふたら屹と行くな。

おそよ。あい。

(下のかたより乞食に姿をかへたる以前の捕手忍び出て、縁さきに近寄りて窺ひゐる。)

文七。おふくろは承知にきまつてゐる。それは大丈夫ぢや。(笑ふ。)さうしたら江戸がよいか、長崎がよいか。

おそよ。さあ。

文七。

詮議を逃れるには長崎の方がよいかも知れぬ。傳手を求めて唐人屋敷を見物させてやるわ。

お石。

（奥よりお石は着物をつゝみたる風呂敷と金財布を持ち、片手に手燭を持ち出ていづ。）

さあ、持つて来ましたぞや。

（云ひながら手燭のひかりに捕手のすがたを照らし見て、あつと驚く。おそよもおどろく。文七は跳ね起きて、短刀を片手に奥へ逃げ込む。捕手もつゞいて追つてゆく。お石とおそよは顔を見合せてうろくしてゐる。）

(四)

もとの干し場。

（下のかたより紙屑買に姿をかへたる捕手出づ。やがて正面の窓をあける音に、捕手は身をひそめて窺ふ間もなく、雨戸をあけ、竹格子をばら／＼と毀して、文七は表へ飛び降りれば、待ち受けたる捕手は立塞がる。）

捕手。

文七、御用。

文七。

人違ひ……。人違ひでござります。

（文七は頻りに人違ひを叫びながら、短刀をふりまはして逃げようとするところへ、乞食姿の捕手も窓より飛び降りて組みつき、二人は遂に文七を取つて押へて細をかける。）

捕手一。

文七。立て。人違ひでござります。人違ひでござります。

文七。

わたくしは、文七ではござりませぬ。人違ひでござります。

捕手二。

卑怯なことをいふな。

文七。

でも、人違ひで……。

（云ひながら隙をみて逃げようとするを、捕手は押へる。）

捕手一。

おのれ二度の縄ぬけはさせぬぞ。

捕手二。

太い奴め。立て、立て。

二人。

立て、立て。

（捕手は手暴く文七を引立てる。毀れたる窓よりおそよは手燭を持ち、お石も共に顔を出して泣きながら見送る。雨の音。蛙の聲。）

幕

長柄の人柱

大正二年五月作。昭和三年三月改作。
昭和三年四月。歌舞伎座上演。

上演當時の主なる役割——魚子（中村歌右衛門）鳥子（中村福助）岩豊彦（市川左團次）伴時輔（澤村訥子）番匠安熊（市川左升）小熊（市村龜藏）里の若者樫男（市川權十郎）里の女房綱手（市川莚升）漁師次成（河原崎長十郎）下部赤名（市川九團次）里の長（坂東村右衛門）など。

登場人物——巫子魚子。魚子の妹鳥子。岩豊彦。伴時輔。番匠安熊。安熊の弟子小熊。おなじく杉丸。里の若者樫男。里の女房綱手。里の娘眞呂屋。漁師次成。里の男甲。里の男乙。下部赤名。ほかに里の長。伶人。巫子。時輔の家來。里の男。女。小兒など。

(11)

年代は明かならず、しばらく傳説にしたがつて、今より一千百餘年前の昔、嵯峨天皇の弘仁年間の事と定む。晴れたる初夏の日の午後。
攝津國、長柄堤。正面は崩れかゝりたる草堤、所々に川柳の立木あり。堤の下は河原にて、こゝにも柳の立木。堤の裾には荻など生えて、石のあひだには河原撫子も紅く咲いてゐる。河原の一方には新に橋を作るために伐り出されたる橋臺用の材木が積んであり。堤に向ふには森、田畑、在家なども見ゆ。

長柄の人柱

(番匠 安熊は老人、安熊の弟子小熊と杉丸は若者、材木に腰をかけてゐる。里の女房綱手と娘眞呂屋は堤の裾に腰をかけてゐる。里の男甲、乙の二人と漁師次成は、河原の石に腰をかけ、或は立つてゐる。水の音薄くきこゆ。)

男 甲。

このあひだ花が散つたと思つたら、急に夏らしくなつて、日中は随分あついな。

男 乙。

それでもこゝは柳が繁つてゐるので、好い日かけが出来てゐるのだ。

杉 丸。

そつちの河原へ出てみる。石や砂がきら／＼して眼を射られるやうだ。

綱 手。

暑いなどと云つてゐては濟まぬことぢや。けふは長者の旦那様がお立ちなさるといふではないか。

眞呂屋。

わたしもそんな噂を聞きましたが、本當のことでござらうか。

次 成。

ほんたうだ、本當だ。おれは確に聞いて來た。豊崎の御社のお巫子殿もさう云つてゐられた。

男 甲。

この長柄の橋はむかしから幾度架けかへても、少し大きい水が出ると、屹と押流されてしまふので、どうにも手の着けやうが無かつたのだ。なう、安熊どの。

綱 手。

(安熊はだまつて考へてゐる。)

男 乙。

ところが、先ごろ神さまのお告げがあつて、この橋を堅固に保たせようとするならば、第一の橋杭の下に人柱を立てると教へて下されたと云ふことぢや。

男 甲。

その有難いお告げを聞いて、成程さうかとは云つたものゝ、扱その人柱になる人間が無い。いかに世間の爲だと云つても、誰でも命は惜いからな。

安 熊。

(初めて口をひらく。) その人柱にはおれがなりたかつたのだ。

次 成。

むゝ、おまへが人柱になりたいと願つて出たといふことは、俺も知つてゐる。

安 熊。

併しおまへを人柱にしてしまつては、肝腎の橋を作る職人が無くなるといふので、みんなが承知しなかつたのだ。

男 甲。

(起ちあがる。) 遠い昔のことは知らないが、おれはこれまでに此の橋を三度作つた。(繰返し) 三度だ、三度だ。さうしてそれが三度ながら押流されてしまつたではないか。つまりはおれの腕が鈍いからで、考へると残念でならない。その申譯におれが人柱となるのが本當だ。

男 乙。

(小熊も亢奮して起ちあがる。)

小 熊。

まつたくお師匠さまの云ふ通り、おれたちの腕がしつかりしてゐれば、どんなに長い橋で、長柄の人柱

次成。も大きい橋でも、きつと満足に架けられる筈だ。いや、さうばかりは云はれない。どんな名人が作つても、水神の思召に叶はなければ成就するものではないのだ。

男乙。さうだ、さうだ。おまへ達の腕が鈍いといふのではない。我々が神さまのお心を知らなかつたからだ。それに付けても、長者の旦那殿は尊いお人だ。

安熊。(嘆息する)む、長者どのは尊いお人だ。所詮人柱を立てなければならぬと云ふならば、誰彼れと詮議するよりも、この俺がなると云ひ出された時には、おれたちも實にびつくりした。

綱手。長柄の長者といへばこゝらでも隠れない旦那様が、何不足のない身を以て、自分が人柱に立たうとは、あんまり思ひも付かないことであつた。

杉丸。それも不斷から情ぶかく、信心深いお人だから、神様のお心にもかなひ、人の爲にもなることなら、自分が進んでその生費にならうと覺悟されたに相違ないのだ。

小熊。長者のこゝろはよく判つてゐるが、どう考へてもおれは残念だ。人間ひとりを生費にしなければ、どうしても此の橋は出来ないものかなあ。

次成。まだそれを云つてゐるのか。この廣い世の中には、お前達のやうな若い人には判らないこゝろが澤山あるのだ。

小熊。では、おまへには判つてゐるのか。

次成。さあ、おれにも確には判らないが、なんだかほんやりと判つてゐるやうな氣もするのだ。ほんやりでどうなるものか。はつきりと判らないことは、判らないと云ふ方が本當だ。

安熊。まあ、こゝで議論をしても仕方がない。もう何も彼も決まつてしまつて、日が暮れると、長者どのは唐櫃に入れたまへで、第一の橋臺の下に沈められるのだ。さうして置いて、あしたから俺達は自分の仕事に取りかゝらなければならぬ。む、さうだ。ほかの職人達にもまだ云ひ聞かして置くことがある。(小熊等に)おまへ達も來い、來い。
(安熊は先に立ちて行きかゝる時、堤の下のかたより里の若者樫男は弓矢を持ち出て出づ。)

安熊。お、樫男か。弓矢を持つてどこへ行く。

樫男。雉をさがしに行くのだ。巫子殿が今夜の祭に供へるので、けふ中に取つて來いといふのだが、あひにくに一羽も見つかからないので困つてゐるのだ。

次成。おまへは雉を云ひ付かつたのか。おれも巫子様から鯉を供へると云ひつかつて、大きいの

を一尾納めて来た。

榎男。おまへの役はもう済んだか。おれも日の暮れるまでには、どうしても見付けなければならぬ。

杉丸。(上のかたを指さす。) 雉はあつちの方の森によく鳴いてるぞ。

榎男。むい。これからあつちへ行つてみようと思ふのだ。

(榎男は雉笛を吹きながら上のかたへ立去る。)

安熊。おれ達ばかりではない。かういふ事があると、誰も彼もみんな忙がしいのだ。

(安熊は二人をみかへりて堤にあがる。小熊と杉丸もあとに附きて下のかたへ立去る。)

綱手。さあ、わたし達もそろそろ行きませうか。

(雉の聲きこゆ。)

眞呂屋。あれ、雉が啼いてるます。

綱手。あれは榎男殿の笛であらう。

男甲。いや、ほんたうに雉が啼いてるらしい。

男乙。あの男ももう少しこゝらにゐれば好かつたに……。早く行つて教へて遣らうか。

男甲。さうだ、さうだ。

(甲乙は堤へ上りて、足早に上のかたへ立去る。)

次成。(綱手に。) わたしはおまへ方とおなじ道だ。一緒に行かうかな。

(次成と綱手、眞呂屋は堤に上がりて、下のかたへ立去る。雉の聲きこゆ。堤の上より榎男は引返して出づ。)

榎男。なるほど何處かで雉の聲がきこえるやうだが……。え、人をじらす奴だな。

(榎男は空をみながら下のかたへ立去る。上のかたより岩の豊彦、都より歸りし青年、下部の赤名と共に旅すがたにて出づ。)

豊彦。(あたりを見る。) こゝらの景色は昔のまゝで、ちつとも變つてゐないな。

赤名。わたくし共は年中見馴れてゐるので、一向に判りませんが、やはり變つて居りませんか。

豊彦。景色ばかりではない、人間のこゝろも些つとも變らないとみえる。それだから今度の人柱

のやうなことも出来るのだ。おまへが知らせに来てくれなければ、おれは夢にも知らず

にゐたのだ。

赤名。大旦那様が仰しやるには、せがれに知らせれば止めるは必定、決して知らせて遣るなどの

長柄の人柱

事ことでござりましたが、何なに分ぶんにも餘よの事こととは違ちがひますので、急いそいでお知しらせに參まゐつたのでござります。

豊彦。

む。よく知しらせてくれた。家け來らい眷けん族ぞくが大おほ勢せいるても、かういふ時ときにはなんの役やくにも立たたない。お前まへがるなければ、大だい事じの親おやを失うふところであつた。なんにしても早はやく歸かへつてお止とめ申まをさなければならぬ。

赤名。

どうしてもお止とめになりますか。

豊彦。

知しれたことではないか。

赤名。

(疑うたがふやうに。)しかし大おほ旦だん那な様さまが御ご承しょう知ちなされませうか。

豊彦。

承しょう知ちでも不ふ承しょう知ちでも、おれが道だう理りを説とき明あかして、屹きつと思おもひ止とまらせるのだ。

赤名。

かうと知しつたらお知しらせ申まをさない方がよかつたかな。

豊彦。

なんでもいゝから早はやく行いけ、行いけ。

赤名。

はい、はい。

赤名。

(二人は下ふたりのかたへ行いきかけて、赤あか名なは豊とよ彦ひこの袖そでをひく。)

赤名。

もし、向むかふから來くるのは鳥とり子こどのでござります。

豊彦。

お、鳥とり子こ……。しばらく逢あはぬうちに、立りつぱ派ぱな女おんなになつたな。

赤名。

妹あやうだい姉せ揃ぞろつて美うつくしいお巫み子こだと、こゝらでも評ひやう判はんでござります。

鳥子。

(下しものかたより豊とよ崎さきの社やしろの巫み子こにて鳥とり子こといふ若わかい女おんな出いでづ。)

鳥子。

お、豊とよ彦ひこどの。遠とほり目めに見みかけた姿すがたがどうもそれらしいと思おもつたら、やつぱりさうであつた。(なつかしさうに駈かけるよる。)もし、おまへの歸かへりを待まちつてゐました。

豊彦。

わたしもお前まへに逢あひたかつた。近ちかいやうでも京きやうと浪なみ花はな津つと離はなれてゐると、思おもふやうに便たより

鳥子。

もならぬ。その後ごは別べつに變かはることもなかつたか。

鳥子。

姉あねもわたしも無む事じに神かみさまにお仕つかへ申まをしてゐました。京きやうへお上のぼりなされてから足あしかけ三年さん

鳥子。

……。 (豊とよ彦ひこをつつく見る。)しばらくお目めにかゝらぬうちに、お前まへは立りつぱ派ぱにおなりなされ

鳥子。

ましたな。

豊彦。

それをわたしも云いつてゐたところだ。しばらく逢あはぬうちに、お前まへこそ立りつぱ派ぱな女おんなになつた。

豊彦。

忘れもせぬ、わたしも學がく問もん修しゆ業ぎやうに京きやうへ上のぼることになつて、いよく明あした日にちは出しゆつ發ぱつするといふ

豊彦。

前まへの日ひのゆふ方がたに、おまへとこの堤さへの上うへで……。お、さうだ。丁ちやう度どこの柳やなぎの木きの下したで逢あ

豊彦。

つたのだ。

長柄ながへの人ひと柱はしら

鳥子。

學問修業に京へ上れば、三年か五年は戻らぬといふお話を聞かされた時には、わたしは何

豊彦。

だか悲しくなつて、その柳の木に倚りかゝつたまゝで暫らく泣いてゐました。その柳はむかしながらに繁つてゐて、二人は又こゝで逢ふことになつた。三年の月日は長

赤名。

いやうで早いものだな。
(思案して。)もし、若旦那様。わたくしは一足お先へまゐりまして、あなたがお戻りのこと

をお知らせ申して置きませう。御免くださりませ。
(赤名は二人を残して下のかたへ立去る。)

豊彦。

早速だが、聞きたいことがある。今度この長柄の橋をかけるに就て、人柱を立てるといふのは本當か。

鳥子。

あい。神のお告げがあつたのでござります。誰にお告げあつたのだ。

鳥子。

わたしのお姉に……
おまへの姉の魚子どのに……。では、やつぱり赤名の話は間違つてはゐなかつたのか。あ

いつめ、何をいふのかと實は半信半疑で歸つて來たのだが……。して、その人柱はわたし

豊彦。

の父と決つたのか。

鳥子。

お悼ましいやうではあるが、まことに尊いことぢやと、姉は涙を流して感じ入つて居りま

豊彦。

(罵るやうに。)馬鹿なことを……。
(おどろいて。)馬鹿なこと。

鳥子。

おゝ、馬鹿なことだ。飛んでもないことだ。そんなことに豊彦が大事の親を殺されてたま

鳥子。

るものか。いや、わたしの親には限らぬ、この長柄の里に住む誰の親でも誰の子でも、そ

豊彦。

んな馬鹿馬鹿しい人身御供にあけさせてなるものか。
では、おまへは世間から生神のやうに云はれてゐる、わたしの姉を信じては下さりませぬ

か。
信じない。どう考へても信じられないのだ。それで取る物も取りあへずに歸つて來たの

だ。
(鳥子は愁はしげに豊彦の顔を見つめてゐる時、矢を負ひたる一羽の雉が二人の前に落ちて來るに、

二人はおどろいて離れる。)

鳥子。

空から鳥が……。

豊彦。

おい、雉だ。矢を負つてゐる。

(豊彦は雉を取りあげて眺める。下の方より樫男は弓を持ち出て出づ。)

樫男。

おい、若旦那。お歸りでござりましたか。

豊彦。

樫男か。見れば弓矢を持つて……。この雉はお前が射たのか。

樫男。

巫子殿のお指圖でそこら中をさがしあるいて、半日がかりでやうくそれを射留めたのでござります。

豊彦。

巫子殿の指圖でこの雉を……。

樫男。

人柱を立てる時に、神前に供へるのださうで、漁師の次成は鯉を納め、わたしは雉を納めるのでござります。

豊彦。

人柱を立てる時にこれを神前に供へる……。おまへも俐口さうな若い者のくせに、そんな

樫男。

ことに駈け廻つてゐるのか。こんなものは捨て、しまへ。(雉を地に投げ捨てる。)

(おどろいて。)はて、勿體ないことをなされますな。(あわて、雉を拾ひ取る。)先づこれでわたくしの役目も済みました。

豊彦。

(樫男は早々に引返して去る。)

(舌打ちして。)わたしの生まれ故郷だが、この長柄といふ所には、どうして譯のわからない人間が多いかな。

(下のかたより小熊急ぎ出づ。)

小熊。

若旦那。あなたがお歸りになつたと云ふことを、今そこで赤名どのに聞きましたので、急いでお迎ひにまゐりました。(進みよる。)もし、若旦那。あなたは人柱のことを御存じでござりませうな。

むい、聞いた、聞いた。

豊彦。

わたくしにお願ひがござります。あなたがお歸りになつたを幸ひに、今度の人柱を止めさせて下さりませ。

小熊。

おまへも人柱を不承知か。

豊彦。

人柱などは止めさせて、もう一度わたくし共に橋を作らせて下さりませ。

小熊。

もう一度と限つたことはない。二度でも三度でもおまへ達に作つて貰はなければならぬのだ。おまへの師匠はこの浪花津にかくれもない番匠の名人ではないか。この橋一つが無

長柄の人柱

小熊。

事に架けられぬとあつては、末代までの名折れだぞ。その名折れが残念でなりません。人柱を立てたが爲に、やう／＼にこの橋が出来たと云はれては職人の耻辱、神も佛も頼まずに、この橋はわたくし共の腕で作つて見せたうござります。

鳥子。

いかに其のやうに遡つても、おまへ方の作つた橋は、今までに二度も三度も押流されてしまつたではござらぬか。

豊彦。

橋の流されるのは、ほかに仔細がある。それはそれとして、番匠を職とするお前達はたゞ一生懸命に作ればいいのだ。

小熊。

今度こそは一生懸命で屹と堅固に作らずには置きませぬ。萬一それが仕損じたら、其時こそは餘人を頼むまでもなく、お師匠様でもこの小熊でも、河の底へ飛び込んで、立派に人柱になりませう。

豊彦。

それにつけても早く親父さまに逢つた上で、篤と御意見を申上げるのが肝腎だ。して、その人柱を沈めるといふのは何日のことだな。

鳥子。

今日のゆふ刻でござります。

豊彦。

(おどろく。)けふの夕刻……。そんなに時が迫つてゐるのか。それならば早く云へばいいに……。

小熊。

お屋敷の前にはもう大勢の者が集まつてゐます。

豊彦。

おれは好い時に歸つて来た。もう一日おそければ取返しが付かぬことになつたのだ。

鳥子。

(豊彦は急いで行きかゝれば、鳥子は絶る。)
豊彦どの。わたしの姉を信じて下さりませ。お願いでござります。

小熊。

(豊彦は鳥子の顔をみて少し躊躇し、無言に振切つて下のかたへ走り去る。)
さうだ。おれも何かにつけて若旦那の加勢をしなければならぬ。

鳥子。

あゝ、これはどうなることか。
(鳥子は不安らしく、二人のあとを見送る。)

おなじく長柄の川邊。正面は川にむかつて大いなる祭壇を築き、その四隅に葉附きの竹を立て、注連を張りまはしてあり。向ふには長柄川が暗くみゆ。

(壇のまん中には巫子の魚子、廿七八歳、白の装束にて幣を持ち、うしろ向きになりて祈つてゐる。壇の四隅には妹の鳥子と、ほかに三人の若き巫子が坐り、いづれも後ろ向きになりて祈る。幣は五色にて、魚子は白を持つ。壇の下には二ヶ所ばかりに篝を焚き、壇の左右に俗人が列座す。上のかたに都の官人、伴時輔は腰掛けにかゝり、家來七八人が附添つてゐる。下のかたには里の長をはじめ、第一場の漁師、番匠安熊、そのほかの里人大勢が控えてゐる。綱手、眞呂屋、その他の女子供もまじつてゐる。俗人は樂を奏し、篝の前には矢はり白き服を着けたる巫子四人が舞つてゐる。巫子はやがて舞ひ終つて退く。)

時輔。もはや定め時刻であるが、人柱の贅はまだ参らぬか。

里の長。やがて参る筈でござります。今しばらくお待ちくださいませ。

時輔。それがしは工事検分のためにわざ／＼都より下つたのであるから、萬一このたびの工事に仕損じあらば、役目の落度と相成るので、何かと心配いたして居るが、人柱の贅をさへけた上は、すぐに橋杭を打つ用意は整つて居るであらうな。

里の長。はい、はい。

(長ばみかへれば安熊は進み出づ。)

安熊。仰せの通り、明朝より早速仕事に取りかゝる筈でござります。

時輔。間違ひはあるまいな。

安熊。はあ。

(向ふより第一場の里の男甲乙二人、松明を持ちて走り出づ。)

男甲。長者殿はもう屋敷を出られました。

里の長。お役人様はさつきからお待ち兼ねだぞ。別に故障が起つたのではあるまいな。

男乙。別に故障といふわけでもござりませぬが……。(甲と顔を見あはせる。)

時輔。(聞き咎める。)なにか迂闊な口吻だぞ。(甲乙に。)これ、はつきりと云へ。

男甲。(躊躇しながら。)實は都から息子殿が戻られました……。

里の長。お、息子どの……。豊彦どのが戻つて来たか。

男乙。それで少しく暇取つたのでござります。

時輔。では、親子の別れに暇取つてゐるのか。(うなづく。)それも無理もないことだ。

長柄の人柱

男 甲。 まだそればかりではござりませぬ。

男 乙。 これ。(甲の袖をひく。)

里の長。 そればかりではない……。ほかに何事かあつたのか。

(甲乙は再び顔を見あはせて躊躇する。)

時 輔。 貴様達はどうも怪しいぞ。はつきりと云へと申すに……。おのれ等、おれの前で包み隠すと免さぬぞ。

甲 乙。 はあ。(まだ躊躇してゐる。)

(向ふより里の男二三人は松明を持ちて先に立ち、ほかに大勢の男は白木の唐櫃の前後をかこみて出づ。唐櫃は人を入れたるものにて注連を張り、白衣の者が荷つてゐる。そのあとには豊彦が附いてゐる。それを見て、舞臺の人々は起ちあがる。)

次 成。 おい、来た、来た。

綱 手。 白木の唐櫃を擔いで来た。

里の長。 これ、これ、立騒いではならぬ。鎮まれ、鎮まれ。

(二行は肅々として來り、唐櫃を舞臺のまん中に運びて、祭壇の前に据ゑる。)

時 輔。 おい、贅はとゞこほりなく參つたか。(里の長に。)いかに取計らつてよいか、巫子どのに尋ねてみる。

はあ。(壇の前に進み出づ。)お巫子どのにお伺ひ申します。長者どのを入れた唐櫃が唯今こ

里の長。

れへ參りました。

魚 子。

(みかへる。)もはや到着いたしましたか。(他の巫子等に。)それ。

魚 子。

(魚子をはじめ、他の巫子四人もみな正面に向き直る。)

魚 子。

(時輔をはじめ、一同は形をあらためて唐櫃に敬禮す。)

都の官人、里の長、そのほか重なる人々は已に御存じのことではあれど、こゝに集まる大勢の人々のうちには、唯その噂を聞けばかりで、人柱の仔細を詳しく知らぬもあらうかと

思はれますれば、改めて一應説き明して置かねばなりません。よくお聞きなされ。

魚 子。

(人々は再び頭を下げる。豊彦だけは頭をあげて、黙して聴いてゐる。)

今より百六十餘年の昔、孝徳天皇の大化年中に、近國諸國の橋々を架けよと命ぜられ、先づ第一に宇治橋、次にこの長柄の大橋をかけられたは、往來の難儀を救はせたまふ思召し

で、世に有難き御恩でござりました。とは云へ、それより幾年月を過ぐるあひだに、長柄の橋は名のみ残りて、その跡さへも定かには判らぬやうになり果てました。かくては諸人の不便とあつて、その後幾たびか新しく架けかへても、橋はわづかに一年、あるひは二年三年のうちに、仔細もなくして崩れ落つるか、又は出水に押流さるか、いづれにしても必ず長くは保たぬは、不思議の事ではござりませぬか。

(魚子は人々をみまはせば、豊彦は笑ひながら進み出づ。)

巫子殿のお詞ながら、それが何で不思議であらう。お身達はこの土地に年久しく住みながら、地の理を知らぬか。水の筋を御存じないか。淀の大河は北より下り、西へ流れて海に入る。その水の筋は途中から二つに分かれて、一方は海へそそぎ、一方はこの長柄の川へ落ちて来るのであれば、さみだれ又は秋の長雨に、大河の水嵩が加はつて、勢ひ凄まじく漲り落つるときには、本流の水が枝川に溢れ込んで、こゝらの橋の押流さるゝは、まことに避けがたき自然の數で、新に水路を開かぬ限りは、いかに堅固の橋を作つても、時には落ちることもある。流されることもある。それほど見易き道理をわきまへず、妄りに不思議を説かるゝは、人を惑はすと云ふものではござらぬか。

豊彦。

魚子。

理窟はなんでも云はるゝものでござります。兎も角もわたしの話を仕舞までお聞きなされ。このたび都よりの御沙汰として、長柄の橋を元のごとくに架けよとある。さりとて今までの例によれば、たとひ一旦は架け換へても、長く保たぬは知れてあるので、里の人々も色々に苦心してゐられます。わたくしも神に仕ふる身であれば、今度こそは此の橋に禍のないやうにと、一心をこめて祈つてゐるうちに、或夜のこと、ありくと神の示現を蒙りました。

豊彦。

(又笑ふ。)判りました。わかりました。その話はもう聞いてゐます。尊い巫子どのに神のお告げがあつて、人柱を立てよと教へられたと云ふのでござらうな。

その教へをお疑ひなさるか。

(やはり笑つてゐる。)お身は確に神のすがたを見、神の聲を聞かれたのか。

神のお姿も拜みました。お聲も聞きました。

(又笑ふ。)勿論さう云はねばなるまいな。

では、お身はこの世に神佛はないと思はれますか。

いや、神があるか、佛が無いか、わたしは今こゝでそれを論じてゐるのではござらぬ。唯

魚子。 豊彦。 魚子。 豊彦。 魚子。 豊彦。

長柄の人柱

魚子。

今度の人柱に就ては、疑はずにはゐられぬと云ふのでござる。
今度の人柱について……。では、わたしの云ふことは神のお名を騙る偽り言であると云はれるのか。

(豊彦はそれに答へずして左右を見かへる)

豊彦。

巫子殿と議論ばかりしてゐても始まらない。わたしは大勢の人に話して聞かせたいことがある。皆も知つてゐる通り、わたしは學問修業のために京へ上つて、このごろ出来た勸學院といふ學校で特別に勉強させて貰ふことになつたが、その勸學院で蒙求といふ書物を教へられた。判つたかな、蒙求といふ唐の書物だ。その蒙求のうちに斯ういふ話があつた。少し長いかも知れぬが、面白い話だからまあ聽いてくれ。

里の長。

豊彦どの。その蒙求の話とかいふのは、どんなに面白いことか知らぬが、場合が場合であり、都のお役人様も聽いてござる處で、ゆるくと長話は……。

豊彦。

いや、實は都のお役人にもお聽かせ申したいのだ。その話といふのは、魏の文侯のときに西門豹といふ人があつて、鄴といふ土地の縣令になつた。その土地には昔から不思議の習はしがあつて、毎年ひとりづゝの若い女を河へ沈めて、河の神にさゝけると云ふことにな

つてゐる。それを怠ると必ず大水が出るといふのだ。は、どこの國にも似たことがあるものではないか。

里の長。

時輔。

これ、豊彦どの……。
待て、待て。豊彦が勸學院で學んだといふ蒙求の話が、何か今夜のことに係り合ひがありさうにも思はれる。兎もかくも話させてみる。

豊彦。

お聞き下さるか。(再び人々に向つて。) さあ、これからが面白くなるのだ。扱いよく、其時が来て、その縣令が行つて見ると、河のほとりには立派な祭壇を築いて、土地の長老や下役人どもが大勢控えてゐる。祭壇の上には巫子の頭が十人の弟子をしたがへて勿體らしく坐つてゐる。そこで生贄になる若い女を引出して、今や河へ投げ込まうとする時に、縣令がしばらく待てと聲をかけて、その女はどうも美しくない、そんな女では河の神の氣に入りさうもないから、けふの生贄は止めにするがよい。と云つて、河の神に沙汰無しでは悪いから、誰か行つてそのわけを斷つて來いといふのだ。併し大勢は顔を見合せてゐるばかりで、わたくしが行つてまゐりますと云ふ者もない。すると、縣令の云ふには、成程これは尤もだ。ほかの者ではこの使は出來まい。この使はどうしても巫子どのに頼むより外は

あるまいといふので、巫子の頭を壇の上から引摺りおろして、河のなかへ眞逆さまに投げ込んでしまつた。

(とよめく)おい。

一同。
豊彦。

暫くして縣令が又云ふには、使に行つたあの巫子は何をしてゐるのか、餘りに歸りが遅いではないか。お前達が迎ひに行つて連れて來いと、今度は弟子の巫子達を引つ捉まへて片端から河へ投げ込んだ。(云ひかけて笑ひ出す。)この話はもうこの位にして置かう。その以來、その土地では女を生贄にすることを止めたさうだ。はい、はい、はい。

魚子。

(冷かに。)お役人に申上げます。この豊彦といふ男は、見ぬ唐土の昔話にことよせて、神を誹謗するものでござります。わが神國に生まれながら、神を瀆すものでござります。速かに此場を立去るやうに、屹と御指圖をねがひます。

豊彦。
時輔。

いや、お役人には今の話がお判りになつた筈でござります。(かんがへる。)さあ、話の筋はわかつたが、それを今夜の場合に當嵌めてよいか悪いか。おれにも鳥渡判らないのだ。

魚子。

こゝろの浅い人がなまじひに學問すると、却つて身の禍になるといふことを、今更つくづ

く思ひ當りました。神を信じて我から進んで人柱に立たうといふ長者殿の忤に、こなたのやうな神を瀆す者が出來ようとは、淺ましいを通り越して怖ろしいことぢや。里の長殿にも申します。もう此の上は長者のせがれでも容赦はなりません。早く引立て、村境から追放なされ。

(人々は顔をみあはせて躊躇してゐる。)

魚子。

はて、なにを猶豫……。神が尊いか、長者のせがれが尊いか、おまへ方にも判つてゐる筈ではござりませぬか。それともお前方は今の話のやうに、わたしを始め四人の弟子たちをこの壇の上から引きおろして、一々に川のなかへ投げ込みますか。

(人々は恐れるやうに黙してゐる。)

魚子。

神に仕ふる私達に従ふか。神を瀆すこの男に味方するか。よく思案したが好うござるぞ。なるほど唐土にはどんなことがあつたか知らぬが、わが日本は神國であれば、やはり神にしたがふの外はあるまい。

時輔。

豊彦。

魚子。

まことの神ならばわたくしも従ひます。併しこれは偽りの神でござれば……。

また偽りと云ひますか。
長柄の人柱

豊彦。(激して。)お、偽りだ、偽りだ。

時輔。では、こゝに集まつてゐる一同に向つて、どちらの云ふことを信じるか、念のために聞き糺してみるとしようではないか。

豊彦。いかにもそれが宜しうござる。(起ちあがつて人々に向ひ。)さあ、どうだ。この豊彦のいふことを信じて呉れるだらうな。

(人々は黙してゐる。)

時輔。巫子殿のいふことを信じるか。

一同。(頭を下げる。)

(豊彦はそれを見て失望す。)

時輔。この上は論は無益だ。それ、その唐櫃をかき上げい。

(白衣の者は唐櫃の者に來る。)

豊彦。いや、待つてくれ。巫子殿にもう一度たづねたい事がある。この唐櫃をこのまゝに沈めて

も好うござるか。

魚子。(笑ふ。)なんで沈めてよいものか。

豊彦。え。(笑ふ。)さりとはあざとい巧みぢや。(巫子等をみかへる。)餘人の手を假りず、おまへ達が唐

魚子。櫃の蓋をあけて、この男の手品の種を大勢に見せてやるがよい。

はあ。

巫子。(鳥子等四人の巫子は壇を降りて、唐櫃の蓋をあげれば。番匠の小熊が這入つてゐる。それを見て

人々はおどろき騒ぐあひだに、鳥子等は元の座に復る。)

やあ、これは番匠の小熊ではないか。

里の長。お、小熊……。なんでお前が身代りに立つたのだ。

安熊。(又笑ふ。)身代りの偽者と入れかへて、神をあざむき、わたしを試さうとする。けに天晴れ

魚子。の手品師ぢや。この唐櫃をこのまゝに沈めてもよいかと問ひ、若しわたしがよいと答へた

ら、神を見る眼でその見透しが出来ぬかと、手を拍つて笑ふ心であらう。お身達のやうな

凡夫の浅い智慧で、わたしを謀らうとは愚なことぢや。お身たちに其のやうな悪巧みのあ

ることは、何も彼もみな知つてゐますぞ。

里の長。なるほど怖ろしい神通力だ。なう、皆の衆。

長柄の人柱

一同。さうだ。さうだ。

綱手。やつぱりお巫子どのは神様も同様ぢや。

眞呂屋。まつたく怖ろしいやうでござりますな。

小熊。(唐櫃を出る。)若旦那。残念でござりました。

豊彦。(かんがへる。)むむ。どうも不思議だな。

魚子。豊彦どの。こなたの家には赤名といふ下部があらうな。

豊彦。お、赤名……。 (大勢のなかを見まはす。)あいつが見えないぞ。

魚子。まことの長者を入れた唐櫃は、信仰のあつい赤名が附添つて、裏道づたひに河原まで運んである筈ぢや。

豊彦。やあ。あいつが裏切りをしたか。

豊彦。(豊彦と小熊はおどろいて上のかたへ駈けて行かうとするを、時輔の家來は支へる。)

豊彦。(身を藻がく。)え、放せ。お止めなさるな。わたしは自分の親を救ふのだ。自分の親を取返すのだ。放せ、放してくれ。

時輔。なにかの邪魔にならぬやうに、家來どもは其の二人をしつかりと取押へてゐる。

魚子。どうぞこゝにはお構ひなく、すぐに河原へお越しくださりませ。わたくしは今暫らく祈禱をいたして、やがておあとから参ります。

時輔。(一同に。)みなも参れ。

魚子。(時輔は先に立ち、里の長をはじめ人々は上の方へ立去る。豊彦も共に駈け行かんとするを、家來等は押へ付ける。番匠の安熊だけは立ちかたれて躊躇してゐる。)

魚子。(伶人に。)かねて申聞かせてある通り、いよく唐櫃を沈めるときには、合圖の樂を奏して下され。

伶人。はあ。(伶人等も上の方へ去る。)

魚子。(安熊を見て。)こなたは大事の役目をつとめる番匠殿ではないか。さあ、早く……。はい、はい。(豊彦に。)もう斯うなつては致方がござりませぬ。あなたもお諦めなされませ。

安熊。小熊もおとなしくして一緒に来い。おれ達はこれから第一の枕を打つて、末代までの話草になるやうな仕事に取りかゝらなければならぬのだ。

(安熊に促されて、小熊はよんどころなく附添ひて上のかたへ立去る。魚子等はうしろへ向き直りて再び祈る。豊彦は又かけ出さうとするを、家來等は又ひき戻して来る。壇の上より鳥子は不安らし

長柄の人柱

二八七

魚子。

(見咎める。)これ、鳥子。大事の祈りをよそにして、お前はうつかりと何を見てゐるのぢや。お前のやうな者は清い祭壇にゐることはなりません。さあ、下へ降りたがよい。えい、ここにゐることはならぬと云ふに……。

豊彦。

(魚子は妹を壇の下へ突き落す。正面の河原にて音楽の聲きこゆ。)

お、樂の音がきこえる。たうとう親を殺されるのか。(齒がみをして魚子を睨む。)それもみんなおのれの爲だ。巫子の悪魔め、おのれも河へ投げ込んでやるぞ。

鳥子。

(豊彦は必死の力を揮つて家來等を突き退け、魚子を目掛けて壇の上にかけて上げれば、三人の巫子は遮る。魚子は首にかけてたる短剣をぬいて、豊彦の胸を刺す。豊彦は叫んで壇の下に轉げ落ちる。)

魚子。

お、豊彦どの……豊彦どの……。 (鳥子は駆け寄つて豊彦に縋る。家來共はおどろいて眺めてゐる。)

魚子。

(三寶を見る。)こゝにも二つの生贄がある。一つは水に葬らるゝ父の姿、一つは土に葬らるゝ子の姿ぢや。

(魚子は巫子に指圖して、その雉を豊彦にみせてやれと云ふ。巫子の一人は雉をのせたる三寶をさゝげて豊彦の前に持つてゆく。)

豊彦。

(雉を取る。)お、これは……。 さつきの雉ぢや。

鳥子。

お、雉ぢや。かういふ歌を聴いておけ。――物云はじ、父は長柄の人柱、鳴かずば雉も撃たれざらまし。――ほ、ほ、ほ、ほ。

(魚子は立ちながらに嘸おろす。豊彦は雉をつかみしまゝ落るを、鳥子は介抱す。樂の聲つゞけて聞ゆ。)

幕

おさたの仇討

昭和二年十一月作。
昭和三年一月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——貝塚藤五郎（松本幸四郎）和泉屋伊兵衛（市川介十郎）
和泉屋伊之助（澤村宗十郎）番頭文吉（尾上幸藏）御旅の寅藏（守田勘彌）寅藏
の女房おさだ（尾上梅幸）花賣與右衛門（尾上松助）和泉屋の抱へ女お駒（澤村
訥升）若い者庄八（助高屋高助）手先長次郎（澤村田之助）お駒の弟徳松（坂東
しうか）など。

登場人物——同心貝塚藤五郎。和泉屋伊兵衛。和泉屋の忤伊之助。糸屋の番頭文吉。御
旅の寅藏。寅藏の女房おさだ。花賣與右衛門。和泉屋の抱へ女お駒。和泉屋の若い者庄八。
お駒の弟徳松。手先長次郎。ほかに寺男。湯灌場買ひ。町役人。番太郎の男。自身番の男。
和泉屋の若い者。和泉屋の抱へ女。手先。乞食。會式まるりの男。女。町の男。女。子供
など。

第一幕

(1)

江戸の末期。十月十二日の曉。
品川宿の往來。正面は旅籠屋——その時代の遊女屋——にて、出入り口には和泉屋と染めたる柳
おさだの仇討

色の暖簾を垂れ、左右は千本格子、格子の外には用水桶を積んであり。ほかに床几一脚あり。家は二階作りにて、二階の欄干は往來に向ひ、内には障子が閉めてあり。薄く浪の音、題目太鼓の音きこゆ。

(店の前には和泉屋の若い者二人、ひとりには水を打ち、ひとりには箒を持つてゐる。)

若者甲。

けふのお會式はどうか降らしたくねえものだな。

若者乙。

夜の明けねえうちから太鼓の音が威勢よくきこえるやうだ。こゝらぢやあお會式は一年中の書き入れだから、降られぢやあ型無しだ。

若者甲。

まつたく降られぢやあ型無しだ。(空をみる。)好い鹽梅に天氣は持直しさうだよ。

(池上の會式詣の男四五人、首に法華の珠数をかけ、團扇太鼓を持ちて、向ふより走り出づ。)

男一。

お捕物だ、お捕物だ。

男二。

そは杖を食はねえうちに通りぬけてしまへ。

(一同はあとを見かへりて、わやく／＼云ひながら上の方へ急ぎ去る。)

若者甲。

(向ふをみる。)なるほどお捕物がこつちへ追ひ込んで来るらしいぞ。

若者乙。

かゝり合にならねえやうに引込んでるやうぜ。

若者甲。

さうだ、さうだ。

(若い者ふたりは暖簾の内に入る。向ふより御旅の寅藏、三十一二歳、やじり切りのお尋ね者、旅すがたにて逃げて来るを、手先二人が追つて出づ。)

寅藏。

人ちがひでござります。人違ひでござります。

手先甲。

え、そんな事はあとで云へ。

二人。

御用だ、御用だ。

(手先は寅藏を押へようとする。向ふより八町堀同心、貝塚藤五郎、三十五六歳、十手を持ちて追つて出づ。)

藤五郎。

逃すな。逃すな。(寅藏に)神妙にしろ。

(藤五郎は聲をかけながら見張つてゐる。寅藏は隙をみて逃げようとするを、手先は追ひまはす。和泉屋の若い者は暖簾のあひだより首を出して窺ふ。二階の障子をあけて、抱へ女郎お駒、ほか三四人の女が欄干に縋りながら見おろしてゐる。そのうちに、寅藏は懷中より七首をぬき出して手先乙の胸を突けば、乙は倒れる。手先甲もつゞいて小鬘を斬られる。)

藤五郎。

え、手向ひするか。

おさだの仇討

(藤五郎は十手を把り直して立向へば、寅藏は必死になつて斬つてかゝる。このとき二階に見物してゐたるお駒は自分の穿いてゐる草履の片足をぬいで、上より寅藏の顔に打ちつける。それが恰も寅藏の眼に中りて、思はず立ち竦むところへ、藤五郎は踏み込んでその眉間を打てば寅藏は倒れる。)

藤五郎。

さあ、じたばたするな。馬鹿野郎め。

(藤五郎は寅藏をおさへ付ければ、手先甲も手傳ひて繩をかける。)

藤五郎。

(甲に。) どうだ。ひどく遣られやあしねえか。

手先甲。

(ふところ紙で小鬢を押しながら。) なに、大したことでもありません。(乙をみかへる。) こいつが胸を遣られたやうです。

藤五郎。

早く手當をしてやれ。

手先甲。

(店の内に聲をかける。) おい、誰かるねえか。

(若い者甲乙出づ。)

手先甲。

この怪我人を連れ込んでくれ。

(奥より若い者丙出で、甲乙と共に手先乙を介抱しながら奥へ連れ込む。二階の女等も障子をしめ内に入る。)

藤五郎。

(店さきの床几に腰をかける。) どすなんぞ振り廻しやあがつて飛んでもねえ奴だ。貴様もまんならぬ素人でもねえくせに、野暮な真似をするな。一體どこの何者だ。

(寅藏は俯向いて黙つてゐる。)

手先甲。

さあ、素直に申上げてしまへ。

(寅藏はやはり黙つてゐる。)

藤五郎。

(笑ふ。) は、こりやあうつかり云へねえかも知れねえ。それぢやあおれの方から教へてやる。貴様は御旅の寅藏だな。

(寅藏はぎつくりする。)

藤五郎。

けふは池上のお會式だから、お詣りながらぶら／＼出て來ると、高輪の茶店に休んで草履を草鞋に穿きかへてゐる奴が、どうもお尋ね者の寅藏らしいと思つたから、聲をかければすぐに逃げる。追つて來れば双物をふりまはす。それで人違ひもねえものだ。さあ、痛い目をしねえうちに早く云つてしまへ。

寅藏。

(覺悟して。) 恐れ入りました。

藤五郎。

む、たしかに家尻切りの寅藏だな。草鞋を穿いてどこへ羽を伸さうとしたのだ。

おさだの仇討

寅藏。江戸は御詮議がきびしいので、當分は草鞋をはいて、東海道から大阪の方を廻つて來る積りでございます。

藤五郎。それを品川の出口で擧げられちやあ些と氣の毒だつたな。貴様は今までどこに巢を食つてゐた。

寅藏。友だちの家なぞをごろ付いて居りまして、別にきまつた宿といふものもございません。

藤五郎。むい。それはまあ追つての詮議として……。左右をみかへる。内の奴等は誰もねえか。

手先甲。(奥に向つて呼ぶ。)おい、おい。みんな隠れてるねえで出て來い。

(暖簾の内より若い者甲乙出づ。)

藤五郎。これ。(落ちてゐる草履を指さす。)あの草履の主はなんといふ女だ。

若者。はい、はい。(草履を拾つてながめる。)間ちがひの無いやうに、よく調べてまゐりませう。

しばらくお待ち下さいまし。

(若い者甲は草履を持ちて奥に入る。)

手先甲。なるほど二階からあの草履を抛り付けた女がありましたね。

藤五郎。いづれこの家の女だらうが、氣のきいた奴だ。

寅藏。

旦那方の前でこんなことを云つちやあ濟みませんが、あんな加勢が出て來なけりやあ何と
か斬り抜けることも出來たんですが……。 (残念さうに二階をみあげる。) なにしろ、二階から
だしぬけに眼つぶしを食つたので、流石のわつしもおこ付いてしまひました。

藤五郎。それがいはゆる運の盡きだ。未練らしく人を恨むな。

寅藏。まつたく運の盡きで誰を恨むこともございませぬ。お捕物の加勢をした女に、たと御褒

美を遣つてお呉んなさいまし。

手先甲。(若い者をみかへる。) なにをしてゐるのだ。まだ判らねえのか。

若者乙。はい、はい。

(若い者乙は奥へ行かうとする時、暖簾の内より若い者甲はお駒を連れて出づ。)

若者甲。どうもお待たせ申しました。

藤五郎。むい。その女か。前へ出ろ。

お駒。はい。(躊躇してゐる。)

手先甲。旦那があ、仰しやるのだ。遠慮なしに出ろ、出ろ。

(お駒は進み出づ。)

おさだの仇討

藤五郎。おまへの名は……。

お駒。駒と申します。

藤五郎。む、お駒か。年は幾つだ。

お駒。十八でございます。

藤五郎。なんと思つて、二階から草履を投げた。

お駒。(口籠りながら。)なんと云ふこともございせんが……。朋輩衆と一緒に二階からお捕物をみて居りますうちに……。 (寅藏をみかへる。) その人が双物をぬいて、お捕方をみんな斬つ

たやうでございましたから、思はず知らず草履を把りまして……。飛んだ出過ぎたことを致しまして、なんとも恐れ入りましたでございます。

藤五郎。いや、恐れ入ることはねえ。氣の利いた女だと褒めてゐたのだ。捕方に加勢して首尾よく罪人を取押へたものにはお褒めがある。その働き方に因ては御褒美を下さることになつてゐる。ましてお前は男でない。勤め奉公の女の身で、御用の加勢をしたといふのは奇特のことだ。

若者乙。では、お駒さんにお叱りはございせんか。

藤五郎。

叱るどころか、この事を上へ申立てたら、奉行所へお呼び出しの上で御褒美を下さるかも知れねえ。なにしろ奇特の女だ。よく働つてやれと主人にも云ひ聞かせろ。

若者。はい、はい。(二人は頭を下げる。)

寅藏。(お駒に。)おい、姐さん。お駒さん。おれは決しておめえを恨んぢやあるねえ。おめえは全く感心な女だ。お上に對して忠義者だ。たと御褒美を遣つて下さいと、今も旦那に願ひ申して置いたぜ。(お駒を睨む。)

藤五郎。なぜ忌な眼をして睨むのだ。それがやつぱり未練といふものだぞ。貴様も江戸つ子ぢやあ

ねえか。さあ、男らしく立て、立て。

寅藏。わつしも御旅の寅藏でございます。決して未練は申しません。

手先甲。未練がなければ早く行け。

寅藏。えい、まゐります、まゐります。(起ちあがる。)

藤五郎。(若い者に。)朝つばらから店さきの邪魔をしたな。如才もあるめえが、淨めてくれ。

手先甲。すぐに又出直して来るから、怪我人をもう少し頼むよ。

(藤五郎は先に立ち、手先甲は寅藏の繩を取つて向ふへ引立て、ゆく。暖簾の内より和泉屋の亭主

おさだの仇討

伊兵衛出づ。あとより若い者丙は盆に鹽をのせて出づ。

伊兵衛。まだ御挨拶に出ないうちに、旦那方はもうお引揚げになつたのか。

若者甲。たつた今お引揚げになりました。

伊兵衛。怪我人をあゝして置いてはいけない。早くお醫者を呼んで来い。

若者乙。はい、はい。(上の方へかけてゆく。)

お駒。(すゝみ寄る。)旦那。

伊兵衛。なんだ。

お駒。わたしは悪いことをしたのぢやありませんかねえ。

伊兵衛。なに、悪いことがあるものか。お上に對して立派に御奉公を勤めたのだ。あんな奴等はお召捕りにさせるのが天下の爲だ。

お駒。わたしが草履をぶつけなければ、あの人は無事に逃げられたのかも知れませんか。

伊兵衛。それだからお前の手柄だといふのだ。おまへのお蔭で、おれも世間に鼻が高い。又それが評判になつて、おまへも屹と賣れつ子になるだらう。まあ、なんにしても目出度いことだ。

若者甲。

お駒。まつたくお駒さんは大手柄でございました。

伊兵衛。しかし、繩附きの出たあとだ。よく淨めて置け。

若者丙。はい、はい。

(若い者は店さきに鹽花をまく。向ふより會式詣の一群は大萬燈を先に押立て、男女打ちまじりて團扇太鼓を賑やかに叩き立てながら、上のかたへ行き過ぎる。)

伊兵衛。は、威勢よく繰出して来る。けふのお會式は大當りだな。

(伊兵衛は笑ひながら内に入る。お駒はまだ氣の濟まないやうな顔をして續いて入る。舞臺暗轉。)

(11)

本所、中の郷、法常寺門前の花屋。上のかたに黒塗りの寺の門あり。それについて竹縁附の小さき家。正面の上のかたに古びたる佛壇、その下は押入れにて、佛壇には新しき白木の位牌をかざり、燈明や線香などを供へてあり。奥へ出入りの古障子、破れたる鼠壁。よきところに爐を切つてあり。縁さきには櫛を入れし桶や線香をならべてあり。下のかたは古き卒塔婆をゆひ込みし玉椿の生垣にて、垣のうちは墓場と知るべく、生垣を隔て、石塔卒塔婆などみゆ。垣の前には井戸、こゝにも櫛

おさだの仇討

を入れたる手桶をならべ、井戸のそばには芽出し柳の立木あり。寺の内にて木魚の音さびしくきこゆ。

(第一場の翌年、三月はじめの夕暮。湯灌場買ひ市助は秤と鐵砲箆を持ち、縁に腰をかけて烟草をのんでゐる。やがて寺の門内より花賣與右衛門が先に立ち、あとよりおさだは廿五六歳のむすび髪、ほかに乞食のやうな男二人出づ。男のひとりには差荷ひの棒を持つ。)

與右衛門。やれ、やれ、これで安心した。

おさだ。(男どもに。)どうも色々ありがたうございました。(紙につゝみし銀を出す。)ほんの少しですけれど、これでまあ一杯飲んでください。

男一。これは有難うございます。(男二に。)おめえもお禮をいへよ。

男二。姐さん、どうも有難うございました。

與右衛門。皆さん、御苦勞でした。(聲をひくめる。)云ふまでもないが、この事はどうぞ内分にな。

男一。そりや如才なく呑み込んでるますよ。

(男二人は挨拶して下のかたへ去る。)

市助。お弔ひはもう済みましたかえ。

與右衛門。お、市助さん。さつきから來てるなすつたのか。

市助。なんだか差荷ひの投げ込み。(云ひかけておさだに遠慮する。)いや、日が暮れかゝつてお弔ひがあるらしいのを遠目に見たから、何か商賣はないかと思つて、すぐにあとを追つかけて來ましたのさ。

おさだ。おまへさんは……。

與右衛門。これは湯灌場買ひの市助さんと云つて、わたしとは久しいおなじみだ。(市助に。)あの早桶には新しい浴衣がかけてあるから、早く行つて重さんに相談するがいよ。

市助。ところが、あの穴ほりめ。慾張つてばかりるので、なか／＼相談がむづかしい。まあ、なにしろ行つてみませう。

(市助は門内に入る。)

おさだ。あの人も抜け目がないね。

與右衛門。人間は好い人だが、商賣にかけちやあ抜け目がない。(云ひかけて。)時におまへさんは寒くないかえ。

おさだ。今までは暑いか寒いか知らなかつたが、落付いてみると急に薄ら寒くなつて來たやうです

おさだの仇討

よ。もう三月で、土手の櫻もそろそろ咲き出すといふのに、今年はどうも陽氣が悪いやうです。ね。

與右衛門。

取分け今日は陰つてゐるので、日が暮れかゝると猶さら薄ら寒い。ちつと圍爐裏の火でも焚くとうか。いや、それよりも燈火をつけなければならぬ。

(與右衛門は障子をあけて奥に入る。おさだも縁にあがり、佛壇に線香をそなへて拜んでゐる。やがて奥より與右衛門は煤けたる行燈をとほして出で、おさだが一心に拜んでゐるのを見て、ほろりとしながら無言で爐の前にゆき、粗朶を折り焚べてゐる。蛙の聲きこゆ。おさだは拜み終りて、爐のそばに来る。)

おさだ。

あゝ、もう日が暮れてしまつたねえ。をぢさん。(摺寄る。)

與右衛門。

なんだね。

おさだ。

今夜はさびしうござんすねえ。

與右衛門。

どうでこゝらの寺門前だから、夜はいつも寂しいにきまつてゐるが、わたしも今夜は一倍さびしいやうだ。併しおさださん。おまへさんのおかけで寅藏めのお仕置殻を引き取つて来て、このお寺の隅に埋めて貰ふことが出来たので、わたしはどんなに嬉しいか知れませ

おさだ。

んよ。
去年の十月品川でお召捕りになつてから、どうで寅さんの命はないものと、疾うから諦めてゐたものゝ、先月いよくお仕置がきまつて、引きまはしの上獄門と聞いたときには、あたしも今更のやうに悲しくなりましたよ。(眼をふく。)

與右衛門。

(聲をうるませる。) あんな厄難者はさうなるのが當り前だと、あきらめて見てもやつぱり涙の出るのが叔父甥の人情だ。ましてお前さんの身になつたら悲しいのも無理はない。それにしても、お前さんがしつかりしてゐるので、仕置場の番人に渡りをつけて、小塚ッ原からこつそりと死骸を引き取つて来てくれたので、あいつの死骸は野良犬の餌食にもならず、たとひ投げ込み同様でも人間並の弔ひが出来たといふものだ。

おさだ。

なにが仕合せになるか判らないもので、おまへさんがこゝの花屋をしてゐるので、お寺の和尚さんにおねがひ申して、墓場のあき地へ内證で埋めて貰つたのですが、叔父さんが傍に附いてゐてお呉んなされば、お線香やお花の絶える心配も無し、寅さんもどんなに喜んでゐるか知れませんが、これもやつぱり叔父甥の縁が深いんでせうね。生きてゐるうちに散御苦勞をかけて、死んだあとまで御面倒をかけちやあ、あんまり義理が悪いやうです。

おさだの仇討

與右衛。

おさだ。

れど……。ねえ、叔父さん。寅さんに代つてあたしが幾重にもお願い申しますから、お墓のまはりに草の生えないやうにどうぞ氣をつけて下さいよ。(しみく云ふ。)

生きてゐるうちは世間に迷惑をかけ、親身の叔父にも苦勞をかける、憎い奴だと思つてゐたが、お仕置をうけて死んでしまへば、あいつの罪は消えたも同然だ。おまへさんに頼まれないでも、わたしに取つても唯つた一人の甥だから、朝に晩に香花をそなへて、屹と後生を祈つてやります。それは心配しなさらぬがよい。

何分おねがひ申します。

(おさだは眼をふいてゐる。門内より市助が鐵砲箆に浴衣を入れて出づ。あとより穴ほりの寺男重太が鐵を持つて追つて出づ。)

重太。

やい、やい。この泥坊め、生けつ太てえ奴だ。

市助。

なにが泥坊だ。人聞きの悪いことをいふな。

重太。

(重太は箆のなかり新しい浴衣をひき出して、市助に突きつける。)

これ、見ろ。この新しい浴衣を唯つた六十四文とは何のことだ。いくら湯灌場買ひでも、賣りもの買物には相場があるものだ。唯同様に人の物をおつ攫つて行く奴は泥坊に違けえ

市助。

ねえぞ。

世間の相場で物を買ふくらるなら、誰が湯灌場なんぞへ商賣に来るものか。貴様こそ死人の上前を取りやあがつて、泥坊よりも猶悪いぞ。

重太。

えい、貴様こそ泥坊だ。それが口惜しけりやあ、もう三百出せ。

市助。

べらばうめ、だれが三百出す奴があるものか。さあ、おれの買ひ物をこつちへよこせ。(浴衣をひつたくる。)

重太。

まだ賣りやあしねえぞ。

(市助は浴衣を持つて行かうとするを、重太は渡すまいと争ひ、たがひに引き合ふうちに浴衣の袖は千切れて、ふたりはそれを掴みしまゝにて倒れる。)

おさだ。

仕様がなねえ。(縁を降りる。)

重太。

好い加減におしなさいよ。

姐さんはまだこゝにゐなすつたのか。お施主の見てゐる前でこんな喧嘩をしちやあ些つと極まりが悪いが、この野郎があんまり人を踏み付けにしやあがるから、つい腹も立つたのや。

おさだの仇討

市助。今までは斯うでもなかつたが、こいつ此頃は死に慾がかはいて來やあがつた。

重太。そりやあこつちで云ふことだ。
(ふたりは又詰めよるを、おさだは隔てる。)

おさだ。まあ、いと云ふのに……。こんなところを見せられると、あたしはこの着物を人に渡すのが何だか忌になつて來た。

二人。え。

おさだ。と云つて、おまへさん達に損をさせちやお氣の毒だから、これはあたしが買ひ戻しますよ。

(おさだは一朱銀を二つ出して、重太と市助に分けて遣る。)

重太。お前さんにはさつきも貰つて又貰つちやあ、あんまり氣の毒だな。

市助。わたしも一朱といふ金を、唯貰つちやあ何だか氣が濟まないやうだ。

おさだ。なんでもいゝから、それで穩かに別れて下さい。その代りに、これはあたしが受取りますよ。(浴衣をかへる。)

重太。それちやあ遠慮なしに貰つて置かな。どうもたびく有難うございました。

市助。(重太は極まり悪さうに、門内へ早々に立去る。)
(銀をながめながら。) それちやあわたしも貰ひませうか。おかけさまで一日の立ち前になりました。與右衛門さん、おまへさんからもよくお禮を云つて下さい。

與右衛門。はい、はい。なんだか空模様をかしくなつたやうだ。降らないうちに早く歸りなさい。

市助。皆さん、御免なさい。
(市助は下のかたへ立去る。時の鐘きこゆ。蛙の聲。おさだは袖のちぎれたる浴衣をかへて縁に腰をかける。與右衛門も爐の前を離れて出る。)

與右衛門。あの人たちに一朱づつは多過ぎる。ふたりのあたまへ一朱で澤山だつた。

おさだ。それもみんな佛への御供養だと思へばいゝんですよ。

與右衛門。小塚ッ原の番人へ渡りを付け、それから弔ひや何や彼やで、随分の金を使つたらうが、お前さんはどうしてそれを工面したのだ。

おさだ。寅さんの一件が落着くまでは、どうすることも出来ませんから、今日までは賣り喰ひ、ちつとばかり残つてゐた頭の物や着るものを一纏めにして拂つてしまつて、どうにか斯うかに無事にお弔ひも出來ましたのさ。

おさだの仇討

與右衛。 (ため息をつく。) それぢやあもう何んにもないのか。

おさだ。 お恥かしいが着たきり雀で……。 (さびしく笑ふ。) かうなると、女はいくぢがありませんねえ。

與右衛。 (眼をしばたいて。) それほどまでに寅の奴めを思つてくれたのか。

おさだ。 叔父さんの前ですけれど、これが悪縁とでも云ふのでせうよ。

與右衛。 押借り騙りから家尻切りと、悪事をかさねた人間に、不憫を加へるのはこの叔父ひとりかと思つてゐたら、おまへさんのやうな立派な姐さんがそれほどまでに……。 あいつもよくよくの仕合せ者だ。

おさだ。 なにが仕合せなもんですか。 おたがひに因果同士が寄合つたのでせうよ。

與右衛。 さうして、お前さんはこれからどうする積りだね。 身の振方の付くまでは、こんな穢い家でよければ、いつまでも泊つてゐなさいよ。

おさだ。 御親切はありがたうございますが、寅さんの型が付いてしまつたら、これから又、次の仕事に取りかゝらなければなりませんから、もうすぐにお暇にませう。 (云ひながら浴衣をみる。) 早桶の上へ着せて来たものは穴掘りの儲け物で、どうで湯灌場買ひの手に渡るとは

知つてゐながら、眼のまへで賣り買ひをされると、あんまり心持がよくないから、一朱づつ遣つて引取つたが、こんなものを抱へてゐても仕様がな。 いつそ思ひの残らないやうに、こゝで焼いてしまひませうかねえ。

與右衛。 焼いてしまふのも無駄なやうだが、お前さんがさう思ふなら、それも好からう。 (爐をみかへる。) こゝで焼くかね。

おさだ。 家のなかぢや何だから、表で焼くことにしようぢやありませんか。

(おさだは縁にあがり、與右衛門に手傳ひて、粗朶の火を店さきに持ち出して積む。蛙の聲。)

與右衛。 陽氣が悪いの、寒いのと云つても、やつぱり時節は争はれない。 どこかで蛙が鳴いてゐるやうだ。

おさだ。 去年向島へお花見に行つた歸りに、寅さんと一緒にこゝの家へ寄つたことがありました。 が、その時にも蛙がさうくしく鳴いてゐましたねえ。

與右衛。 むい。 あんまり騒々しくつて話が出来ねえと云つて、寅の奴め、むやみに怒りやあがつたつけ。 あいつも我儘な奴だつたな。 お前さんにもさぞ我儘を云ひましたらうね。

おさだ。 あたしの方でも随分我儘を云ひましたよ。 (ほろりとして。) さあ、叔父さん。 (ちぎれたる片

おさだの仇討

袖を出す。

與右衛

わたしがこれを焼くのか。あい、あい。

(與右衛門は浴衣の片袖を焚火に入れる。その燃える煙を二人はちつと眺めてゐる。薄く雨の音。蛙の聲。)

おさだ

この浴衣は去年の夏あの人にこしらへて遣つて、どうしてか一度も手を通さなかつたんですよ。やつぱりこんな事になる知らせだつたのかも知れませぬね。

與右衛

さうかも知れないな。

(おさだは抱へてゐる浴衣を火に入れる。浴衣は燃えあがる。)

おさだ

なんだかお迎ひ火でも焚いてゐるやうですわねえ。

與右衛

まつたくお盆でも来たやうだ。(口のうちで。)なむ阿彌陀佛。

(ふたりは思はず手をあはせて、その煙を拜む。)

おさだ

あゝ。どう考へてもさびしいわねえ。(再び縁に腰をかける。)

(與右衛門は井戸端より手桶を持ち來りて、柄杓の水を焚火にかける。)

與右衛

これちやあいよくお迎ひ火だ。

おさだ

(たち上る。)叔父さん。あたしはもう歸りますよ。

與右衛

もう歸るかえ。(空をみる。)たうとうほつ／＼降つて來たやうだ。番傘でも貸してあげよう。

(縁にあがる。)

おさだ

なに、ようござんすよ。こんな着物を着てゐるんだから、ちつとぐらゐ濡れたつて構ふもんですか。

(おさだは身仕度をし、頬かむいをする心にて手拭を出す。)

與右衛

わたしはさつきから考へてゐたのだが……。お前さんはこれから次の仕事に取りかゝると云つたが、一體これから何をする積りだね。

おさだ

亭主を見送つてしまつたら、これから尼にでもなる筈でせうが、あたしのやうな者にはそんな悟りも開けませんからねえ。(笑ふ。)

與右衛

さうだ、さうだ。今の若さに尼なんぞになるのは止めた方がいゝよ。

おさだ

(思案して。)なんにも云ふまいと思つてゐたんですけれど……。叔父さんがそんなに心配して下さるなら……。いつそお前さんだけに……。叔父さんがそんなに心配し

與右衛

云つて差支へのないことなら、どうぞ聞かせて貰ひたいな。

おさだの仇討

おさだ。

かならず他言は御無用ですよ。

(おさだは摺寄つて與右衛門の耳にさゝやけば、與右衛門はびつくりする。それを突き退けるやうに、おさだは衝と起ちあがる。)

おさだ。

さよなら。

(云ひ捨て、下の方へ足早に立去らうとするを、與右衛門はあはわて、追ひいりて引き戻す。)

與右衛門。

まあ、待つてくれ、待つてくれ。

おさだ。

話はもうそれぎりですよ。

與右衛門。

いや、その話がいけないのだ。まあ、ちよいと戻つてくれ。(無理におさだを引き戻して来る。お前そんな心得違ひをしてはならない。寅があゝなつたのは自業自得だ。決して人を恨んではならない。第一おまへの爲にもならない。そればかりはわたしが頼むから、どうぞ止めてくれ、やめて呉れ。

おさだ。

大方そんなことだらうと思ひながら、ついおしやべりをしてしまつて、悪いことをしたねえ。叔父さん、まあなんにも聞かない積りで歸してくださいよ。

與右衛門。

ほかの事とは譯が違つて、一旦聞いた以上はどうして聞き流しになるものか。これ、今も

おさだ。

いふ通り、寅があゝなつたのは自分の心柄で、人を恨むのは間違つてゐる。まして其の仕返しをしようなどと云ふのは、世のことわざにもいふ外道の逆恨みだ。逆恨みでも何でもかまはない。あたしはもう鬼になつたんですよ。

(おさだは突き退けて行かうとするを、與右衛門は又ひき戻す。おさだはじれて與右衛門を突き倒し、手拭をかぶりて向ふへ走り去る。與右衛門は倒れながらあとを見送る。薄く雨の音。蛙の聲。)

幕

第二幕

(一)

第一幕とおなじ年、十月の夜。

品川、和泉屋の二階、お胸の部屋。平舞臺にて、正面の上の方に床の間。それにつゞいて夜具戸棚、おさだの仇討

その下にはきめ込みの箆筒、茶箆筒などあるべし。よきところに長火鉢を据ゑ、衣桁にはぬぎ捨ての部屋着が掛けてあり。屏風の外に行燈あり。屏風をたて廻して、そのなかには寢床あり。上のかたは壁にて仕切り、隣には他の部屋のあるころにて、前づらの障子には灯の影が映つてゐる。下のかたはお駒の部屋の入口にて塗骨の障子を閉め、障子の外は廊下にて、火の用心と記せる掛行燈あり。下の方に階子のあがり口あり。かすめて騒ぎ唄きこゆ。

(お駒の客文吉、芝の糸屋の番頭、四十歳ぐらゐ。寢まき姿にて長火鉢の前に坐り、長烟管で煙草をのんでゐる。廊下傳ひに若い者庄八は油さしを持ち出て出づ。)

庄八。

御免ください。(障子をあける。)お油をさしに参りました。(行燈に油をさしてゐる。)

文吉。

庄どん、今夜はあんまり賑かでないやうだね。

庄八。

どういふものか、今夜はさびしうございます。なにしろ賣れつ子のお駒さんに名代がないくらゐですからね。

文吉。

わたしも随分足を近く通つて来るが、お駒に廻しの無いといふのはめづらしいことだ。

庄八。

かういふ晩はまつたく珍らしいでございますよ。(屏風の方をみて。)そこで、お駒さんは……。

文吉。

よく寝てゐるやうだ。

庄八。

おまへさんがあんまり飲ませたんぢやありませんか。

文吉。

お駒は酒が弱いね。

庄八。

おとなしい人をつかまへて、無理に酔はせちやあいけませんよ。(笑ひながら。)まあ、おやすみなさい。

文吉。

いや、もうそろそろ歸り仕度だ。(笑ふ。)お店者は辛いよ。

庄八。

お察し申します。

文吉。

酒がさめたら何だか薄ら寒くなつて来た。やがてもう九つだらうな。(起つて廊下へ出る。)

庄八。

お手水でございますか。

文吉。

むい。
(文吉は便所へゆく心にて階子を降りてゆく。庄八も廊下づたひに去る。時の鐘。ほかの座敷の歌澤の聲きこゆ。)

唄
よるの雨、もしや來るかと思算、紙でかへるの呪ひも、蟲が知らせて、ともしびの、丁
子も飛んだ今時分、氣まぐれさんすか、ぬしの聲。

(この唄のあひだに、おさだは忍び出づ。おさだはこゝの店の内藝者の風俗。お駒の部屋をうかど
おさだの仇討)

ひて忍び入り、行燈をかた寄せて屏風のうちを覗き、衣桁にかけたるお駒のしごきを取りて屏風のうちに入る。やがて文吉は階子をあがりて部屋の入口に来る。おさだは屏風より出で、文吉と顔を見合せてはつとす。

文吉。 おい、おさだか。

(おさだは顔をそむけて黙つてゐる。)

文吉。 わたしはもう歸るから、下へ行つて駕籠を呼ぶやうに頼んで呉れないか。

おさだ。 はい、はい。

文吉。 もうすぐに仕度をするから、お駒を起してくれ。

(おさだは度胸を据ゑて進みよる。)

おさだ。 歸るにしても、まあ上り花の一杯も飲んでおいでなさいよ。お駒さんは今起しますからさ。

(おさだは文吉を長火鉢の前に坐らせ、茶をいれる仕度をする。)

おさだ。 今夜は大層急ぐんですね。

文吉。 今夜はいつもより少し遅くなつたのだ。もう九つだらう。

おさだ。 九つでも八つでもいい、ちやありませんか。お前さんに少し話したいことがあるんですよ。

(茶をついで出す。ちつと温いかも知れませんが。)

(文吉は茶をのむ。おさだは立つて部屋の外をうかゞひ、又引返して来る。)

おさだ。 ねえ、お前さんはあたしのやうな者をつかまへて、ふだんから何の彼のと冗談をお云ひな

さるが、ありやあ本氣ですかえ。

文吉。 (笑ひながら)本氣だよ。

おさだ。 からかふのぢやありませんか。

文吉。 なんてお前にかからかふものか。

おさだ。 だつて、お前さんはそこにお駒さんといふ可愛い人があるぢやありませんか。

文吉。 お駒はこんな稼業をしてゐる女のやうでもない、野暮堅いので面白くないよ。

おさだ。 うまくお云ひなざるなよ。(そこにある長烟管をふりあげる。)それだからお前さんは憎らし

い。

文吉。 いや、本當だ。おまへも知つてゐる通り、あのお駒は去年の十月、御旅の寅藏といふ家尻

切りがこゝの店の前でお捕物になつたときに、二階から草履を叩きつけて、その寅藏に眼

つぶしを食はせたといふので、お奉行所へお呼び出しになつて、青緋二貫文とかの御褒美

おさだの仇討

おさだ。

を頂戴したことがある。
(うなづく。)お奉行所から御褒美を頂いたのが大層な評判になつて、宿場の女にはめづらしいといふので、よるも晝もお客の絶え間がなく、年は若くつてもこの店では、二枚目より下にはさがらない賣れつ子になつてしまつたんですよ。お前さんもそれで斯うして通つて来るんでせう。

文吉。

わたしもお駒の評判を聞いて、話の種にと一度遊びに来たのが病みつきで、この春頃から随分通つて来たのだが、なんだか野暮堅いところがあつて、長く付き合つてゐるとだんだんに面白味が薄くなる。そこへお前のやうな粹な年増が……。まつたくお前のやうな女をこんな宿場の内藝者なんぞにして置くのは、掃き溜めに鶴といふものだ。

おさだ。

およしなさいよ。又からかふのは……。

文吉。

おまへも疑ひ深い。からかふのでは無いといふのに……。

おさだ。

屹度ですか。

文吉。

あゝ、屹度だよ。

おさだ。

ぢやあ、おまへさん。

おさだ。

(おさだは文吉の手を把つて、屏風の外へ連れて来る。)

あたしのやうな者にどんな見どころがあるのか知りませんが、お前さんは屹とこのお駒さんを振捨て、あたしを可愛がつてくれるんですね。

文吉。

かうなればお駒なんぞはどうでもいゝ。きつとお前を可愛がるよ。併しそんなにわたしの方ばかりに念を押して、おまへの方は大丈夫かえ。

おさだ。

大丈夫か大丈夫でないか。さあ、確な證據をみせますよ。

(おさだは文吉の手を引いて、屏風のなかを覗かせると、文吉はあつと驚いて逃げかゝるを、おさだは押へる。)

おさだ。

おまへさん。逃げちやあいけませんよ。

文吉。

(ふるへながら。)こ、これはどうしたのだ。

おさだ。

見れば判るぢやありませんか。

文吉。

おまへが殺したのか。

おさだ。

(落ちついて。)はい。あたしがお駒さんを殺しましたよ。

文吉。

(いよく顫へる。)な、なんでそんな怖ろしいことをしたのだ。

おさだの仇討

おさだ。お前さんのせるですよ。

文吉。え。

おさだ。お駒さんはこの店でも評判の賣れつ子、あたしはしがない内藝者の身分で、どう張合つたところで勝てる筈は無し、そんなことが御内所に知れれば、あたしは逐ひ出されるに決まつてゐますから、いつそ一と思ひにお駒さんを殺して、おまへさんをあたしの物にしよと思ひつめたんです。(泣く)定めて怖ろしい奴だとびつくりしたでせうが、もう斯うなつたら仕方がない。飛んだ者にみこまれたと諦めて、おまへさんもあたしの味方になつて下さい。

(文吉は顫へながら黙つてゐる。)

おさだ。いやですか。(屹と睨む)そんならあたしを引摺つて行つて、和泉屋のおさだは人殺しをいたしましたと、代官所へでも何でも訴へてください。さあ、どこへでも連れて行つて下さいよ。

(おさだは身を摺りつける。文吉はやはり黙つてゐる。)

おさだ。その代り、覺悟しておいでなさい。お前さんが何と云はうとも、あたしの口一つで屹とおまへさんを道連れにして行きますよ。

文吉。途方もない。な、なんでわたしが……。

おさだ。いえ、いえ、あたしの云ひ取り次第で、屹とおまへさんを同類にしてみせます。それを覺悟なら、さあ、お訴へなさい。どこへでも連れておいでなさい。

(おさだは文吉の手を取りて引立てようとすれば、文吉は途方に暮れる。)

文吉。まあ、待つてくれ、待つてくれ。

おさだ。それぢやああたしの味方になつて、今夜のことを隠してくれますか。

文吉。(ため息をついて)隠し負せるだらうか。

おさだ。別にむづかしい事はない。おまへさんが手水場へ行つてゐる留守に、だれかゝ忍んで来て絞め殺したと云へばいゝぢやありませんか。あたしが前から趣向して、二階の櫺子窓を毀して置きましたから、そこから誰かゝ忍び込んで来たと思ふに違ひありませんよ。

文吉。(不安らしく)それで済むだらうか。

おさだ。済むも済まないもお前さんの口次第でさあね。あたしが出て行つたあとで、おまへさんが大きな聲で人を呼ぶんですよ。さうして、自分の留守のあひだに、お駒さんが絞め殺されてゐたと本當らしく云ふんですよ。誰だつて眞逆にお前さんが殺したと思ふ者はあります

文吉。まい。ましてあたしが殺したと氣のつく者はありませんよ。
さうだらうか。

おさだ。あたしは不斷から人一倍にお駒さんと仲好くしてゐたんですから、猶さら疑ふ者はない筈です。細工は流々、まあ度胸を据ゑて遣つて御覽なさい。ようござんすか。

文吉。(絶體絶命で。)むい。

おさだ。しつかり頼みますよ。そこで少し待つてください。

(おさだは部屋へやの箆筒たんすのひきだしを明けて、服紗ふくさにつゝみし草履さうりを出す。)

おさだ。御覽なさい。これは去年きょねんの十月ぐわつ、お駒さんが二階かゐから抛り付けた草履さうりで、それがためにお奉行所ばいぎやうしょから御褒美ごほうびを頂戴ちやうたいしたといふので、かうして大切に服紗ふくさにつゝんで、お寶物たからもののやうに仕舞つてあるのを、あたしも一度見せて貰つたことがあります。女のくせに、よせばいいのに、これを泥坊どろぼうの顔へ叩きつけて……。 (行燈あんどうの火ひで草履さうりをちつと見る。) その泥坊どろぼうも定めてお駒さんを恨んでゐたでせうねえ。

文吉。(氣のないやうに。)さうかも知れないな。

(おさだは草履さうりを持ちて屏風びやうぶのうちに入る。文吉は唯ぼんやりとしてゐるが、やがて少しく驚いた

やうに屏風びやうぶのうちに耳みみをかたむけて、そつと覗かうとする時、おさだ出づ。)

文吉。おまへは屏風びやうぶのなかで何なにをしてゐたのだ。

おさだ。なんにもしてゐるやあしませんよ。

文吉。その草履さうりでお駒をぶつてゐたやうだぜ。

おさだ。これであたしがお駒さんをぶつて……。 (笑ふ。) とんだ鏡山かがみやまのお茶番ちやばんですね。なんであたしがそんな馬鹿ばかな事ことをするもんですか。お駒さんにまだ息いきがあるか何うだか、もう一度たしかに見とゞけて來ただけですよ。

文吉。もうどうしても生きないかね。

おさだ。おまへさんは生かしたいのかえ。それだから不人情ふじんじやうだと云ふんですよ。(抓つかる。)

文吉。いや、さういふわけでも無いが……。

おさだ。さうでなければ黙つておいでなさいよ。

(おさだは草履さうりを服紗ふくさにつゝみて、もとの通りに箆筒たんすに入れる。)

おさだ。ぢやあ、あたしはもう行きますからね。後生ごしやうだから巧く遣つてくださいよ。

文吉。(よんどころなく。)むい。

おさだの仇討

おさだ。

下手なことをすると、暗いところへ一緒に連れて行きますよ。

(おさだは嚇すやうに念を押して部屋の外へ出ようとする時、廊下の方にて時まぼりの拍子木の音きこゆ。)

男の聲。

時ですよ。

(おさだはそれに驚いて内へ引返し、入口の障子をびつしやりと閉める。これにて幕を下ろし、すぐに再び幕をあける。)

(II)

高輪の自身番。上のかたには杉戸の出入り口あり。下のかたは壁にて、その前に爐を切り、大いなる茶釜にかけてあり。屋臺の前は一段低き板の間になつてゐる。下のかたは臺所のこゝろにて、腰高の障子二枚をしましてあり。上のかたには半鐘をかけたる火の見梯子あり。

(前の場の翌朝。八丁堀同心貝塚藤五郎は黒の羽織、着流し、下のかたに町役人が羽織袴にて坐り、爐のそばには自身番の定番と下番の男が控へてゐる。板の間の上のかたには糸屋の番頭文吉、

下のかたには和泉屋の亭主伊兵衛が控へてゐる。そのそばには番太郎の男が控へてゐる。浪の音薄くきこゆ。)

藤五郎。

おい、番太。店先にほこりが立つてならねえ、少し水でも撒け。

番太。

はい、はい。

(番太郎は手桶にて水をまく。)

藤五郎。

和泉屋の亭主伊兵衛は其方だな。

伊兵衛。

左様でございます。

藤五郎。

あらためて云ひ聞かせるまでもないが、品川は郡代の支配で、町方の係りぢやあねえ。しかし事件が事件だから、町方も立會つて詮議をする。殊に和泉屋のお駒にはおれも縁があるから、取りあへず詮議に出て來たのだ。

伊兵衛。

お役目御苦勞に存じます。

藤五郎。

芝源助町の糸屋の番頭文吉は其方か。

文吉。

(恐るゝ答へる。左様でございます。)

藤五郎。

年は幾つだ。

おさだの仇討

文吉。 四十一歳でございます。

藤五郎。 こゝでこれから吟味をする。上役人の前で些とても嘘いつはりを申立てちやあならねえ

ぞ。(懐中より十手を取出す。)これ、文吉。和泉屋のお駒がゆうべ何者にか絞め殺された。

その晩の客はお前だな。

文吉。 はい。

藤五郎。(伊兵衛に。)ゆうべの客は文吉ひとりで、ほかに名代は無かつたのだな。

伊兵衛。 お駒は手前の店の賣れつ子で、毎晩大抵二三人のお客があるのでございますが、ゆうべは

珍らしくこのお方おひとりでございました。

藤五郎。 文吉の申立てでは、用足しに下へ降りて歸つてみると、その留守のあひだにお駒は死んで

ゐたといふことだが、それは相違ないな。

文吉。(一生懸命に。)それに相違ございません。

藤五郎。 屹とさうか。

文吉。 はい。

藤五郎。(十手を膝に突き立て、嚇すやうに。)屹とさうかよ。

文吉。(どもりながら。)は、はい。

藤五郎。 よく考へ直してみろ。嘘をつくと承知しねえぞ。分別盛りの年をしながら、女郎買ひをす

るやうな奴だから、なにを仕出來すか判つたものぢやあねえ。貴様はお駒にふられたか、

それとも何かのやきもち喧嘩で、腹立ちまぎれに女を絞めたのだらう。さあ、隠さずに申

立てろ。

恐れながらそれはお見込み違ひで、わたくしは決してそんな覚えはございません。

文吉。 亭主、どうだ。お駒はこいつが殺したとは思はねえか。

藤五郎。(迷惑さうに。)さあ、それはどうでございませうか。わたくしにも一向わかり兼ねます。

伊兵衛。 長次郎はどうした。まだ何か調べてゐるのか。和泉屋へ行つて呼んで来てくれ。

町役人。 はい、はい。(番太郎をみかへる。)それ、早く行つて来い。

番太郎。 はい、はい。

(番太郎は下のかたへ行かうとする時、下のかたより手先長次郎はおさだと庄八を引立て、出づ。あ

とより男、女、子供など七八人附いて来る。)

長次郎。 えい、見るものぢやねえ。行け、行け。(男女等を追ひ拂ひて。)どうも遅くなりました。(二

おさだの仇討

人をみかへる。) さあ、下にゐろ。

(おさだと庄八板の間に坐る。)

藤五郎。

今おまへを呼びに遣らうと思つてゐたところだ。何か手がかりは付いたか。

長次郎。

この女は和泉屋の内藝者で、おさだといふ者でございます。男は油さしの庄八といふ者で……。

藤五郎。

その二人に迂闊なことでもあるのか。

長次郎。

おさだはふだんからお駒と仲よくしてゐたさうですから、ちつと取調べてみたいと思ひます。庄八はお駒の殺される少し前に、その部屋へ油さしに行つたさうですから、これも調べて頂かなければなりません。

藤五郎。

さうか。これ、おさだ。顔をあけろ。

おさだ。

はい。

藤五郎。

おまへはいつ頃から和泉屋に奉公してゐる。

おさだ。

この六月、天王様のお祭の時からでございます。

藤五郎。

それまではどこにゐた。

おさだ。

神奈川の方に居りました。

藤五郎。

何歳だ。

おさだ。

廿六でございます。

藤五郎。

亭主はあるか。

おさだ。

ひとり身でございます。

長次郎。

年増さかりで女は好し、まして商賣が商賣だ。どうで無事に暮してゐる筈はあるめえ、表向きの亭主はなくても、何か係り合の男はあるだらうな。

おさだ。

いえ、こんな稼業は致して居りますが、わたくしに限つてそんな浮いたことの無いのは、御主人もよく御存じでございます。

藤五郎。

(笑ひながら。) まあ、いや。おれたちの前で、わたくしには可愛い、色男がございませとも云はれめえから、それはまあそれとして、おさだ。お前はお駒と仲好しだつたといふが、今度の一件について何か思ひ當ることはねえか。

おさだ。

それがなんにもないのでございます。わたくしはまるで夢のやうで……。 (泣く。) あんなおとなしいお駒さんが人の恨みを受ける筈は無し、なにが何やらさつぱり判りません。

おさだの仇討

藤五郎。庄八。お前がお駒の部屋へ油さしに行つたときには、お駒は無事であるのか。

庄八。さあ、それはわかりません。わたくしは唯そこにある文吉さんと一言二言お話をして出ましたばかりでございます。

藤五郎。文吉は起きてゐたのか。

庄八。火鉢のまへで煙草を呑んでゐまして、お駒さんは酔つて寝てゐるといふやうなお話でございます。

長次郎。文吉だけが起きてゐて、お駒は屏風のなかに寝てゐたといふのだな。

庄八。左様でございます。

(藤五郎と長次郎は顔を見あはせる。)

藤五郎。(文吉を頤にて指す。)よく調べてみる。

長次郎。おい、文吉。庄八の云ふ通りか。

文吉。お駒は少し酒をのみ過ぎまして、正體もなく寝入つて居りました。わたくしはもうそろそろ歸り仕度をしなければなりませんので、火鉢の前で煙草をのんで居りますところへ、庄八さんが油をさしに參つたのでございます。

(藤五郎は眼で知らせれば、長次郎はうなづく。)

長次郎。この野郎。うそをつくな。お駒は酔つて寝てゐるなんて云やあがつて、貴様はもう其時にお駒を締めてしまつたのだらう。どんなに酔つてゐたか知らねえが、馴染の客が起きて歸るといふのに、相方の女が平氣で寝そべつてゐる筈がねえ。なあ、庄八。さうぢやあねえか。

庄八。(返事に困つて。)さあ、併し二階のれんじ窓が毀れてゐましたのを見ますと、下手人は外から忍び込んだやうにも思はれますが……。

長次郎。櫃子窓をこはして置いて、外から這入つたやうに見せ掛けるなどは、よくある手で珍らしくねえ。それも文吉が遣つた仕事だらう。横着者め。

文吉。(あわてゝ)先刻も申上げました通り、それは皆さま方のお見込みちがひで、わたくしは決してそんな覚えはございません。

藤五郎。いつまで同じことを云つてゐるやあがるのだ。(長次郎に。)そいつに繩をかけろ。

長次郎。さあ、神妙にしろ。

(長次郎は文吉に繩をかける。)

おさだの仇討

文吉。

(いよ／＼慌てる。)たとひ何と仰しやいまして、わたくしは全く覚えのないことで……。

長次郎。

お繩は幾重にも御勘辨をねがひます。

藤五郎。

えい、やかましい。ぐづ／＼云やあがると、引つばたくぞ。

長次郎。

さあ、痛い目を見ないうちに、素直に云つてしまへ。

文吉。

さあ、野郎。引つばたくぞ。(十手をふりあげる。)それでも覚えのないことは申上げ様がありません。これ、おさだ。お前、なんとか申譯をして呉れないか。

おさだ。

(冷かに。)あたしは何んにも知らないんですもの、どうにも申譯をして上げやうが無いぢやありませんか。

文吉。

でも、わたしは無實のぬれ衣をきて、かうしてお繩にかゝつてしまつたのだ。

おさだ。

あたしもお氣の毒には思つてゐるんですけど、お役人様の前で自分の知らないことを何とも云ひやうがありませんからね。

文吉。

(恨めしさうに。)おまへは知らないといふのか。

おさだ。

(平氣で。)知りません。全くなんにも知りませんよ。

文吉。

(藤五郎はおさだと文吉の様子に眼をつけてゐる。)わたしが縛られて牢屋へ送られて、どんな拷問を受けるやうになつても、お前はどうしても知らないといふのか。

おさだ。

いくら何と云つても、知らないものは仕方がないぢやありませんか。

藤五郎。

えい、埒が明かねえな。長次郎、かまはずに引つばたけ。

長次郎。

ほんたうに往生際の悪い奴で、餘計な手数をかけやあがる。さあ、云へ。云はねえか。(長次郎は十手にて文吉を二つ三つ打つ。)

文吉。

(叫ぶ。)申上げます、申上げます。

長次郎。

早くいへ。(又打つ。)

文吉。

云ひます、云ひます。申上げます。(息をついて。)お駒を殺しましたのはわたくしではございません。そこにあるおさだでございます。

伊兵衛。

(おどろいて進み出づ。)え、おさだが……。 (おさだに。)これおさだ。お前はほんたうにそんな怖ろしいことをしたのか。

おさだ。

飛んでもない。なんであたしがそんなことをするもんですか。あの人が切端つまつて、自

おさだの仇討

分の罪を人になすり付けようとするんですよ。もし、お役人様へ申し上げます。わたくしは女の身で怖ろしい人殺しなぞを致す筈がございません。まして不慮から仲よしのお駒さんを殺すなぞとは、思ひも付かないことでございます。この儀は幾重にもお察しをねがひます。

文吉。

いえ、その女が殺したに相違ございません。わたくしが手水にまゐりまして、それからお駒の部屋へ戻つて來ると、おさだは屏風のなかから出てまゐりまして、お駒はあたしが殺したのだと、自分の口から申しました。

おさだ。

(屹となつて) まあ、呆れた。おまへさんは途方もない云ひがかりをする人だねえ。あたしに何の恨みがあつて、そんな濡れ衣を着せようとするんですえ。

文吉。

え、おれこそ飛んだ濡れ衣をきて、こんな情ない目に逢つてゐるのだ。これ、頼むから正直に白狀してくれ。

おさだ。

いくら頼まれたつて、覺えもないことを白狀が出来るもんですかね。今まではよもやと思つてゐたが、そんな云ひがかりをする以上は、やつぱりお前さんがお駒さんを殺したに相違ない。(泣聲をふるはせる) お前さんはまあ見掛けによらない怖ろしい人だ。あんなおと

なしのお駒さんをむごたらしく絞め殺して、まあ何といふ鬼のやうな人だらう。もう一度お役人様に申し上げます。唯今までは黙つて居りましたが、この文吉さんはお駒さんとは年も違ひますし、お店者のくせに酒の上は悪し、おまけにお金遣ひも悪いので、ふだんからお駒さんに嫌はれ抜いてゐたのです。それはわたくしがよく知つて居ります。ゆうべも屹とお駒さんに手ひどく振りつけられて、その口惜しまぎれに手暴いことを致したものと思ひます。お駒さんのかたきはわたくしの仇も同様でございます。どうぞお上のお力を持ちまして、わたくし共のかたきが討てますやうに、何分おねがひ申します。

(藤五郎はおさだにちつと眼をつけて、なか／＼しつかり者だといふ思入。)

文吉。

いえ、その女の申すことは皆いつはりでございます。お駒はたしかにおさだに殺したに相違ございません。

おさだ。

いえ、おまへさんが殺したに相違ない。お役人様の前でよくもそんな白々しいことが云はれたものだ。

文吉。

おまへこそ白々しい。そんな女とは今まで些とも知らなかつた。

おさだ。

あたしもお前さんがそんな怖ろしい人とは、今まで夢にも知らなかつた。

おさだの仇討

文吉 へい、なんであらうともお前が殺したのだ。

おさだ いへい、おまへさんが殺したのだ。

藤五郎 さういふらしい。控へろ、控へろ。

長次郎 おたがひになすり合つてゐちやあ仕様がねえ。とんだ對決だ。どつちが仁木彈正だか、お

れたちが今捌いてやるから、靜にしろ、靜にしろ。

(おさだと文吉は控へる。藤五郎と長次郎は顔を見あはせて、おさだも怪しい奴だといふ思入。)

藤五郎 これ、庄八。おまへが油さしに行つたあとで、おさだがお駒の部屋へ出這入りしたのを見

なかつたか。

庄八 先刻も申上げました通り、お駒さんの部屋で文吉さんとお話をして、それからだんくりに

ほかの部屋をまはつて居りましたので、それからあとの事はなんにも存じません。

長次郎 おめえは文吉かおさだから何か鼻薬でも貰つてゐやあしねえか。

庄八 どう致しまして……。決してそんなことはございません。

長次郎 隠してゐると、貴様も飛んだことになるぞ。

庄八 まことに困りましたな。(伊兵衛に)もし、旦那。何とか云つて下さいませんか。

伊兵衛 いや、わたしにも何とも云ひやうがないのだ。

(下のかたより和泉屋のせがれ伊之助、廿二三歳。お駒の弟徳松を連れて出づ。徳松は前髪にて、
農家の子。)

申上げます。

伊之助

藤五郎

伊兵衛

長次郎

藤五郎

伊之助

お駒の宿許は目黒でございますので、取りあへず知らせて遣りますと、母はあひにく病中

で、弟の徳松といふのが駆け付けてまゐりましたので、兎もかくも一緒に連れて出まして

ございます。

長次郎

伊之助

長次郎

おさだの仇討

伊之助は云はうとして躊躇し、長次郎に「こつちへ来てくれといふ。長次郎進みよれば、伊之助は紙につゝみたる銀のかんざしを出して、長次郎にそつと見せ、それはおさだの物だと囁く。」
むい、さうか。

長次郎。
（長次郎はかんざしを取つて眺めながら藤五郎の前に置く。）
藤五郎。
このかんざしがどうしたのだ。

（おさだはそれを横目に見て、ぎつくりしながら黙つてゐる。）
それがお駒の寢床のなかに落ちてゐたさうでございます。
伊之助が見つけたのか。

長次郎。
旦那の前ではつきりと云はなけりやあいけねえぜ。

伊之助。
（思ひ切つて。）實はお駒が死んでゐると聞きました、わたくしが眞先に駆け付けてみますと、死骸の倒れてゐる夜具のなかに、其のかんざしが落ちてゐたのでございます。

伊兵衛。
そんなものが落ちてゐたのか。それならなぜ早くに云はなかつたのだ。

伊之助。
自分の店から繩つきを出したくないと、一旦は隠して置きましたが、どうもそれでは濟まない事だと存じまして、改めてお届けに出したのでございます。

藤五郎。
では、この主は判つてゐるのだな。

伊之助。
わたくしには見おほえがございます。

藤五郎。
女の物だから外の奴が落したのぢやあるめえ。内の者が。

伊之助。
はい。（躊躇してゐる。）

藤五郎。
見覚えがあると云つたぢやあねえか。

伊之助。
はい。

藤五郎。
小じれつてえ奴だな。（十手で疊を叩く。）早く云へ。

長次郎。
（引つ取つて。）それはおさだの品ださうでございます。

藤五郎。
さうか。（おさだを屹と見る。）

おさだ。
いゝえ、違ひます。それはわたくしの物ぢやあございません。

藤五郎。
伊之助。これは確におさだの品だな。

伊之助。
今から半月ほど前のことでございます。わたくしが下の廊下でそのかんざしを拾ひまして、これは誰のだと申しますと、おさだが駈けて参りまして、それはわたしのだと申して受取つて行きました。おゝ、さうだ。庄八もそのときに見てゐたな。

庄八。(かんざしを覗いて。)さうでございます。それはおさださんの品に相違ございません。
おさだ。(向き直る。)おまへさん達は寄つて集つて、あたしを罪に落さうとするんですかえ。そのか

んざしはあたしの物ぢやありませんよ。
庄八。若旦那のいふ通り、そのかんざしはお前の物だよ。

おさだ。おまへさんは何んにも知らないくせに、若旦那と口をあはせて餘計なことをお云ひでないよ。そんなかんざしは世間に幾らもあらあね。

庄八。それぢやあお前のかんざしを見せて貰はう。お前のはどこにある。
おさだ。あたしは初めからそんな簪をさしてゐたことはありませんよ。若旦那がそんな物を何處か

らか持ち出して来て、好い加減な嘘をこしらへて、お役人達をだまさうとしても、皆さんにはちやんと眼があるから、嘘か本當かはすぐに判りますよ。

伊之助。これおさだ。わたしが好い加減な拵へ事をして、お役人達をだまさうとするとは何の事だ。現在自分のものを眼の前に見せられながら、まだづうくしくシラを切つてゐるとは、呆れ返つた大膽者、なるほどこれでは人殺しも仕兼ねまい。ふだんは正直さうな顔をしてゐながら……。もし、お父さん。この女ばかりは案外でした。

伊兵衛。おれも實におどろいた。これ、おさだ。もう斯うなつたら仕方がないから、身に覚えのあることならば、素直に白状してお慈悲を願つたらどうだ。

おさだ。旦那までがそんな事を……。どの人も、どの人も、みんなあたしを悪者にして……。口惜しい、口惜しい。どうしたらよからうねえ。(泣き伏す。)

藤五郎。(笑ふ。)そんな芝居をしても始まらねえ。この頃は御見物が伶俐口になつてゐるぞ。(長次郎に。)それ、繩をかける。

長次郎。手前はなかくしつかり者だな。
(長次郎は立寄つて繩をかけようとすれば、おさだは慌て、叫ぶ。)

おさだ。まあ、待つて下さい。待つて下さい。まだ申上げることがございます。

長次郎。なんだ。なんだ。たとひ三日でも奉公すれば、自分の主人でございますから、その人の恥になるやうな事は

おさだ。云ふまいと思つてゐましたが、もう斯うなつては云はずにはゐられません。若旦那にはお春さんといふお嫁さんがありながら、大勢の人の眼を忍んで、わたくしに無理なことをいふのでございます。

おさだの仇討

伊之助。(おどろく。)わたしがお前にいつそんな事を云つた。

おさだ。

いつと云つて、それはもうたび／＼のことでございます。おれの云ふことを肯けば、一軒の家を持たせて圍ひ者にしてやるの、一生面倒をみて遣るのと、色々親切らしく云つてくれましたけれど、わたくしはこんな性分でございますから、いつも好い加減に受け流して居りますと、このあひだの晩などは無理にわたくしを土藏のなかへ連れ込んで、手籠めにしようと致すのでございます。

伊之助。

(いよく驚いて怒る。)こいつ實に途方もない奴だ。お役人様、こんな氣ちがひの申すことは決してお取上げにならぬやうに願ひます。

おさだ。

お取上げにならうが、なるまいが、云ふだけのことは皆んな云ひます。なんほ主人の威光でも、孱弱い女を手籠めにしようとは、あんまりな致し方でございますから、わたくしも一生懸命になつて大きい聲をあげますと、その庄どんが駆けてまゐりました。

庄八。

嘘をつけ。おれがそんなことを知るものか。

おさだ。

いえ、おまへさんは確に知つてゐる筈です。それでも人が來たもんですから、若旦那も流石に極まりが悪いとみえて、そのまゝこそ／＼と行つてしまひました。わたくしも其時

伊之助。

にいつそ暇を取つてしまへば好かつたのですが、こんな商賣をして方々を渡りあるくのも忌だと思ひまして、まあ辛抱してゐたのでございます。すると、今度のお駒さんの一件が降つて湧いたので、若旦那はふだんの意趣晴らしに、ありもしない事をこしらへて、わたくしを科人に落さうと巧んだものに相違ございません。もし、若旦那。(泣く。)なんほあたしがお前さんの云ふことを肯かないからと云つて、人ごろしの罪を塗り付けるとはあんまりぢやありませんか。こんな事であたしが萬一お仕置にでもなつたら、屹とおまへさんを執り殺すから、さう思つておいでなさいよ。

(伊之助は羽織をぬいで、おさだに掴みかゝらうとするを、伊兵衛と庄八は支へる。)

伊兵衛。

これ、これ、ほかの場所とは違ふぞ。こゝで無暗なことをしたら、理を以て非に落ちるやうなことになるではないか。

伊之助。

でも、あんまり憎い奴で……。

おさだの仇討

庄八。 お腹も立ちませうが、まあ、まあ、御料簡なさいまし。あんな病犬には構はないが宜しうございます。

おさだ。 なにが病犬だよ。お役人様、御覽ください。自分にうしろ暗いことがあるので、とても口ではかなはないと思つて、あの通り手出しをいたします。それが論より證據ぢやありませんか。

伊之助。 え、なにを云やあがるのだ。

(伊之助は急いで又立ちかゝらうとするを、庄八は抱きとめる。)

おさだ。 こしらへ事をして人を訴へたものは、重いお咎めを受けると聞いて居ります。(長次郎に) どうぞあの人にお繩をおかけ下さい。

長次郎。 よし、よし。繩をかけてやるから覺悟しろ。

(長次郎はおさだの腕を捉へて、うしろへ捻ぢ廻さうとする。)

おさだ。 (ふり拂つて) あれ、あたしぢやありませんよ。あの人ですよ。まあ、だれでもいい、からおとなしくしろ。

おさだ。 いけません、いけません。あたしはお繩をうける覺えはないんですよ。

(おさだは突きのけて逃げかゝるを、長次郎は追ひかけて無理に繩をかける。)

長次郎。

どうもしぶとい女だな。

藤五郎。

そんな奴は行儀の悪いことをして困らせるかも知れねえ。前をはだけねえやうに縛つてしまへ。

長次郎。

(番太郎に) 繩はねえか。

番太郎。

はい、はい。(番太郎は臺所より繩を持ち來れば、長次郎はおさだの前の開かぬやうに、着物の上から兩膝をくゞる。)

おさだ。 おまへさん、一體あたしをどうするんですよ。

藤五郎。 どうするものか。これから貴様を吟味するのだ。(長次郎に) もう判つたから、そつちの繩を解いてやれ。

(長次郎は文吉の繩を解く。)

文吉。

はい、はい。ありがたうございます。これ、おさだ。女の猿智慧でどう云ひぬけようとしても、お役人さまの眼は曇らぬ鏡だ。恐れ入つて何も彼も白状してしまへ。

おさだの仇討

おさだ。 幾度云つても同じことで、覚えのないことが白状出来るもんですか。(泣く)あたしは何の因果でこんな目に逢ふのか。大勢の男が女ひとり云ひ籠めて、無理無體に繩をかけて…。弱い者いぢめにも程があります。

長次郎。 なにが無理無體だ。どつちが無理か、今にわかることだから待つてゐろ。もし、旦那。

藤五郎。(長次郎は藤五郎の顔をみて、引つばたかうかと問へば、藤五郎はうなづく。) 女だと思つて甘くしてゐると方圖がねえ。小ツピどく毆れ、なぐれ。

長次郎。 さあ、おれたちは冗談にこんな事をしてゐるんぢやねえから、さう思へ。

長次郎。(長次郎は十手にておさだの脊を打つ。おさだはあつと叫んで倒れる。) 大方そんなことだらうと思つた。(番太郎に。)こいつを引摺り起せ。

(番太郎はおさだを引き起せば、長次郎はつゞけて打つ。)

長次郎。 さあ、白状しろ。

藤五郎。 和泉屋のお駒は貴様が殺したに相違あるめえ。痛い思ひをするだけ損だぞ。早く云へ。

長次郎。 云つてしまへ。(長次郎は又打つ。おさだは轉けながら叫ぶ。)

おさだ。 お慈悲でございます。お慈悲でございます。

長次郎。 お慈悲をねがひたければ、素直に云へ。

おさだ。 なんにも存じません。知りません。

長次郎。 知らねえことがあるものか。早く申上げろ。(又打つ。)

おさだ。 申しません。申しません。まつたく無貫の罪でございます。

長次郎。 強情な奴だな。こん畜生、水を喰らはせるぞ。(番太郎に。)手桶を持つて來い。

(番太郎は臺所より手桶に柄杓を添へて持つて來る。)

藤五郎。 まあ、待つて、待つて。往來の店先でそんな騒ぎをするのも見つともねえ。いくら強情を張つても、そいつの仕業にきまつてゐるのだ。大番屋へ引摺つて行つて、改めて調べることにしよう。伊之助、庄八。

二人。 はい。

藤五郎。 文吉。

文吉。 はい。

藤五郎。 みんな引合ひだから、八町堀まで一緒に來い。

おさだの仇討

三人。はあ。

長次郎。さあ、立て。(おさだを引起す。)

(徳松は先刻より黙つて窺ひるたるが、このとき少しく進み出づ。)

徳松。(伊之助に。)では、いよくこいつが姉さんを殺したのでございますか。

伊之助。むい。かたきの顔を一度見せてやらうと思つて、お前をこゝへ連れて來たのだ。よく見ておけ。

徳松。こいつ、よくもおれの姉さんを殺しやあがつたな。

(徳松は穿いてゐる藁草履をぬいで、おさだに打つてかゝらうとするを、長次郎は十手にて支へる。)

長次郎。とんだ犬坊丸だ。いくら仇でも、むやみに手出しをしちやあならねえ。

おさだ。(見かへる。)まつたく飛んだ犬坊丸だね。おまへはその草履であたしをぶつ氣かえ。眼に一杯のなみだを溜めて、お前はそんなに口惜しいのかえ。

徳松。口惜しいのは當りまへだ。お前はなんで姉さんを殺したのだ。譯をいへ、譯を云へ。(詰める。)

おさだ。勿論殺すだけの譯があつて殺したのだが……。おまへとしては恨むのも無理はない。あた

しも實に恨んだからねえ。(徳松の顔を見る。)今までは根限りに強情を張り通してみたが、さすがにお役人の眼は高い。どうしてもあたしと仕業の見きはめられてしまつたらしいから、所詮あきらめるより外はあるまい。いつそお前の見てゐる前で、さつぱりと白状しませうよ。

伊兵衛。白状する……。では、やつぱりお前の仕業に相違ないのだな。

おさだ。はい、相違ありませんよ。(長次郎に。)この通り白状いたしましたから、どうぞ膝だけはお弛めください。

(長次郎はおさだの兩膝の繩を解く。)

藤五郎。(笑ふ。)たうとうお前もあきらめたか。随分世話を焼かせたな。

おさだ。恐れ入りました。ございます。

藤五郎。そこで、お駒をなぜ殺した。

おさだ。昨年十月、和泉屋の店さきで御旅の寅藏といふ者がお召捕りに相成りましたを御存じでございませうか。

藤五郎。御旅の寅藏……。むい、知つてゐる。それはおれが召捕つたのだ。

おさだの仇討

おさだ。 え、あなたが……。 (今更のやうにみる。) これも何かの因縁とでもいふものでせうねえ。

藤五郎。 では、おまへは其の寅藏の身よりの者か。

おさだ。 わたくしは寅藏の女房でございます。

藤五郎。 む。 (うなづく。) それでお駒を殺したのか。

おさだ。 おわかりになりましたか。

藤五郎。 判つた、わかつた。

おさだ。 筋違ひかは存じませんが、わたくしと致しましては亭主のかたき討でございます。 鬼の女

房に鬼神とやらで、女だてらに人殺しをするとは、定めて怖ろしい奴だとの思召もござ

いませうが、いよく本意を遂げるまでには、なみくの苦勞ではございませんでした。

(涙をうかべる。) どなたもお察しく下さいまし。 かたきを討つて、すぐに名乗つて出れば宜

しいのでございましたが、やつぱり女の未練から色々のお手数をかけまして、重々恐れ入

りました。

藤五郎。

よく白状した。 亭主のかたき討と申しても、おまへは罪人の女房で、人を恨むは逆恨みだ

ぞ。 殊に上に對して御奉公を相勤めた和泉屋のお駒を殺害した以上は、おまへにも覺悟は

あるだらうな。

おさだ。

伊之助。 それは覺悟いたして居ります。 なにとぞ御法通りのお仕置をお願い申します。

伊兵衛。 今まで些つとも知らなかつたが、お前は亭主のかたき討であつたのか。

さう聞くと、又なんだか可哀さうにもなるな。

徳松。

(伊之助に。) では、わたしの姉さんの方が悪かつたのでございませうか。

いや、姉さんが悪いといふわけでもなし……。 わたしにも何と云つていゝか判らなくなつ

て來た。

おさだ。 やつぱりあたしが悪いんです。 (徳松に。) たとひ姉さんを殺されても、お前のかたきはお上

で立派に討つて下さるから仕合せといふもの。 あたしのかたきは誰も討つてくれる人がな

いので、悪いと知りつくこんなことに……。 (ほろりとして。) いや、そんな愚痴はよしませ

藤五郎。

重罪人とはいひながら、夫婦の情愛はおれにもまんざら判らねえことはねえ。 せいぐ、劬

つてやるからさう思へ。

おさだ。 ありがたうございます。
 伊兵衛。 いや、傳馬町へ送りとなつたら、わたしも出来るだけの世話をしてやりますよ。
 おさだ。 何分おねがひ申します。
 藤五郎。 (長次郎に。) さあ。

(長次郎は繩を取つておさだを引立てる。伊兵衛等はみな頭を下げる。時の鐘。浪の音うすくきいゆ。)

幕

雷
火

昭和二年十月作。
昭和三年二月。歌舞伎座初演。

初演當時の主なる役割——青山因幡守（市村羽左衛門）中川圖書（市川左團次）
吉見彌七郎（市川猿之助）平野市兵衛（市川左升）中川の奴源次（市川荒次郎）
同く源八（坂東羽太藏）茶坊主七阿彌（市川米左衛門）淀君の靈（坂東秀調）内
藤頼母（市川莚升）奥山孫四郎（坂東村右衛門）服部角之進（河原崎長十郎）本
多勘助（市川段猿）生田半藏（市川團次郎）など。

登場人物——青山因幡守。中川圖書。吉見彌七郎。平野市兵衛。内藤頼母。奥山孫四郎。
服部角之進。本多勘助。生田半藏。中川の奴源次。おなじく源八。茶坊主七阿彌。淀君の
靈。ほかに屋敷の女中。醫師。武士大勢。女小姓。馬丁など。

第一幕

(一)

徳川四代將軍家綱の時。寛文四年十二月。大晦日の夜。
大阪城内、番士の詰所。正面は大形の襖。左右もおなじく出入の襖。よきところに屏風、刀掛け
などもあり。まん中に大火鉢を据ゑて、燭臺三つほどを置く。
（平野市兵衛、内藤頼母、奥山孫四郎、服部角之進、本多勘助の五人、いづれも番士、上下すがた

雷

火

にて、火鉢を圍みゐる。すこし離れて吉見彌七郎と生田半藏の二人が燭臺の下で棋盤にむかつてゐる。お城坊主七阿彌がその勝負をのぞいてゐる。時計の音きこゆ。平野は古參にて四十前後、他はみな二十代の若者と知るべし。

七阿彌。(口を出す)どうもこの石が悪うござりましたな。

吉見。やかましい。だまれ、だまれ。

七阿彌。でも、これは確に悪うござりますよ。

吉見。む。(かんがへる)これはどうもおれが悪かつたかな。生田などを相手にしてこんな筈はないのだが……。

生田。いや。おれを相手にするから、そんなことになるのだ。貴公などは矢はりそこらにゐる筈棋仲間を相手にしてゐればいゝのだ。

内藤。(みかへる)なんだ、なんだ。生田が何か大言を吐いてゐるやうだな。

服部。大阪方に負けては關東の名折れだ。おれが加勢して遣らう。

奥山。いや、生田、負けるな。おれが味方をしてやるぞ。

本多。おれも加勢をしてやらう。

(四人は起ちかゝるを平野は制す。)

平野。いや、もう止せ、止せ。兎かくに關東と大阪が二手に分かれて、何かに付けていがみ合ふのは宜しくないことだ。第一お夜づめの御番に出てるながら、棋や將棋を弄ぶといふのが間違つてゐる。おれも大抵は大目に見て置くが、こんなことが上役へ聞えらるとお互ひの爲にならんぞ。七阿彌。

七阿彌。

平野。はあ。貴様はふだんから口の軽い奴だが、こんなことを無暗にしゃべつてはならんぞ。

吉見。さうだ、さうだ。われくがお夜詰めの節に棋や將棋をさしてゐるなどと吹聴したら、唯

は置かないからさう思へ。(七阿彌の胸ぐらをつかむ。)

七阿彌。これはひどい。あなたは負け腹でござりますか。

吉見。なにが負け腹だ。おれはまだ負けてはゐるのではないか。眼をあいて物をいへ。(七阿彌を

突き倒す。)

平野。えい、もう止せといふのに……。さあ、みんなこつちへ來い。(七阿彌に)棋盤や石などは

早く片附けてしまへ。一體貴様がそんなものを持ち出して來るから悪いのだ。馬鹿な奴

雷 火

七阿彌。

はい、はい。

(七阿彌は棋盤や石を片付けて、早々に下のかたへ立去る。風の音。)

お、風が吹く。今夜はなかく寒いな。

内藤。

それでも此頃は火があるから仕合せだ。このあひだまではお夜詰めに火鉢はなかつたのだ。

奥山。

火が無くては難儀だな。

服部。

戦場のことを考へれば、なんでも無いやうなものだが、太平無事のお夜詰めに火の気が無

本多。

併しこの火も表向きに許されてゐるのではないから、あまり大きい聲でそんな噂は出来な

平野。

いぞ。

それだから皆んなも粗相のないやうに、火の元をよく氣をつけてくれ。

中川。

(風の音。下のかたの襖をあけて、中川圖書、廿七八歳。やはり番士のこしらへにて出づ。)

吉見。

どうもひどい風になつたな。

こゝにゐても風の音がきこえる位だから、外は定めてひどからうな。

中川。

(坐る。)こんな晩には何事があるかも知れないと思つて、そこらを一巡見はまつて来たが、風の強いには驚いた。うかくてゐると吹き倒されさうだ。

生田。

さうして、空模様はどうだ。

中川。

あまりに風が強いので、星も吹き飛ばされてしまつたらしい。

内藤。

それでは闇か。

中川。

星ひとつ見えない眞の闇だ。その暗いなかで風が吹き暴れる。なんだか物すごいやうだぞ。

平野。

今夜は大晦日だといふのに、そんな天氣では町家の者も困つてゐるだらうな。

服部。

今年も先づこれでお仕舞だ。一夜明けたらどんな春が来るかな。

奥山。

なにしろ明日の朝までにはこの風をやませたいものだ。元日早々から大風などは餘りめで

たくないぞ。

平野。

不思議な廻りあはせで、おれは去年の大晦日にもお夜詰の番にあつて、こゝで除夜の鐘を聞いたが、今夜もまたこゝで聴かなければならない。若い時にはそれほどにも感じなかつたが、此頃になると月日の立つのがひどく早いやうに思はれるな。

本多。

平野氏もまだそれほどのお年でもござるまい。

平野。

いや、貴公達とは桁ちがひで、實盛ならば鬚髭を黒く染めようといふ所だ。は、は、は、は。

(夜まはりの拍子木の音。風の音。)

内藤。

夜番の奴も寒がつて顫へてゐるとみえて、拍子木の音がいつもほどに冴えないではないか。風が強いので、木の音も吹き消されるのだ。なにしろ今夜の風は唯事でない。もう一度そこらを見まはつて来ようか。(不安らしく起ちかゝる。)

吉見。

おれもなんだか不安心になつて来た。一緒に行かうか。

平野。

中川が今見まはつて来たばかりだ。殊に夜まはりも歩いてゐるのだから、この寒いのに又出ることもあるまい。もう少し夜が更けてからにしたら好からう。

吉見。

それではもう少し後にしようか。中川もまあ坐れよ。

中川。

む、(座に戻る。併しどうもひどい風だな。この大きい城が揺れるやうだ。)

生田。

いや、氣のせるでさう思はれるのだ。どんな大あらしが吹いて来ても、この城が揺れてたまるものか。

内藤。

しかし元和の城攻めに、味方から大筒をつけて撃ちかけた時には、流石のこの城も大地震のやうにぐらぐらと揺いだといふではないか。

奥山。

どんなに堅固に出来てゐる城でも、むやみに大筒を撃ちかけられては堪るまいな。

平野。

まあ、まあ、安心するがよい。今の太平の世の中に、この城へ向つて大筒を撃ちかけるやうな奴は先づあるまいよ。

吉見。

たとひ撃ちかけるやうな奴があつたところが、武士が大筒などを恐れてゐて、どうなるのだ。大筒の音を聴きながら、悠々と晝寝をしてゐるやうでなければ、まことの勇士とは云はれないぞ。

本多。

(笑ふ。)大筒の音は恐れないかも知れないが、雷の音はどうだな。

吉見。

む、雷か。(急に悄ける。)それを云はれると、さすがのおれも一言も無い。どういふものか、生まれつきで雷ばかりは實に閉口だ。我ながら意氣地がないと思ひながら、あのごろごろといふ音を聞くと、からだ自然に凍んでしまふのが不思議だ。

服部。

おれの友達にも貴公とおなじやうな男があるが、こればかりは人間の強い弱いとは別物で、かみなりを聞くと忽ちに顔の色が變るといふのは、まつたく本人の生まれ付きだな。

内藤。

吉見は時平公の末孫でもあるまいが、兎にかく貴公の先祖が何か天神さまに悪いことでもしたのかも知れないぞ。

吉見。みんなに笑はれるのが口惜いから、なんとかして無理に矯め直さうと思つてゐるが、どうしてもこればかりは今に直らない。困つたものだ。

奥山。併しまあ安心しろよ。あしたは元日で當分は雷の鳴るやうな心配はないからな。

(風の音。中川はまた不安らしく耳をかたむけて、又起ちかゝる。)

中川。あゝ、雷などはどうでもいいが、今夜の風はなんだか氣になるな。どうしてこんなに吹くのだらう。

生田。中川はまた頻りに風を氣にするのだな。吉見の雷嫌ひは今もいふ通りだが、貴公もこの頃は風が嫌ひになつたのか。

中川。いや、別に嫌ひになつたと云ふわけでもないが……。どうも氣になつてならない。鳥渡行つて見まはつて來よう。(又起ちかゝる。)

平野。まあ、待て、待て。中川、貴公は此頃どうも可怪いぞ。このあひだの晩は雨が強く降ると云つて、ひどく氣にしてゐるが、今夜はまた風が吹くと云つて氣にしてゐる。さう一々に雨や風を氣にしてゐるでは際限が無いではないか。

(中川はだまつてゐる。他の人々も中川の様子に眼をつけてゐる。下のかたより七阿彌は盆に茶碗

七つを乗せて出づ。)

七阿彌。お湯を召上りませ。

平野。むゝ。(茶碗を取る。)

(七阿彌は他の人々に茶碗を配つて廻ると、中川の分が不足してゐるのに氣が付く。)

七阿彌。あ、これは申譯がござりません。中川様はあとからお出でなされたので、今夜は七人様だとばかり思つて居りました。唯今すぐに持つてまいります。

中川。いや、おれは飲みたくもないから わざ／＼持つて來るには及ばないぞ。

七阿彌。左様でござりますか。どうも失禮をいたしました。

(七阿彌は挨拶して下のかたへ去る。)

内藤。實はおれもさう思つてゐるのだが、中川は此頃どうかしてゐるやうだな。何處か身體でも悪いのか、それとも何か苦勞でもあるのか。

中川。貴公達にはさう見えるか。

服部。平野氏も云はれた通り、どうも貴公の様子が可怪いと云つて、われ／＼も内々で噂をしてゐたのだ。

雷 火

中川。さうかな。(考へる)やはりおれが弱いのだな。

吉見。では、ほんたうに仔細があるのか。

中川。(溜息をついて)あるな。

本多。あるのか。

中川。吉見の雷嫌ひは生まれつきで仕方もないが……。おれはまつたく自分が弱いからだ。臆病

だからだ。おれはこんな弱い人間ではなかつた筈だが……。

どうもわからないな。なにが弱いのだ、何が臆病なのだ。

(思ひ切つて)いつそ云つてしまはうか。

吉見。む、なんだか知らないが、云つてしまへ、云つてしまへ。世間へきこえて悪いことなら、

おれ達は決して他言はしない。(一同をみまはす)なあ、さうではないか。

一同。さうだ、さうだ。

中川。實はおれも云ひたくてならないのを、けふまで我慢してゐたのだ。それだからいけない。

おれはますく弱くなるのだ。今夜は丁度大晦日だから、今年のこととは今夜のうちに云つ

てしまつた方がいと思ふ。みんなもまあ聞いてくれ。

一同。む。

(一同は形をあらためる。風の音)

中川。どうもあの風の音が忌だな。まあ、い。話といふのは先づ斯うだ。(云ひかけて又もや一同

をみまはす)貴公達はあの奥御殿の不入の間に這入つたことがあるかな。

奥山。誰が這入るものか。あすこには淀殿の霊が残つてゐるといふので、堅く出入りを差止めら

れてゐるではないか。

平野。では、中川。貴公はあの不入の間へ近寄つたのか。

中川。はい。

一同。さうか。(顔をみあはせる)

中川。おれも好んで近寄つたといふわけでもないが、今年の九月の末、雨風の強い晩のことだ。

おれが奥御殿の近所を見まはつてゐると、雨風のなかで笛の音が冴えてきこえる。

吉見。笛の音がきこえたか。

中川。そこで、おれも不思議に思つた。この城内で、しかもこの夜更けに、笛などを吹く者のあ

らう筈はない。と思つたときに、不圖おれの胸に浮んだのは、不入の間だ。あの広い座敷

雷 火

には淀殿の靈が棲んでゐるといふので、誰も這入つたものがない。今夜の笛も若しや彼の不入の間から洩れてきこえるのではないかと思ひついたので、おれは窃と足音を偷んで、笛の音をたよりに奥へ奥へと忍んでゆくと、案の通りその笛の音は不入の間から襖越しにひいて來るのだ。(云ひかけて一同をみかへる。)その時に貴公達なら何うする。

さあ。(顔をみあはせる。)

一同。

そこまで行つた以上、おれならば襖をあけて見る。

吉見。

明けて見る……。それがやはり人情かな。おれも一旦は躊躇したが、耳をすますと笛の音

中川。

はいよく、冴えてきこえる。襖の隙間から覗いてみようとしたが、内は暗くて判らない。

そこで、おれは考へた。淀殿などと云つたところで、所詮は徳川家に敵對して、この大阪城でほろびた女だ。むかしはこの主であらうとも、豊臣秀頼のおふくろであらうとも、今の世のわれわれが畏れ敬ふには及ばないことだ。まして其のたましひとか亡靈とかいふものに遠慮は無用だと、おれも思ひ切つて……。

平野。

(眉をよせる。)襖をあけたか。

中川。

明けました。

一同。

それからどうした。

中川。

あけて見ると、内は眞暗だ。

吉見。

なんにも見えなかつたか。

中川。

いや、その暗いなかでも人の形だけは浮き出したやうにはつきりと見えて、正面の上段の間には緋の袴をはいて襦袢をきた上臈風の美しい女が坐つてゐた。

吉見。

それが淀殿か。

中川。

その傍には切禿の女小姓が二人……。ひとりには行儀よく坐つてゐて、ひとりは笛を吹いてゐるが、おれが襖をあける途端に、笛の音は俄に止んでしまつた。いや、こゝでおれは正直に白状するが、その上臈が屹と向き直つたときの顔……。美しいといふのか、氣高いといふのか、物すごいといふのか、おれもなんだか怖ろしくなつて、思はずそこに平伏すると、やがてその上臈が斯ういふのだ。その方はこゝをいづことも存じてまゐつた。無禮者め、退れ、退れ……。かうなると、残念ながらおれはどうすることも出来ない。云はれる通りにおめく引き退らうとすると、上臈は又よびとめて、今夜のことを必ず他言するな。萬一餘人に洩らすときは、この城内にたちまち禍が起つて、その方の命もないと思へ。

雷 火

一同。

(ため息をつく。)ふむう。

中川。

それを聞くと、おれは日頃の元氣もどこへやら、襟もとから冷水を浴びせられたやうにぞつとして、早々にそこを出て来たのだ。

吉見。

いつもの貴公にも似合はぬことだ。そこで刀をぬく氣にはなれなかつたか。

中川。

さう云はれると實に面目ないが、どうしても其時には刀に手をかける氣になれなかつたのだ。いや、其時ばかりではない。それから後も雨や風の晩には、なんだか氣が落付かないやうで何うも困る。(耳をかたむける。)あゝ、まだ風が吹いてゐるな。

吉見。

それで貴公は今夜の風を氣にしてゐるのか。不入の間のことはおれも豫て聞いてゐるが、そこに淀殿が坐つてゐるたか。

中川。

勿論、相手が名乗つたわけではないが、あれが淀殿に相違あるまいと思ふのだ。

吉見。

むゝ。(かんがへる。)暗いなかで人の姿が見えたといふのは不思議だ。貴公のこゝろの迷ひから、そんな幻が眼に映つたのではないか。

平野。

いや、見えたかも知れぬ。おそらく本當に見えたのだらう。

内藤。

してみると、やはり本當かな。

平野。

本當であつても仔細はない。向ふには向ふの世界がある。我々には又われわれの世界がある。お互ひにかゝり合のないことだから、不入の間は不入の間として、唯そのまゝにして置けばいいのだ。上の御趣意も大方はさうであらう。こゝで改めて云ひ渡して置くが、貴公達も中川の眞似をして、みだりに不入の間などへ立寄つてはならんぞ。

一同。

はあ。

(風の音いよゝゝ烈しくなりて、襖がぐらゝとゆれる。)

奥山。

風がいよゝゝ強くなつて来たな。

服部。

中川の話が聞かされたせるか、この風の吹くなかで笛の音が遠くきこえるやうではないか。

本多。

おれも實はさつきからさう思つてゐるのだ。

生田。

貴公にもきこえるか。おれにも何だか聞えるやうだ。

内藤。

おれにも聞える。

奥山。

おれにもきこえる。

中川。

むゝ。きこえる。笛の音が確かにきこえる。

雷 火

(一同は耳をかたむける。風の音。)

平野。おれに聞えるのは風の音ばかりで、笛の聲はきこえぬが……。

吉見。いや、聞える。きこえます、

平野。きこえるかな。

(平野も耳をかたむける。風の音。襖がゆれて、燭臺の火が一つ消える。)

中川。あ、火が消えた。

(ついでに他の燭臺の火もみな消ゆ。)

一同。消えた、消えた。

(それぎりで一同沈黙。風の音。闇中に道具變る。)

(二)

城内の奥庭。庭には松の大樹その他の樹木あり。正而は長廊下。第一場とおなじ夜にて、暗きなかに風の音のみ高くきこゆ。

吉見。(下のかたの木立のあひだより吉見彌七郎忍び出づ。笛の聲遠くきこゆるに、吉見は耳をかたむける。)

中川の話は嘘でない。どこかで笛の音がきこえるやうだ。

(吉見は左右をうかがひながら行きかゝれば、上のかたの木立のあひだより中川圖書が忍び出で、あやふく吉見に行き當らうとして、たがひに透しみる。)

中川。誰だ。

吉見。だれだ。

中川。吉見ではないか。

吉見。中川か。

中川。貴公はなにに來た。

吉見。さういふ貴公は何しに來た。

(ふたりは互ひに返答に躊躇してゐると、笛の聲、正面の廊下が薄明るくなりて、まん中に淀の方、左右に切禿の女小姓付き添ひてあらはる。小姓のひとりば笛を吹いてゐる。中川と吉見はそれを見て、思はず進み寄らうとすれば、淀の方は呪む。)

雷 火

淀の方。

又まるつたか。無禮者め。

(中川と吉見はその威に打たれたやうに又躊躇する。風の音。)

幕

第二幕

(一)

大阪城内、中川圖書の長屋。あまり廣からぬ座敷と知るべく、上のかたに床の間ありて、これに東照宮の軸をかけ、三寶にのせたる鏡餅を供へ、ほかに鎧櫃、刀掛けなどもあり。柱には輪かざりを掛けてあり。下のかたには出入りの襖。庭には早咲きの梅などありて、下のかたには枝折戸。その外には他の長家の塀などみゆ。

女一。

(第一幕の翌年、寛文五年正月二日の午後。中川の源次は酒に酔ひたる體にて、相長家の若い女中ふたりと羽根をついてゐる。源次は羽根をうけ損じて幾たびか落す。)

源次さんは随分下手でござんすな。

女二。

なんほ男でも、おまへのやうな下手な人もないものぢや。

源次。

下手にも上手にも、この通り酔つてゐちやあ埒がねえ。もう好い加減に止めだ止めだ。(羽子板を投げ出す。)

女一。

あれ、人から借りたものを土の上に投げ出すといふことがあるものかいな。(羽子板を捨てて抱へる。)

源次。

借りた物でも何でも、要らなくなりやあ抛り出すに不思議はねえのだ。(睨む。)

女二。

は、大きい眼をむき出してをかしいわいな。

女一。

おまへのやうな奴がそこらの木の枝に引つかつてゐたわいな。

女二。

は、は、は、は。

源次。

いくら正月だと云つて、むやみにけらく笑ふ奴等だ。はふり出して悪けりやあ、その羽子板をみんなこつちへ遣せ。おれが大事に仕舞つて置いてやらあ。さあ、出せ、出せ。

(源次はふたりの羽子板を無理に引つたり、小胸にかへて枝折戸のうちに入れば、女ふたりは追つて入る。)

女一。

これ、これ、それを持つて行つてどうするのでござんす。

雷 火

源次。(縁に腰をかける。)來年の正月までおれが預かつて置いてやるのだ。ありがたいと思へ。
女二。飛んでもないことを……。今日はまだ二日ではござんせぬか。

源次。二日でも三日でもかまはねえ。いつそ殿様のお供をして歸るまで預かつて置いて、江戸の女のみやげにするかな。あゝもう大阪にも倦きた、倦きた。早く江戸のお屋敷へ歸りてえな。

女一。江戸のお屋敷は立派でござんすかえ。

源次。あたりめえよ。大阪の御番を仰せ付かつて、遠い旅の空へ來てゐればこそ、こんな燧石箱

のやうなお長屋に住んでゐるが、おれの殿様は二百五十石のお旗本で、江戸には立派なお屋敷がござるのだ。嘘だと思ふなら、連れて行つて見せてやりてえ。

女二。お屋敷には奥様もあるのかえ。

源次。あるとも、あるとも、若い美しい奥様がお有りなさるのだ。御用だから仕方もねえが、江戸と大阪とに引き分かれて、奥様もさぞおさびしいことだらう。それを思ふと、まつたくお氣の毒だ。

女一。(笑ふ。)お前はなかく忠義者でござんすな。

源次。

たとひ寒晒しの一文奴でも、武家奉公をしてゐる以上は、忠義を忘れてなるものか。あゝ、早く江戸へ歸りてえ。あゝ酔つた、酔つた。

(源次は羽子板を縁側に置いたまゝでころりとなる。女ふたりは顔のみあはせ、笏とその羽子板を取つて、ぬき足をして下のかたへ立去る。源次はやはり寝てゐる。下のかたより吉見彌七郎、年禮の緒すがたにて出づ。)

吉見。

頼む。(云ひながら内をのぞく。)おゝ、源次は寝てゐるな。

(吉見は内に入りて、源次を呼び起す。)

吉見。

これ、源次。いかに正月でも晝間から酔ひ倒れてゐる奴があるものか。起きろ、起きろ。

源次。

(ぼんやりと眼をあくる。)はい、はい。お歸りなさいまし。

吉見。

えい、寝ほけるな。おれだ、吉見だ。

源次。

(氣がつく。)おゝ、吉見様でござりましたか。飛んだ失禮をいたしました。

吉見。

主人はどうした。まだ歸らないのか。はい。町方の知り人のところへ年禮に出まして、まだ戻つてまゐりません。(空をみる。)な

源次。

んだか空模様が可怪くなつてまゐりましたな。

雷 火

吉見。

むい。大晦日の宵から吹き出した大風が元日の夕方まで吹き通して、やうく鎮まつたかと思ふと、今日はまた朝から晴れたり曇つたりして、おだやかでない空模様だな。もしや雷でも鳴るのではあるまいか。

源次。

(笑ふ。)吉見様、御冗談ばかり……。けふは正月の二日でございます。

吉見。

正月でも雷鳴がないとは限らぬ。おれは今朝から何うもそんな気がしてならないのだ。

源次。

あなたは雷がお嫌ひなので、さう思召すのでござりませう。

吉見。

雷が嫌ひなものには早く感じる。(空をみる。)どうしても近いうちに雷だな。

源次。

さうでござりませうか。

源八。

(吉見は顔をしかめる。源次はうつかりと空をながめる。下のかたより中川圖書はやはり年禮のすがたにて、奴源八を連れて出づ。)

源八。

お歸り。

源次。

(源次は出て會釋する。)

源次。

お疲れでござりませう。

中川。

早朝から十四五軒をまはつて來たので、すこし疲れた。大阪へまるつてからまだ一年ほど

吉見。

にしかならないのだが、知り人がだんくに殖えて來たので、年始廻りがなかく忙がい。あしたも朝から出まはらなければなるまい。(云ひながら吉見を見る。)お、吉見。貴公も年始まはりか。

中川。

おれも朝から廻禮に出たが、空模様が可怪くなつて、なんだか心持がよくないので、途中から歸つて來た。

中川。

まつたく天気模様がよくないな。まあ、あがれよ。

源八。

今日はお出かけになりませんか。

中川。

けふはこれぎりだ。おまへも疲れたであらう。あつちへ行つて休息しろ。

源八。

はい、はい。(源八は枝折戸を出て、家のうら手にまはる。中川は吉見をみかへり、連れ立つて縁をあがる。)

源次。

唯今お茶の仕度をいたします。

中川。

(源次は大きい火鉢を二人のあひだに持ち出して、奥に入る。)

中川。

きのふの元日は風が吹きつゞけて随分寒かつたが、けふは幾らか弛んだやうだな。

吉見。

むい。(うつむいてゐる。)

雷 火

中川。今聞けば、心持がよくないので途中から歸つて來たと云つたが……。どうした。かぜでも引いたか。

吉見。かぜを引いたやうでもないが、唯なんとなく気分が悪いのだ。今も源次と話してゐたところだが、この天氣が雨が雪になつて、今夜あたりは雷が鳴るな。

中川。雷が鳴るかな。(疑ふやうに空をみる。)

吉見。よほど大きい雷が鳴りさうだ。

中川。おれは貴公と違つて、雷の鳴るのは別に驚きもしないが、此頃は雨や風が嫌ひになつた。ゆうべから風がやんで、少し気がおちついたかと思ふと、今夜はまた雨かな。なるべく雪にして貰ひたいものだ。

吉見。江戸の正月もこんな天氣だらうか。

中川。百里以上も離れてゐるのだから、こゝと同じではあるまい。江戸は案外に長閑な好い正月を迎へてゐるかも知れないぞ。

吉見。おれはまだ獨身で、江戸には差したる身寄りも眷族もないから、不斷は別になんとも思はないが、正月や節句などには矢張り江戸が戀しいやうに思はれるな。

中川。それが故郷忘じ難しとか云ふのだらうよ。

吉見。とりわけて貴公などが江戸を忘れては、奥方に相濟むまいぞ。はゝゝゝ。併しおたが

中川。ひの辛抱ももう一年ばかりで、來年の正月は江戸で迎へるのだ。

吉見。む、來年の正月は自分の生まれた屋敷で屠蘇を祝へるのだ。

中川。おなじ御奉公なら江戸のことだな。

源次。やはり公方さまのお膝元がなつかしいな。

吉見。(奥より源次は茶を運び出づ。)

源次。(吉見に茶をすゝめる。)どうぞ召上つて下さいまし。

吉見。どうだ。おまへも江戸が戀しくないか。

源次。戀しくないどころか、一日も早くお供をして歸りたいと祈つて居ります。

吉見。だれも彼も同じことだな。まあもう些との辛抱だ。

源次。左様でござります。どうぞ御ゆるり。

中川。(源次は會釋して奥に入る。二人は茶を飲む。)

中川。どうだ。気分は直つたか。

雷 火